

靈界物語 第六一卷 山河草木 子の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六十一卷』愛善世界社

2007(平成19)年11月04日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵

目次

序文じよぶん

第一篇 ときは常磐の松まつ

第一章 しんゑん神苑 〔一五五〕

第二章 しんゑい神影 〔一五五〕

第三章 しんうん神雲 〔一五五〕

第四章 神田しんでん〔一五五四〕

第五章 神山しんざん〔一五五五〕

第二篇 神國みくにの春はる

第六章 神天しんでん〔一五五六〕

第七章 神地しんち〔一五五七〕

第八章 神臺しんたい〔一五五八〕

第九章 神行しんかう〔一五五九〕

第一〇章 神嚴しんげん〔一五六〇〕

第三篇 白梅しらうめの花はな

第一一章 神浪しんらう〔一五六一〕

第一二章	神徳 <small>しんとく</small>	〔一五六二〕
第一三章	神雨 <small>しんう</small>	〔一五六三〕
第一四章	神服 <small>しんぷく</small>	〔一五六四〕
第一五章	神前 <small>しんぜん</small>	〔一五六五〕

第四篇 風山雅洋ふうざんがやう

第一六章	神英 <small>しんえい</small>	〔一五六六〕
第一七章	神月 <small>しんげつ</small>	〔一五六七〕
第一八章	神人 <small>しんじん</small>	〔一五六八〕
第一九章	神恵 <small>しんけい</small>	〔一五六九〕
第二〇章	神郷 <small>しんきやう</small>	〔一五七〇〕

第五篇 春陽自來しゅんやうじらい

第二章	神花	(一五七一)
第二章	神日	(一五七二)
第二章	神暉	(一五七三)
第二章	神泉	(一五七四)
第二章	神家	(一五七五)

序文 じよぶん

靈界物語六十一の還曆祝ひ、口述者も筆記者も皆松雲閣に集まりて、靈主體從  
れいかいものがたりろくじふいち ぐわんれきいは こうじゆつしや ひつきしや みなしようんかく あつ れいしゆたいじゆう  
 第一卷編輯の時の苦心を追懐しながら、小雲川の水音、松風の響きに心膽を洗ひ  
だいいつくわん へんしふ とき くしん つめくわい こくもがは みなおと まつかぜ ひび しんたん さら  
 清め、瑞月、隆光、明子を初め鶴殿親子、柳原燐子、小倉貞子の三女人相並びて  
きよ むづあげつ たかてる はるこ はじ つるとのちかこ やなぎはらあきこ をぐらさだこ さんによにあひなら  
 今日けふの生日いくひを祝いはひつつ初夏しよかの新緑しんりよくに醉よふ。

大正十二年五月十日

於松雲閣

第一篇 常磐の松ときはまつ

第一章 神苑しんゑん〔一五五〕

第一

一

わが魂たましひは永久とこしへの  
光ひかりにあひて醒さめにけり  
神かみの御國みくにのおん爲ために  
力ちから限りに仕つかへ奉まつらむ。

二

あだにすごせし現世の時をつぐのひたてまつり  
また來ぬ良き日を樂しみて 誠の道に進むべし。

三

神のよさしの神業に 仕へまつりて後の世の  
靈魂の生命の備へをば 具さに固めおけよかし。

四

神の敏き目は照り渡る 常夜の暗を押わけて  
月日のかぶとを身に纏ひ 勇み戦かへ神の子等。

五



靈魂みたまも榮さかえて永とこし久へに  
我皇神わがすめかみの大前おほまへに  
御稜威みいづかしこみ仕つかへ行ゆく  
天津使あまつつかひともろ共ともに。

第二

一

あした夕ゆふべを  
月日つきひとともに  
いづの光ひかりを  
御魂みたまにうけて  
清きよき恵めぐみを  
日ひに夜よにさとる。

二

あした夕ゆふべに  
めぐみの露つゆは  
神かみの幸さちをば

魂たまきよ清めむと  
御空みそらゆくだる  
日ひに夜よにさとれ。

三

あしたゆふべに  
きよめすまして  
まつりしたから

言み行おこなひ心を  
たてまつりなば  
まさしめ玉たまはむ。

四

あした夕ゆふべに  
人ひとをめぐみて

爲なす身みのつとめ  
吾わが身みにかたば

神かみに進すすまむ

御階みはしとならむ。

五

あした夕ゆふべに

救すくひをいのり

あゆみただしく

大道おほみちすすめ

天津御國あまつみくにに

昇のぼらせたまふ。

第三

一

夜よるの守まもりと現あれませる

月つきの御神みかみのかくろひて

朝日あさひの光かげはうららかに  
スメール山ざんに輝かがやきぬ  
吾等われらの靈れいにも皇神すめかみの  
光ひかりをたまへと願ねぎ奉まる。

二

我皇神わがすめかみと相あひともに  
今日けふの生いく日を迎むかへずば  
朝あしたも夜半よはの心こころ地ちせむ  
神かみに従したがふわれれに  
あさなあさなに輝かがやき坐ませよ。

三

尊たふとき神かみの御姿みすがたを  
吾等われらが身魂みたまに照てらしまし  
罪つみに穢けがれし暗やみの世よを  
明あかし清きよめて永遠とこしへに  
恵めぐみの光ひかりを玉たまへかし。

第四

一

堅磐かきはときは常磐じょういはに動きうごなき

仁慈みろくの神かみの御恵みめぐみは

旭あさひの豊榮とよさかのほ昇のぼるごと

天地あめつち四方よもに輝かがやきぬ

光ひかりの主ぬしと現あれませる

皇大神すめおほかみの御力みちからは

吾世わがよの迷まよひの叢雲むらくもを

四方よもに搔かき別わけ村肝むらぎもの

心こころの暗やみを晴はらします

伊都いづの恵めぐみぞ畏かしこけれ。

二

世人よびとの智慧ちゑは賢さかしくも

斯世このよをのろふ魔神まががみの

醜しこのたくみは覺さとり得えじ

神かみより出いでし眞心まごころの

礎いしずかたく搗つきかため  
仁みろく慈かみの神ひとは人の身みに

神かみのまにまに進すすみなば  
無むげん限みちの神から力ちからたまふべし。

三

朝あしたにそよぐ風かぜの音ねに  
夕ゆふひ日の映はゆる大空おほぞらに  
日ひ々に新あらたに救すくひの神かみの  
吾わが身みの上うへぞ樂たのしけれ。

深ふかき御み旨むねを聽ききさと  
清きよき望のぞみを寄よせながら  
伊い都づの御み姿がた伏ふし拜をがむ

第五

吾<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>を照<sup>てら</sup>す大<sup>おほ</sup>御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>  
家<sup>や</sup>内<sup>ぬち</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>も草<sup>くさ</sup>枕<sup>まくら</sup>

夜<sup>よる</sup>と晝<sup>ひる</sup>との別<sup>わか</sup>ちな<sup>なく</sup>  
旅<sup>たび</sup>に<sup>に</sup>出<sup>い</sup>づ<sup>る</sup>も俱<sup>とも</sup>に<sup>に</sup>坐<sup>ま</sup>す。

二

朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>昇<sup>のぼ</sup>りて世<sup>よ</sup>の業<sup>わざ</sup>に  
吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を照<sup>てら</sup>す皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は

勤<sup>いそ</sup>しみ勵<sup>はげ</sup>む時<sup>とき</sup>の閒<sup>ま</sup>も  
身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の幸<sup>さち</sup>を<sup>を</sup>守<sup>まも</sup>ります。

三

都<sup>みやこ</sup>大<sup>おほ</sup>路<sup>ほぢ</sup>の八<sup>やち</sup>衢<sup>また</sup>に  
仁<sup>みろく</sup>慈<sup>く</sup>の神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>を<sup>を</sup>ば

さまよひ騒<sup>さわ</sup>ぐ人<sup>ひと</sup>中<sup>なか</sup>も  
聞<sup>き</sup>くぞ嬉<sup>うれ</sup>しき神<sup>かみ</sup>の國<sup>くに</sup>。

四

今日の一日をいそしみて 果てし夕べの楽しみは  
高天原のパラダイス 皇大神と俱にあり。

五

たまきの如くにめぐる日を 神に祈りて楽しげに  
送る人こそ天國の 神の使と俱にあり。

第六

一

世人を愛む我御神

夕べの空に打惱む



罪つみと穢けがれと窮とほしき乏せきを  
憐あはれみ玉たまひて御み惠めぐみの  
臥ふしど床いこに息よふ夜よの世せ界かい

御み前まへに告つぐる人ひとの身みを  
露つゆ細こまやかに降ふらせまし  
安やすく守まもらせたまへかし。

二

大おほ空そら包つつむ叢むらくも雲の  
面おもを表あらはし玉たまひつつ  
青あを人ひと草ぐさをもねもごろに  
畏かしこみ感かん謝しゃし奉たてまつる。  
暗くらき夜よ半はをも仁じん愛あいの  
まどろみ玉たまふ暇ひまも無なく  
守まもらせ玉たまふ大おほ稜みいづ威

三

苦くるしき病やまひと滅ほろ亡びとは

神かみの御み子こ等らの身みに迫せまり

死しの矢やは激はげしく飛とび來くとも  
吾われ等らを厚あつく守まもりまし  
恐おそる事ことは世よにあらじ。  
皇すめらみ御かみ神とともと俱ともにあれば  
盾たてとあれますエンゼルは

四

たとへ吾われ等らの寢ね室やの床とこ  
なりて吾わが身みを圍かこむとも  
呼よび覺さまされて永とこ遠しへの  
輝かがき仰あふぎ奉まつるべし。  
夜よの閒まに落おちて奥おく津つ城きと  
天あま津つ日ひの神かみの御み光ひかりに

第七

一

いと静かに夕日影  
消え行く見れば亡き友の  
倂のこる胸の中  
吾身に迫る夜のとばり。

二

世は水泡の夢なれや  
消えて跡なき人の身も  
神の恵に活かされて  
楽しく榮ゆる神の國。

三

かくり世遠しと人は言はめ  
誠一つの麻柱の  
真心通はぬ里やあらむ。

四

空そらに輝かがやく數あまた多たの星ほしに  
忍しのぶも神みくに國くにの道みちしるべ

友ともの靈みたま魂たまの何いづれぞと  
仰あふぎて友ともの幸さちいのる。

## 第八

一

神かみの御み名なをば稱たたへつつ  
誠まことの神かみの御み光ひかりよ  
沈しづむ日ひ影かげと諸もろ共ともに。  
隱かくれたまひそ山やまの端はに  
今け日ふの一日ひとひを送おくりけり

二

冬ふゆと夜よるなき高たか天原あまはらの  
魂たまかがやける神使みつかひの  
宇豆うづの神歌みうたぞゆかしけれ。  
神かみの御國みくにの寶庫みくらの前に  
琴ことの音ねに合あふ言靈ことたまの

三

言靈ことたま鈍にぶきわが舌したは  
節ふしをあやまりあぢきなき  
あまりに高たかき皇神すめかみの  
もつれからみて怪あやしくも  
吾手わがては調しらへを仕つかへ得えず  
稜威みいづに怖おぢし苦くるしさよ。

四

皇大神すめおほかみよ大神おほかみよ  
奇くすしき御手おんての觸ふれまさば  
搔亂かきみだされしたましひの  
絲いとの音色ねいろもさやさやと

天津御國の神人の

琴の音色に劣らまじ。

五

青人草のたましひも  
人の一世を安らかに  
心の底よりうたふなる

日々の業をも浄めまし  
榮え守らせ玉へかしと  
たたへの歌とならしめよ。

六

夕べを知らぬ身とならば  
同じ調べのこと糸に

天津使も人もみな  
聲を合せてたたふ可し。

第九

一

天津日影は西山に  
かくれて四方の山々は  
暗の戸扉に包まれぬ  
吾身にやどる魂は  
いとも淋しく成りにけり  
寄るべなき身も皇神に  
たよる心に榮えあり。

二

吾身の生命暮ちかく  
淋しさ迫る夕暗路  
世はいろいろと移り行く  
いや永遠に變らざる  
誠の神よ吾と共に  
仁愛の心に宿りませ。

三

斯この世よの暗やみのものすごく  
またたく暇ひまも去さりまさず

惡魔あくまの誘惑いうわくいや繁しげし  
神かみよ吾身わがみに宿やどりませ。

四

死しの魔まの力ちからいづこそや  
神かみに叶かなひし人ひとの身みは  
御神みかみよ吾等われらと俱ともにあれ。

如何いかなる死しの魔まも恐おそれむや  
神かみは吾等われらと俱ともにあり

五

心こころひそめて閉とづる眼めに

仰あふぐ千座ちくらの置座おきくらを



忝かたじけなみて涙なみだぐむ  
御神みかみよ吾等われらを守りませ。  
榮光さかえの吉日よきひの來きたるまで

第一〇

一

吾靈わがたましひ魂たまの清きよければ  
永遠とこほに宿やどらせ玉たまひつつ  
瑞みづの御靈みたまの更すく生ひぬ主し  
夜よるなき身み靈たまと爲なし玉たまふ。

二

静しづけき夜よな夜よな安やすらけく  
臥床ふしどに寝いぬる度たびごと毎ごとに

神かみの添そへ乳ぢの安い息こひをば  
畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる。

俣しのばせたまへ惟かむながら神

三

夜よると晝ひるとの別わかちなく  
生いくる甲か斐ひなく幽かく界りよに

御み神かみの吾われと居ゐますば  
到いたるも道みちなき人ひとの身みよ。

四

皇すめ大おほ神かみの御み教をしへに  
仁じん慈じの御み手てを伸のべ玉たまひ  
招まねかせ玉たまへ神かみの國くにへ。

反そむきて暗やみに迷まよふ子こを  
玉たまの御み聲こゑもすずやかに

五

貧<sup>まつ</sup>しき人<sup>ひと</sup>を富<sup>と</sup>ませまし  
救<sup>すく</sup>ひなぐさめいたづきの  
いと平<sup>たひら</sup>かに臥<sup>ふ</sup>させませ。

憂<sup>うきせ</sup>瀬<sup>せ</sup>に落<sup>お</sup>ちし人<sup>ひと</sup>草<sup>くさ</sup>を  
身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>を看<sup>み</sup>護<sup>と</sup>り大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に

六

來<sup>く</sup>る日<sup>ひ</sup>のあした眼<sup>め</sup>さめなば  
冬<sup>ふゆ</sup>と夜<sup>よる</sup>なき天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>國<sup>くに</sup>の  
進<sup>すす</sup>ませ玉<sup>たま</sup>へと伏<sup>ふ</sup>し拜<sup>をが</sup>む。  
清<sup>きよ</sup>き旅<sup>たび</sup>路<sup>ぢ</sup>に恙<sup>つつが</sup>なく  
吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>を祝<sup>いは</sup>ひ導<sup>みちび</sup>きて

第一一

一

今日けふの生いく日の御み惠めぐみを  
今宵こよひも御み心こころに吾わが身み魂たま

稱たへ奉まつるぞ嬉うれしけれ  
頼たよらせたまへ安やすらかに。

二

今日けふの一日ひとひのあやまちを  
心平こころあたひらにやすらかに  
御胸みむねに眠ねむらせ玉たまへかし。  
直日なほひに見みな直なほし詔のり直なほし

三

聖きよき御み蔭かげに現うつ身そみの  
心新こころあらたに勇いさましく

魂たまを休やすめて村肝むらきもの  
眼まなこさまさせ玉たまへかし。

四

嵐あらしに寒さむき奥津城おくつぎを  
やすく迎むかふる信真あななひの

臥床ふしどの如ごとく暖あたたかく  
清きよき心こころを給たまへかし。

五

いと嚴おそかにかがやける  
花はな咲さき蝶てふ舞まふ春はるの日ひの  
仰あふぐ靈魂みたまとなさしめ玉たまへ。

神かみの審判さばきの御座みくらをも  
長閑のどかな庭にはと嬉うれしみて

第一二

一

あたり静けき夕の空に 琴のしらべもさやさやと  
 心ゆくまでうたひつ舞ひつ 天津御國の寶座の前に  
 進ませ玉へや瑞御魂。

二

天津日影も臥床に入りて 悪魔の囁く頃にしあれば  
 委ねまつらむ千萬の 今日まで蒔きし種々を。

三

善悪もうつし醜きもの皆の 色も形もことごとく

見え<sup>み</sup>ずなり行く<sup>ゆ</sup>時は<sup>とき</sup>來<sup>き</sup>にけり。

四

日<sup>ひ</sup>毎<sup>ごと</sup>夜<sup>よ</sup>毎<sup>ごと</sup>に皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は  
清<sup>きよ</sup>き尊<sup>たふと</sup>き仁<sup>じん</sup>愛<sup>あい</sup>の  
畏<sup>かしこ</sup>き神<sup>み</sup>業<sup>わざ</sup>も世<sup>よ</sup>の<sup>ひと</sup>人の  
目<sup>め</sup>に現<sup>あら</sup>はさで潛<sup>こもり</sup>水の<sup>すい</sup>  
深<sup>ふか</sup>くもかくさせ玉<sup>たま</sup>ひぬる。

五

百<sup>も</sup>千<sup>ち</sup>萬<sup>よろづ</sup>の鳥<sup>とり</sup>つばさ  
ねぐら求<sup>もと</sup>むる夕<sup>ゆふ</sup>まぐれ  
人<sup>ひと</sup>は家<sup>いへ</sup>路<sup>ぢ</sup>に歸<sup>かへ</sup>り行く<sup>ゆ</sup>  
時<sup>とき</sup>こそいと静<sup>しづか</sup>なれ。

六

いともしも畏き皇神よ  
神の御國に進みなば  
神祖の御許に安らかに  
謹みかしくみ願ぎ奉る。

吾等が現世の旅を終へ  
靈魂の清き故郷の  
いこはせ玉へ惟神

(大正一二・五・一 舊三・一六 加藤明子録)

第二章 神影〔一五五二〕

第一三

一



天津日影は西天に  
煙の如くうすれ行く  
淋しき夕べ世の中の  
業に放れて瑞靈と  
神の望みを語らまし。

二

御目に暗なき光の神よ  
深く包みし吾身の罪を  
遺る隈なく細やかに  
心平に示しませ。

三

罪も穢れも無き身を以ちて  
千座の置戸を負ひ玉ひ  
人のなやみを清めます  
瑞の御靈よ吾なやみ  
かへりみ玉へ救はせ玉へ。

四

いつか吾身は現世出でて  
移り變らぬ月日の光を

夜なき國へ到りなば  
心樂しく仰ぎ見む。

第一四

一

皇大神の給ひてし 今日けふの生日いくひも暮くれにけり  
いざいざさらば晨あしたの如ごとく 瑞みづの御靈みたまや嚴いづ御靈みたま  
尊たふとき御名みなを稱たたへまし。

二

神かみの光ひかりに向むかつて動うごく  
 大地だいちに住すめる神かみの子こは  
 常世とこよの暗やみに勝かちにけり。  
 大海原おほうなばらに浮うかびたる  
 神かみの光ひかりに照てらされて

三

次第しだい々々しだいに夜よのとばり  
 青人草あをひとぐさは悉ことごとく  
 神かみの御徳みとくを賞ほめ稱たたへ  
 歌うたひ眼めさめて朝あさ夕ゆふに  
 神かみに祈いのりの絶たえ間まなく  
 榮さかゆも嬉うれし五み六ろ七くの代よ。  
 明あけゆく國くに々くに島しま々しまの

四

勞つかれ休やすめと人ひとの子こに  
別わかれたまひし日ひの神かみは  
西にしの洋なだなる友とも垣がきを  
神かみの御み國くにに誘いざなひて  
永と遠はの眠ねむりを醒さまします。  
神かみの御み國くにに誘いざなひて

五

興こう亡ぼう常つねなき現うつし世よの  
數あまた多たの國くにと事ことかはり  
いいや永と遠こしに榮さかえ行ゆく  
神かみの御み國くにぞ尊たふとけれ。

第一五

一

神かみの力ちからの晝ひる去さりて 惠めぐみの露つゆの下くだります  
安やすけき夜よとはなりにけり いざこれよりは御み惠めぐみに  
抱いだかれ樂たのしく休やすらはむ 仁じん慈じ無む限げんの瑞ず靈れいの  
いと暖あたたかきふところに。

二

朝あしたの空そらに日ひの神かみの 輝かがやき渡わたり玉たまふまで  
曇くもりもあらぬ神み使つかひの 夢ゆめ路ぢを進すすませ玉たまへかし  
尊たふとき守まもりの一ひと夜よさを。

三

病やまひになやむ貴うづの子こや 囚とらはれ人びとは言いふも更さら

親おやなき子こども供せ背せの君きみの  
いとたふとも尊たふとき仁じん愛あいの  
せめては夢ゆめの中なかなりと。  
御み姿すがたあらはし玉たまへかし  
頼たよりさへ無なき人妻ひとつまに

四

生いく言こと靈たまの助たすけにて  
何いづ處くの果はてに至いたるとも  
休やすらひぬべき處ところなし  
現あらはれ出いでし天地あめつちは  
皇すめ大神おほかみを外ほかにして  
あゝ皇すめ神かみよ主すの神かみよ。

第一六

夕日ゆふひの名な殘ごり刻こく々こくに  
惠めぐみの露つゆの白しら玉たまも  
あゝ天地あめつちの大神おほかみよ  
うまらつばらに完全つばらに聞き召こしせ

山やまの尾を上のへにうすれ行ゆきて  
草くさ木きの花はなに宿やどるなり  
御み前まへに捧ささぐる太ふ祝と詞り

二

災わざはひ多おほき現うつし世よの 諸もの歎なげきも皇すめ神かみの  
惠めぐみの露つゆに浸ひたされて 切せつなる祈いのりの栞しをとなし  
黒あや白めも分わかぬ暗やみの夜よも 靈れい肉にく脱だ離つりの關くわん門もんも  
恐おそれず撓たゆまず永とこ遠とはに 見みぬ夜よの光ひかりに吾わが魂たまを  
照てらさせ玉たまへと願ねぎまつる。

三

常夜の暗に包まれし  
山海河野のその如く  
吾世の望みは消えぬれど  
ほの見え初めし星影の  
上なき望みぞいと高く  
天津御空にかがやきぬ。

四

木の間に洩れし月光の  
御池の面に澄渡る  
静けき清き御姿に  
神習はめや吾心  
今宵の息もやすやすと  
休ませ玉へ瑞御魂。

第一七

一



瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の生<sup>あ</sup>れませる  
今日<sup>けふ</sup>の生<sup>いく</sup>ひの足<sup>たる</sup>日<sup>ひ</sup>こそ  
實<sup>げ</sup>にも目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>き限<sup>かぎ</sup>りなれ  
吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>は神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>みに  
この日<sup>ひ</sup>を迎<sup>むか</sup>ふる嬉<sup>うれ</sup>しさよ。

二

救<sup>すく</sup>ひの神<sup>かみ</sup>と現<sup>あ</sup>れませる  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
豊<sup>とよ</sup>の明<sup>あか</sup>りのこの宴<sup>うたげ</sup>  
今<sup>いま</sup>まのあたり開<sup>ひら</sup>かれぬ  
いざ諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に  
心<sup>こころ</sup>樂<sup>たの</sup>しく進<sup>すす</sup>みなむ。

三

皇<sup>すめ</sup>大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>の永<sup>とこ</sup>遠<sup>とは</sup>に  
鎮<sup>しづ</sup>まり坐<sup>い</sup>ます神<sup>かみ</sup>の家<sup>や</sup>に  
住<sup>す</sup>める一日<sup>ひとひ</sup>は許<sup>こ</sup>々<sup>こ</sup>多<sup>た</sup>久<sup>く</sup>の  
罪<sup>つみ</sup>に穢<sup>けが</sup>れて世<sup>よ</sup>を渡<sup>わた</sup>る

あはれ果敢なき樂みの

千代にも優る思ひかな。

四

御前に侍る今日の日の  
瑞の御靈や嚴御靈  
楽しく吾世を送るべし。

清き心を心とし  
神の御言をかしこみて

第一八

一

七日の旅路もいと安く

過ぎて御前に参る詣で

かしこみ仰ぐ今日こそは  
休ませたまふ吉き日なり。

高天原の神人も

二

嚴と瑞とのあがなひの  
仁慈の顔を向けたまひ  
直日に見直し宣り直し  
あゝ惟神々々  
御靈幸はへましませよ。

神に頼りて祈りなば  
諸の罪咎あやまちを  
安きに清めたまふべし

三

清き祭に集へる人に  
瑞の御靈の口を藉り  
神は涼しき御聲もて  
明き神國に導きて

限り知られぬよろこびと  
身魂を慰め玉ふこそ  
實にも尊き極みなれ。  
榮光を授け惱みたる

四

大國常立大神は  
稱へ奉れる吾魂と  
榮譽を與へたまひつつ  
豊の宴に手を曳きて  
高き恵みを朝夕に  
俱に坐しまし限り無き。  
天津御國の賑しき  
進ませ玉ふぞ嬉しけれ。

第一九

一

清きよき尊たふとき今日けふの日ひを  
父ちちと母ははとの皇すめ神かみの  
神かみの御み子こ等たち諸もろ共ともに  
安やすく迎むかへて信まめ徒ひとが  
貴うづの御み前まへに相あひ集つどひ  
厚あつき惠めぐみの雨あめ祈いのる。

二

神かみの御み國くにのおん爲ために  
今日けふはこの身みの生いの命のちの爲ために  
聖きよき休やすみ日みを樂たのしまむ。  
十たりの日ひ足あしを早はや送おくり  
身みも魂たましひもいさぎよく

三

きよき朝あしたに夙とく起おき出いでて  
鹿か兒ご自じ物もの膝ひざ折をり伏ふせ  
鵜う自じ物もの頸うな根ね突つきぬきて  
神かみの御み前まへに眞まじ心こころささげ

恩頼みたまのふゆを仰あふぎつつ

神かみの清きよめを受けまつる。

四

現世うつしよに居あて眞道まみちを歩あゆみ  
榮光さかえに充みてる神かみの國くに

昇のぼる人ひとこそ尊たふとけれ。  
旅路たびぢ終をはりて歡喜よろこびと

第二〇

一

國常立くにとこたちの大御神おほみかみ  
集つどひて御名みなを稱たたへつつ

瑞みづの御靈みたまの大前おほまへに  
心清こころきよむる樂たのしさは

何なににたとへむものもなし  
あゝ惟かむながらかむながら神々々  
恩みたまのふゆ頼ありがたぞ有難ありがたき。

二

瑞みづの御みたま靈かむばしらの神柱  
慕したひまつれる眞まごころ心の  
調しらべは正ただしくス・スワゝラ ポーヂーサツトワゝの琴ことの音ねに  
通かよふが如ごとく樂たのしけれ。

三

朝あさひ日の豊とよさか榮かのほ昇あがる時とき  
現このよ世ゆふへを創つく造くりたまひたる  
元もとの御みおや祖かみの神おもを思おもひ  
夕ゆふへに瑞みづの御みをしへ教をを  
學まなぶ吾わが身みぞ樂たのしけれ。

四

さかしら爲せる人々に  
 對して愚に見る智慧も  
 清き尊き神の子の  
 召されし身にはいと強き  
 神の給ひし力なり。

五

皇大神の御めぐみを  
 知る人ぞ知るよるこびの  
 雨はこの日も新しく  
 降りそそぐこそ尊けれ。

六

我皇神の御在舎は  
 いとも尊く美はしく



榮光さかえの花はなは咲さきみちぬ  
心こころの底そこより慕したはしき。

瑞みづの御み靈たまの玉たまの座ざは

第二一

一

清きよめの神かみの御み光かりも  
強つよくかがやく今日けふこそは  
諸ものなやみも癒いやされむ  
心こころ嬉うれしく樂もしく  
常とこ世よの春はるの如ごとくなり。

二

荒<sup>あら</sup>き風<sup>かぜ</sup>吹<sup>ふ</sup>き浪<sup>なみ</sup>猛<sup>たけ</sup>る  
心<sup>こころ</sup>平<sup>たい</sup>らに安<sup>やす</sup>らかに  
吾<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>ぞ樂<sup>たの</sup>しけれ。

海<sup>うな</sup>路<sup>ぢ</sup>を免<sup>のが</sup>れ村<sup>むら</sup>肝<sup>き</sup>の  
神<sup>かみ</sup>の港<sup>みなと</sup>に進<sup>すす</sup>み行<sup>ゆ</sup>く

三

荒<sup>あら</sup>野<sup>の</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>にさまよひて  
喉<sup>のど</sup>をうるほす眞<sup>ま</sup>清<sup>しみ</sup>水<sup>づ</sup>は  
惠<sup>めぐ</sup>みの泉<sup>いづみ</sup>の限<sup>かぎ</sup>りなく

湧<sup>わ</sup>くぞ嬉<sup>うれ</sup>しき神<sup>かみ</sup>の道<sup>みち</sup>。  
涼<sup>すず</sup>しき清<sup>きよ</sup>き瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
かわき苦<sup>くる</sup>しむ旅<sup>たび</sup>人<sup>びと</sup>の

四

仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>の瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
ほの見<sup>み</sup>え初<sup>そ</sup>めし嬉<sup>うれ</sup>しさよ

誓<sup>ちか</sup>ひ玉<sup>たま</sup>ひし神<sup>かみ</sup>の國<sup>くに</sup>  
神<sup>かみ</sup>は吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>と俱<sup>とも</sup>にあり。

五

たかきひくきの隔へだて無なく  
 神かみの功いさを績ををほめたたへ  
 勇いさむも嬉うれし神かみの前まへ。  
 常とこよ世よの春はるを祝いはひつつ  
 老おいも若わかきも押おし竝なべて

第二二

一

今日けふは畏かしこき御み光ひかりを  
 暗くらき心こころを隈くまも無なく  
 瑞みづの御みたま靈たまの大おほまへ前に  
 授さづけたまひし吉よき日ひなり  
 照てらさせ玉たまへ惟かむながら神  
 謹つつしみ祈いのりたてまつる。

二

今日けふの生いく日の足たる日ひこそ

吾等われらに平安やすきを賜たまふべき

神かみの祭まつりの吉よき日ひなり

罪つみや穢けがれの浪風なみかぜを

平たいげ治をさめ玉たまへかし。

三

今日けふの生いく日の足たる日ひこそ

いとたのも樂いしき祈いのりの日ひなり

瑞みづの御靈みたまの御光みひかりを

仰あふぎ仕つかふる信徒まめひとに

近ちかづきたまへと願ねぎまつる。

四

千座ちくらの置戸おきどを負おひながら  
曲津まがつ神等かみに勝かたせたる  
清きよき畏かしこき吉よき日ひなり  
いや永遠とことはに榮さかえゆく  
生いける神靈みたまさはさはに  
吾等われらが身魂みたまに給たまへかし。

(大正一二・五・一 舊三・一六 加藤明子録)

第三章 神雲しんじゆん〔一五五三〕

第二三

一

皇大神の御めぐみ  
豊に充てる神の家  
恵みを受けよ神の愛子  
苦み悩み悲しみも  
神の御門にとく來たれ  
朝日に露と消え失せむ  
たえずに給ふ御めぐみ。  
瑞の御魂の御慈愛  
是の御門の限りなき  
溢るる清き眞清水を

二

雲井に高く聳えたる  
住める伏屋も押並べて  
世の人々の運命は  
あしたの榮えはたちまちに  
いや永遠に御幸ある  
神は汝を待ちたまふ。  
宇都の宮居も賤の男が  
憂きに漏れたる人ぞなし  
草木の花にもさも似たり  
夕べの空に散り失せむ  
宇都の御門にとく來れ

三

教祖みおやの御救みすくひ世よにあまねし　　はやく來きたりて悔くい改あらためよ  
罪つみに沈しづみし涙なみだもかわき　　ちりも清きよまる愛あいの御顔みかほ  
向むけさせ玉たまはむよろこびは　　いやとこしへに充みちあふれ  
憂うれひは失うするこの御殿みとの。

第二四

一

清きよめの神かみよ瑞靈おんたまよ　　珍うづの宮居みやゐに歸かへり來きて  
その御姿みすがたを眼まのあたり　　拜をろがみまつる嬉うれしさよ。

二

神かみのみいづをほめまつる  
 御み子この一人ひとりとなしたまひ  
 にぶき沼ぬほこ矛こにも大みいさを功さをを  
 うたはせ玉たまへや神かみの前まへ。

三

信まめひと徒ひとたちの願ねぎ事ことを  
 聞きこしめ召よす時とき罪つみふかき  
 わが祈のりごと言ことを平たひらかに  
 かへりみまして聞きこしめ召よせ。

四

神かみの御おきて掟おきてを正ただしく守まもり  
 神かみの御み子こたる吾われら等の身み魂たまに  
 尊たふとき厚あつき御みめぐみ恵めぐみを  
 仰あふがせたまへ瑞みづみたま御みたま魂たま。



五

夕ゆふべの空そらを打うち仰あふぎ  
歩あゆみし吾われぞと心こころより

今け日の吉よき日ひは主すと俱ともに  
祝いはひよろこばせ玉たまへかし。

第二五

一

皇すめ大神おほかみの大おほ前まへに  
御み心こころ平たひらにやすらかに

齋ひ伏れし祈いのる吾わがねがひ  
諾うべなひたまへや瑞みづ御み魂たま。

二

惠めぐみの雨あめを吾胸わがむねに 降ふらせたまひて魂たましひを  
充みたせ活いかせて皇神すめかみの 御名みなの榮光さかえを謳うたはせ玉たまへ。

三

綾あやに畏かしこき御教みのりを示しめし 清きよめの道みちを宣のべたまふ  
伊都いづの言靈ことたままつぶさに 深ふかくさとらせ玉たまへ瑞御魂みづみたま。

四

憂うれきをなくさめ病やめるを癒いやし 身魂みたまを清きよめ許こ々こ多た久くの  
罪つみのなはめを解とき捨すてたまへ。

五

瑞<sup>み</sup>靈<sup>ち</sup>を<sup>し</sup>知<sup>る</sup>る<sup>も</sup>の<sup>ひ</sup>た<sup>す</sup>ら<sup>た</sup>頼<sup>め</sup>め<sup>神</sup>は<sup>ち</sup>近<sup>づ</sup>き<sup>た</sup>玉<sup>ふ</sup>べし  
至<sup>し</sup>仁<sup>ん</sup>至<sup>し</sup>愛<sup>い</sup>の<sup>み</sup>瑞<sup>づ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
かならず見<sup>み</sup>捨<sup>す</sup>てたまふまじ。

第二六

一

斯<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>に<sup>か</sup>形<sup>たち</sup>あ<sup>る</sup>も<sup>の</sup>も  
統<sup>す</sup>守<sup>べ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>お</sup>大<sup>ほ</sup>御<sup>み</sup>神<sup>か</sup>よ  
い<sup>や</sup>永<sup>と</sup>久<sup>こ</sup>の<sup>う</sup>歌<sup>た</sup>の<sup>ね</sup>音<sup>に</sup>  
い<sup>と</sup>も<sup>た</sup>尊<sup>ふ</sup>く<sup>う</sup>美<sup>る</sup>は<sup>し</sup>き  
形<sup>か</sup>の<sup>み</sup>見<sup>え</sup>ぬ<sup>た</sup>靈<sup>たま</sup>の<sup>よ</sup>世<sup>も</sup>  
天<sup>あ</sup>津<sup>ま</sup>神<sup>つ</sup>國<sup>み</sup>に<sup>く</sup>住<sup>す</sup>む<sup>た</sup>民<sup>た</sup>の  
聲<sup>こ</sup>を<sup>あ</sup>合<sup>は</sup>せ<sup>て</sup>ほ<sup>め</sup>た<sup>た</sup>へ  
神<sup>か</sup>の<sup>み</sup>御<sup>か</sup>門<sup>ど</sup>に<sup>す</sup>進<sup>み</sup>得<sup>え</sup>む。

二

島の八十島八十の國  
青人草は言ふも更なり

山河海野草も樹も  
禽獸蟲魚に至るまで

皇大神の御前に  
聲なき歌をうたひつつ

尊き御名をあげまつり  
浄めの御教を賞めたたへ

寄りて仕ふる神の御代。

三

この世に在りとしあるものは  
元津御祖の御恵を

歡びうたひ仕へまつれば  
人の子と生出ましし瑞御魂

浄めの瑞靈と吾等は稱へまし  
よしや言靈歌の調べ

低くかよわくありとても。

第二七

一

萬有のものの主と坐す  
綾威充たせる教祖の宮は  
天の八重雲搔別けて  
龍の館に天降りましぬ

國常立の大御神が  
吾等の罪を清めむと  
綾の聖地のエルサレム  
仰ぎ敬へ教祖の徳を。

二

清めの主の瑞御魂  
家族親族は云ふも更  
悩みを淨むるそのために

慕ひて聖地に登り行く  
親しき友垣世の人の  
シオンの道行く樂しさよ。

三

元津御祖の大神の  
 永遠に住みます綾の聖地に  
 心清けく遊ぶ一日は  
 百千萬の日數に勝り  
 いとも樂しく思ふかな。

四

皇大神はわが日なり  
 瑞の御靈は月の神  
 サタンを防ぐ盾となり  
 力となりて守ります  
 恵と榮光に充てる神。

五

萬よろづの神みたま人の主すなる神かみに  
祈いのる誠まことのピュリタンは

赤あかき心こころを捧ささげつつ  
世よにも勝すぐれて幸さち深ふかし。

## 第二八

一

何いづ國くの果はても民たみ草ぐさの  
瑞みづの御みたま靈たまは俱ともにありて

寄よりて仕つかふる折をり々をりを  
厚あつきめぐみを垂たれ玉たまふ。

二

飛ひ騾だの工たく匠みの造つくりたる

形かたちの宮みやに住すみまさで

心こころやさしく温おだやか順じゆんに 身みを謙へりくだる人ひと々びとの  
清きよき御み魂たまに住すみたまふ。

三

瑞みつの御み魂たまの仁マイトレーヤ愛あい神かみ  
清きよき生いのち命いのちの歡よろこび喜こびを  
吾われ等らの魂みたまに充みたしめて 貴うづの御み名なをばいと高たかく  
各おのも各おのもにほめたたへ 仰あふぎ敬うやまはしめ玉たまへ。

四

朝あさな夕ゆふなに御み前まへに祈いのる 善みやび言ことば美ことば詞ちからに力ちからをあたへ  
清きよき望のぞみをかためさせ玉たまひ 神かみの坐まします樂たのしき國くにを  
一ひと日ひも早はやく來きたらせ玉たまへ。



第二九

一

瑞みづの御み靈たまの御み榮さ光かえと  
心こころきよめて樂たのしげに

深ふかき惠めぐみを言こと葉ばの限かぎり  
朝あさな夕ゆふなに稱たたへま欲ほしき。

二

嚴いづの御み魂たまよ瑞みづ御み魂たま  
秀ひいでて高たかき宇う豆づの御み名なを  
仁みろく愛くの岐き美みよ雲くも井ゐの上うへに  
生いかさせ玉たまへ元もと津つ御み祖おや。  
擴ひろむる吾わが身みを朝あさ夕ゆふに

三

諸<sup>もも</sup>の悲<sup>かな</sup>しみ歎<sup>なげ</sup>きを除<sup>のぞ</sup>き  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>をば稱<sup>たた</sup>へ

罪<sup>つみ</sup>の恐<sup>おそ</sup>れを去<sup>さ</sup>りたまふ  
仕<sup>つか</sup>へまつるぞ樂<sup>たの</sup>しけれ。

四

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の命<sup>いのち</sup>の神<sup>かみ</sup>は  
手<sup>て</sup>足<sup>あし</sup>の爪<sup>つめ</sup>や髭<sup>ひげ</sup>を拔<sup>ぬ</sup>き

罪<sup>つみ</sup>の牢<sup>いとや</sup>獄<sup>く</sup>を打<sup>うち</sup>碎<sup>くだ</sup>き  
血<sup>ち</sup>をもて償<sup>あがな</sup>ひ生<sup>い</sup>かさせ玉<sup>たま</sup>ふ。

五

亡<sup>ほろ</sup>び行<sup>ゆ</sup>くなる身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>を永<sup>と</sup>遠<sup>は</sup>に  
榮<sup>さか</sup>光<sup>え</sup>に充<sup>み</sup>てる希<sup>のぞ</sup>望<sup>み</sup>の綱<sup>つな</sup>を  
清<sup>きよ</sup>き御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>をば稱<sup>たた</sup>へ奉<sup>まつ</sup>らむ。

蘇<sup>よみがへ</sup>生<sup>が</sup>らせて樂<sup>たの</sup>しみと  
與<sup>あた</sup>へ玉<sup>たま</sup>ふなる仁<sup>みろく</sup>愛<sup>く</sup>の神<sup>かみ</sup>の

第三〇

一

神かみに仕つかふる信まめ徒ひとたちよ  
汝なれが心こころの門かどの戸とはやく  
神かみのまにまに開ひらけよひらけ  
よろこび勇いさみて吾わがたましひは  
瑞みづの御み魂たまの主すを待まちのぞむ。

二

愛めぐ善みと榮ひかり光りと平へい和わに充みてる  
瑞みづの宮みや居ゐの美うるはしさ  
御み前まへに出いでて伏ふし拜をがむ  
吾わが身みは實げにも慕したはしきかな。

三

吾等われらを守るまもる尊たふとき父ちちよ  
罪つみを償あがなふ仁めぐみ愛ははの母ははよ  
珍うづの御前みまへに謹つつしみ出いでぬ  
母ははもまた下くだりて吾魂わがたましひを  
伊都いづの宮居みやゐと定さだめさせ玉たまへ。

#### 四

瑞みづの御魂みたまよ神代かみよの基もとを  
語かたらせたまへ畏かしこみ聽きかむ  
生命いのちの泉いづみは母ははより流ながれ  
こころの苦痛なやみは瑞御魂みづみたま  
母ははの御聲みこゑに癒いやされむ。

#### 第三一

教をしへの友ともよいざや進すすめ  
言ことたまし靈調しらべいやたかく  
清きよき御名みなをば稱たたへまつらむ  
天津御神あまつみかみを嬉うれしみて  
いさみて進すすめ寶座みくらの御前みまへ

(折返)

靈山會場れいざんゑちやうのエルサレム

樂たのしき都みやこへ進すすみ行ゆく。

二

罪つみに穢けがれし人草ひとぐさは  
天津御神あまつみかみの世繼王山よつわうやまの  
歌うたはで在あるべき溢あふれ出いづる  
限かぎりも知しらぬよろこびを。  
兔とにも角かくにもあれやあれ  
ふもとに集あつまる神かみの子こは

三

天津御神の永遠に  
鎮まり坐す神國へ  
旅立ち進む道芝は  
いとも安けく平けく  
薰り床しき望の花は  
所曼陀羅咲き充ちて  
生命の木の実としげし。

四

黄金の御門うち仰ぎ  
ながむる空に天使  
玉の緒琴を奏でつつ  
遊べる姿の崇高さよ  
限りも知らぬ幸福の  
泉は清く湧き充ちて  
溢れ流るる尊さよ。

五

瑞<sup>みづ</sup>と嚴<sup>いづ</sup>との教<sup>をしへ</sup>の道<sup>みち</sup>を踏<sup>ふ</sup>みて進<sup>すす</sup>まむ仁<sup>みろく</sup>愛<sup>く</sup>の園<sup>その</sup>に  
奇<sup>く</sup>しき妙<sup>たへ</sup>なる榮<sup>さかえ</sup>光<sup>え</sup>に充<sup>み</sup>てる高<sup>たか</sup>天<sup>あま</sup>原<sup>はら</sup>の天<sup>てん</sup>國<sup>こく</sup>の  
神<sup>かみ</sup>の寶<sup>みくら</sup>座<sup>ざ</sup>の御<sup>おん</sup>前<sup>まへ</sup>に勇<sup>いさ</sup>みて進<sup>すす</sup>め躍<sup>をど</sup>りて昇<sup>のぼ</sup>れ。

第三二

一

神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>前<sup>まへ</sup>に教<sup>をしへ</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>が謹<sup>つつし</sup>みかしこみ稱<sup>たたへ</sup>言<sup>こと</sup>  
仕<sup>つか</sup>へまつるを聞<sup>きこ</sup>召<sup>しめ</sup>せ平安<sup>やすき</sup>を祝<sup>いは</sup>ふ神<sup>かみ</sup>の聲<sup>こゑ</sup>  
われ等<sup>ら</sup>に掛<sup>か</sup>けさせ玉<sup>たま</sup>へかし。

二

瑞みづの御魂みたまの尊たふとき御名みなを  
心こころを清きよめさせたまひ  
家路いへぢにかへる道みちの邊へを  
腕うでもたわわに與あたへませ。

稱たたへまつりし吾言靈わがことたまや  
神かみの御國みくにの故郷ふるさとの  
守まもりて平安やすきと幸福さいはひを

三

朝あした夕ゆふべに教をしへの御子みこに  
暗くらきを明あかきに照てり返かへし

仇あだなす仇あだを言向ことむけやはし  
榮光さかえと平安やすきを垂たれ玉たまへ。

四

魔ま神がみの猛たける現世うつしよに  
戰たたかふ力ちからを今いまわれに

ありて日夜にちやに道みちのため  
下くださせ玉たまひ復命かへりごと



申し上げたる曉は  
わが身の上に與へ玉へ。  
いや永遠に平安をば

第三三

一

伊都の大神美都の神  
よるこびに充ちて生き返り  
深く正しく爲さしめ玉へ。  
深き恵を吾等に注ぎ  
仁愛の神のはたらきを

二

神の御手もて斯世の中に  
植ゑし言葉を御魂の畑に  
榮え實らせ結びたる  
清き果實を天津國の  
嚴の御倉にいと高く  
蓄へおかせ玉へかし

三

瑞の御魂の淨めの御手に  
召されて進む吾精靈は  
よろこび勇みて天津國  
御殿に昇り安らかに  
常磐の春を樂しみつ  
神の誠の御力を  
心の限り稱へしめ玉へ。

(大正一二・五・一 舊三・一六 加藤明子録)

第四章 神田〔一五五四〕

第三四

—

暗やみにつつみし      この世よの中なかを

いづのみたまは      隈くまなくてらす

みひかり。

（折返）

いときよけき      神かみの御祖みおや

あめと地つちとを      清きよめまもらす

御みはしら。

二

夕ゆふべにかへる

田た人びとのごとく

ただしきたまを

招まねかせ玉たまへ

御みまへ前に。

三

あまの川かはら原を

よく打うちながめ

たかくながるる

御みすがた姿み見れば

かしこし。

四

つみにかすめる 眼まなこを照てらし  
瑞みづのすがたを をがませ玉たまへ  
みかみよ。

### 第三五

一

聖きよきたふとき國くにの御祖おや 大國常立大神おほくにとこたちおほかみは  
三千世界さんぜんせかいの大宇宙だいうちう 完全うまらに具足つばらに造つくりまし  
天あめの御中主大神みなかぬしおほかみと現なり 大元靈だいげんれいの眞神しんしんとして  
聖きよき御姿見みすがたみえねども 天地萬有てんちばんいうに普遍ふへんして  
總すべてのものを守まもり玉たまふ 高天原たかあまはらの靈國れいこくに

月の大神と現れ玉ひ  
日の大神と現はれて  
守りたまふぞ畏けれ  
この世の大本大御神。

また天國に到りては  
顯幽神の三界を  
仰ぎ敬へ伊都御魂

二

上無き權威ある人も  
御祖の神の御まへに  
この世の御祖伊都御靈  
眞心盡して仕へ奉らむ。

學びの道の司等も  
冠を捨てて伏しをがむ  
吾等は謹みあさ夕に

三

伊都の大神日の御靈  
夜の御守り日のまもり  
罪より淨め助けむと  
綾の高天に降りまし  
神の伊吹に吹き拂ひ  
清め玉ひて人草を  
神慮配らせ玉ふこそ  
仰ぎ敬へ神の恵み。

美都の大神月の御靈  
青人草をあはれみて  
天津御神の御こと以て  
この世にありとしある罪を  
安の河原にあひすすぎ  
神の御國に生かさむと  
畏き尊き神業なれ

四

淤能碁呂島は神の國  
照る日の下に住む民は  
神にすべてを打ち任せ

珍の經綸の眞秀良場ぞ  
神の選りたる珍の民  
神國を地上に來さむと

おもひは胸に三千年の  
忍びて仕ふる尊さよ。

諸のなやみや虐げを

五

瑞の御魂の神ばしら  
再び現世に現はれて  
世人のために身を碎き  
そのいさをしぞ畏けれ。

誠一つの神の子と  
千座の置戸を負ひながら  
心をなやまし道を傳ふ

六

天津御神のおん父と  
聖き神靈の天使  
瑞の御魂の貴の子と  
一つになりて世に降り



三ツの御魂と現はれて  
開かせたまひし畏さよ  
伊都の御魂の神の徳  
神の教ぞいと清し。

マイトレーヤの神業を  
仰ぎ敬へ三ツ御魂  
あゝ惟神々々

### 第三六

—

宇宙萬有一切を  
元津御祖の伊都の神  
暗を晴らして浄めむと  
貴の御教をねもごろに

堅磐常磐に知食す  
空蝉なせる人の世の  
教御祖に降りまし  
普く地上に布きたまふ

その御心をいとときよく 汲み上げ玉ひ世に廣く  
流し傳ふる瑞の神 諸の譏やしひたげを  
その身一つに負はせつつ ウヅンバラ・チャンドラと諸共に  
いそしみたまふぞ有難き あゝ惟神々々  
神の御いづを稱へまつれ。

### 第三七

—

宇宙の祖とあれませる 眞の獨り神柱  
伊都の御靈は永久に 顯幽神の世界を知召し  
山海河野くさぐさの 物皆造り育みて

榮光と平安を賜ひつつ われ等を生かし樂しませ  
幸ひ玉ふ御恵を よろこび感謝したてまつる。

二

瑞の御魂の月の神は この世を生かし清めむと  
卑しき人の子と生れ 神の使とえらまれて  
言靈つるぎ振りかざし 天津御國の權威もて  
醜の曲靈をことごとく 言向和し地の上に  
奇しき樂しき神の國を 建てて萬有に生魂の  
瑞の榮光をあたへむと 朝な夕なに眞心の  
限りをつくし身を盡し いそしみたまふぞ畏けれ  
仰ぎ敬へ伊都御靈 慕ひまつれよ美都御靈。

三

綾<sup>あや</sup>に畏<sup>かしこ</sup>き瑞<sup>みづ</sup>の神<sup>かみ</sup> 伊<sup>い</sup>都<sup>づ</sup>の御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>命<sup>こと</sup>もて  
 總<sup>すべ</sup>ての物<sup>もの</sup>に歡<sup>よろこ</sup>喜<sup>び</sup>と 榮<sup>さか</sup>光<sup>え</sup>と平<sup>やす</sup>安<sup>き</sup>を降<sup>くだ</sup>しつづ  
 青<sup>あ</sup>人<sup>を</sup>草<sup>ひとぐさ</sup>のたましひを 靜<sup>しづ</sup>かに治<sup>をさ</sup>めしめ玉<sup>たま</sup>へ  
 御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>を慕<sup>した</sup>ふ吾<sup>われ</sup>々<sup>われ</sup>を いや永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に萬<sup>よろづ</sup>代<sup>よ</sup>に  
 守<sup>まも</sup>り幸<sup>さち</sup>はへたまへかし 謹<sup>つし</sup>みかしこみ願<sup>ね</sup>ぎまつる。

四

三<sup>み</sup>つに神<sup>み</sup>業<sup>わざ</sup>を別<sup>わか</sup>ちつづ 天<sup>あめ</sup>と地<sup>つち</sup>とを只<sup>ただ</sup>ひとり  
 うしはぎ玉<sup>たま</sup>ふ元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>祖<sup>おや</sup> 眞<sup>まこと</sup>の神<sup>かみ</sup>のみさかえを  
 いやとこしへに賞<sup>ほ</sup>めたたへ 仕<sup>つか</sup>へまつらむ眞<sup>まこと</sup>心<sup>こころ</sup>もちて。

第三八

一

御稜威かがやく高天原の 貴の寶座にマヅラスバラ  
ボーチーサツトワの聲の如カラビンセラビン勇ぎよく  
常世の春をうたふなり 實にも尊き天津國の  
司とあれます大神の 大御さかえは天地に  
溢れて充ちつつ叫びつつ。

二

瑞の御魂の御使が 神の御教をいさぎよく  
うたへばももの草も木も 皆まつろひてうたふなり

神かみの御みつかひ貴うづの御み子こ

天あめにも地つちにもみ榮さか光かえあれと。

三

あめつち百ももの神かみ人びとや

山やま海うみ川かは野のも聲こゑそろへ

神かみのみいづをうたふなり

あな尊たふときかな伊い都づの神かみ

この世よを淨きよむる美み都づ御み魂たま

天あめにも地つちにも御み榮さか光かえあれと。

第三九

一

永とこ久しに坐います元も津とつ御み祖お神が

奇くしきみいづの輝かがきて

天津御使集ひまし  
玉の小琴を掻き鳴らし

マヅラ スワラヤマノーヂニヤ ガンダルワをかなでつつ

貴のみめぐみに報いむと 勤しみ仕ふる芽出度さよ

神の大道に生かされし われ等は神國のこのすがた

はるかに拜み御榮光を 畏み嬉しみ祝ぎまつる。

二

神の造りし神の世に みたまのふゆを蒙りて

生れ出でたる民草は しこの嵐にもまれつつ

きたなき罪の身となりぬ あゝ罪ふかき人の身は

元津御國へ如何にして 安々還り得らるべき

底なき地獄におちいりて 永久の苦みにふるふ身を

瑞の御神は友となり 力となりてねもごろに

仁慈の御手を伸ばしつつ  
われらに向けさせ玉ひつつ  
栄光と平安とよるこびを  
あゝなつかしき瑞御魂  
いとなつかしきかんばせを  
天津御國へみちびきて  
授けたまふぞ尊けれ  
あゝしたはしき月の神。

三

伊都の御魂や美都御魂  
塵に染まりし吾からだ  
いとほせ玉はず宮として  
鎮まり坐しまし諸々の  
光をさづけ樂しみに  
酔はせ身魂を彌遠に  
生かせたまふぞ嬉しけれ。

四



靈たまと力ちからと身體からだの 三ツの大元みを一つとし  
 現あらはれたたまひし伊都いづの神かみ 大國おほくに常立とこたちの大神おほかみは  
 天地あめつち百ももの身魂みたまをば 完全うまらに具足つばらに造り了をへ  
 始はじめ終をりの主ぬしとして スメール山ざんに腰こしを据すゑ  
 三千さんぜん世界せかいを隈くまもなく 守まもらせたまふ御みいさをを  
 われ人ひとともいに勇いさましく たたへ奉まつらむ大前おほまへに  
 あゝ惟かむながら神かみ々々かむながら 神かみのいさをぞ尊たふとけれ。

第四〇

—

われらが崇あがむる眞まことの神かみは

島しまの八十やそ島しま八十やその國くに

海川山野の草も木も  
禽獸に至るまで  
みいづを稱へぬものぞなき  
よろこび稱へよ人の子よ  
ほめよ稱へよ人の子よ。

二

貴き稜威は天地四方の  
國々島々隈なく照りぬ  
大地も御稜威を仰ぎ見て  
その崇高さに打ちふるふ  
ほめよ稱へよ神のいづ。

三

誰かは否まむ神の御神業を

誰かは拒まむ神の御むねを。

四

すべてのぬしなる御神みかみに従したがへ  
まことの権力ちからは天あめにこそあれ。

五

天津御空あまつみそらも地つちの上へも  
稱たたへの御歌聞みうたきこゆなり  
嚴いづと瑞みづとはまことの神かみよと。

第四一

一

ちからの主とあれませる  
山川草木も打ち伏して  
伊都の言靈清くして  
歩みを止めて大前に

元津御神の宣り言は  
御旨のままに従はむ  
天津空なる月も日も  
寄りて仕ふる尊さよ。

二

山と寄せくる荒浪も  
来らば来れ寄せ来れ  
天地経綸の主宰者なる  
神と親しくある身魂は  
吾等も神の子神の宮

地震雷鳴火の雨も  
神は吾等と俱にあり  
人は神の子神の宮  
如何なるなやみも恐れむや  
神は吾等と俱にあり。

三

いかにか荒ぶる夜嵐も  
 虎狼や獅子熊の  
 伊猛り狂ふ暗の夜も  
 神の恵のある上は  
 犯す術なき神の國  
 人は神の子神の宮  
 神に習ひて世にあらば  
 醜の曲靈も露と消え  
 嵐も和ぎて天津國の  
 清けき安き花園と  
 易るぞ目出度き珍の御國  
 ほめよたたへよ神のその  
 うたへよ舞へよ神の子等。

四

尊き嚴の御聲は  
 天津御空に雷のごと  
 鳴り轟きて聞えけり  
 綾の高天の聖き場に  
 進め進めと宣りたまふ  
 あゝ有難し神の聲  
 あゝかむながら神の聲。

陸地くぬちの上うへに生なり出いでし御子みこよ  
かしこみひれ伏ふし貴うづの御名みなを  
粟生あはなすつかさもひざま跪まづきて

伊都いづの御靈みたまの御前おんまへに  
稱たへよ祝いはへよ眞心まごころこめて  
御名みなを稱たふる時とき來きたるらむ。

第五章 神山しんざん〔一五五五〕

第四二

あまつみくにの神人も　　おほぞらにかがやく日のかげも  
 天津御國の神人も　　大空にかがやく日のかげも  
 よるまの月のかけも　　きらめき渡る星さへも  
 夜の守りの月のかけも　　きらめき渡る星さへも  
 もとつみおやの大神を　　たたへまつりて仕ふなり  
 元津御祖の大神を　　たたへまつりて仕ふなり  
 この地の上に住むものは　　上なき権力を初めとし  
 あをひとぐさに至るまで　　神の御稜威をほめたたへ  
 青人草に至るまで　　神の御稜威をほめたたへ  
 みまへにひれ伏し畏みて　　愛の善徳身にひたし  
 御前にひれ伏し畏みて　　愛の善徳身にひたし  
 しんしんの光明に　　かがやき渡りて天津神に  
 信と眞との光明に　　かがやき渡りて天津神に  
 あななひ仕へたてまつれ　　人はこの世にあるかぎり  
 神より外に力とし　　柱となして頼るべき  
 神より外に力とし　　柱となして頼るべき  
 ものは一つだにあらじかし　　ほめよたたへよ神のいづ  
 したへよ愛せよ伊都の神。

世界の太初に言葉あり  
すべてのものは言霊の  
造られ出でしものぞかし  
幸ひ助け生ける國  
すべての法規も更生も  
あゝ惟神言霊の  
生れ出でたる嬉しさよ。

言葉は道なり神に坐す  
清き御水火にもとづきて  
現しき此の世は言霊の  
天照り渡る貴の國  
言葉をはなれて外になし  
幸ひ助くる神の國に

三

瑞の御魂に身も魂も  
捧げて仕ふる信徒は  
ほろびと罪のまが神に  
苦も無く勝ちて世に榮ゆ  
神のめぐみをいつまでも  
まご子の末まで語りつぎ  
かならず忘るる事なかれ  
神にしたがひあるうちは



つねによろこ歡びとたの樂しみの  
よろこび祝いはへ神かみの徳とく

慕したひまつれよ神かみの愛あい。  
花はなも絶たえ間まなく匂にほふなり

#### 四

伊都いづの御魂みたまの教をしへをひらき  
罪つみをあがなひ清きよめます  
諸人もろびと聲こゑを一つひとにし  
三五さんごの月つきのいときよく

謳うたへよた稱たへよ心こころのかぎり  
日ひに夜よに神かみをたたへかし。  
瑞みづの御魂みたまのいさをしを  
世よびと人を導みちびき許こ々こ多た久くの

#### 第四三

限り知られぬ天のはら  
伊照りかがやく日の神の  
清けく明き靈光は  
元津御祖のはてしなき  
貴の神力を顯はせり  
すべてのものの祖とます  
眞の神の神業は  
日々新たに天地に  
かがやき渡るぞ畏けれ。

#### 第四四

一

海の内外の隔てなく  
萬の國の人の子よ  
天地萬有の主宰なる  
元津御祖の大神の  
廣き尊き大稜威  
言靈きよく唱へつつ

よろこび歌ひたてまつれ  
神に捧ぐる御饌津ものぞ。

清き言靈善き祈りは

二

神はわれ等を育てたる  
眞誠の御祖にましませば  
現世の事悉く捨てて御仕へたてまつれ  
人は神の子神の民  
神より外に頼るべき  
力も柱も世にあらじ  
ほめよたたへよ神の恩。

三

花咲き匂ふ彌生空  
蝶舞ひ遊ぶ天津國の  
善言美辭の歌をうたひつつ  
神の御門にすすみゆく

人は神の子神の民。

四

伊都の大神瑞の御魂  
恵みは豊かに愛は絶えず  
八洲の河原に溢れたり  
汲めよ信徒まごころ籠めて  
生命の清水を飽くまでも  
人は神の子神の民。

第四五

一

あやにかしこき伊都の神

教御祖とあれまして

萬よろづの國くにの人ひと草ぐさに  
仰あふぎ敬みやまへ御祖みおやの德とくを  
惠めぐみの光ひかり投なげたまふ  
人ひとは神かみの子こ神かみの民たみ

二

凡すべてのものは皇神すめかみの  
人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや伊都いづの言靈ことたまさづけられ  
この世よに生いきて道みちのため 盡つくす身み魂たまと造つくられぬ  
心こころを清きよめて朝あさ夕ゆふに 生いく神かみ言ことを宣のり奉まつり  
生せい成せい化くわ育いくの神業しんげふに 身みも棚たな知しらに仕つかふべし。

三

この世よの榮さかゆも言靈ことたまぞ

滅ほろび失うするも言靈ことたまぞ

舌したの劍つるぎの矛ほこさき先にに 神かみも現あれまし鬼おにも來きたる  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々 謹つつしむべきは言こと靈たまの  
水火いのき一つひとにありといふ 眞まことの教をしへをかしこみて  
かならず罵ののしることなかれ 人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや。

#### 四

神かみは吾われ等らを生うみ成なせし 誠まことの御み祖おやにましませば  
朝あさな夕ゆふなに大おほ前まへに ぬかづきひれ伏ふし神しん恩おんを  
感謝かんしゃなさずにあるべきや 御み德とくを仰あふがであるべきや  
吾われ等らは神かみの子こ神かみの宮みや。

#### 五

天津御空より恵みは廣く  
稜威は須彌より猶高し  
仰ぎ奉れよ父の徳  
慕ひ奉れよ母の恩  
堅磐に常磐に皇神の  
定めたまひし大神律は  
月日の輝き渡るかぎり  
亡びず失せじ惟神  
神のいさをぞ畏けれ。

六

百千萬の生言靈の  
變れる國々もいとひなく  
誠一つを楯となし  
神の御ため世のために  
嚴の教を傳へ行く  
誠の人こそ神の御子  
神は汝等と俱にあり  
勇みて立てよ道のため  
振ひ立て立て御代のため  
権力の主とあれませる  
神は守らせ玉ふべし  
あゝ惟神々々

神の御子達奮ひ起て

もはや神代は近づけり。

#### 第四六

一

愛の善徳天地に かがやき渡りて現世の  
雲きり四方に吹き拂ふ 後にきらめく日月は  
信の眞なる力なり。

二

皇大神の言の葉は

スメール山の動きなき



高き姿にさも似たり  
堅磐常磐にゆるがまじ

八千萬劫の末までも  
仰ぎ敬へ神の教。

三

天地萬有遺ちもなく  
ものにしあれば限りなき  
汲めよまめ人心をきよめ

神の御手以て造られし  
恵みの泉は湧き充てり  
神に習ひて生命の水を。

四

月の御神の恵みの露は  
雨のごとくに降りそそぐ  
盡きぬいつくしみ汲めよかし

天地四方に限りなく  
清き身魂の杯持ちて  
生命を維ぐ眞清水を。

五

生命いのちは深山みやまの谷水たにみづの如ごとく  
 瑞みづの御魂みたまの清きよければ  
 汚けがれを洗あらひ世よをめぐみ  
 いや永久とこしへに湧わき出いづる  
 清水しみづとなりて人ひとを生いかす  
 神かみのいさをを稱たたへかし  
 人は神かみの子こ神かみの民たみ。

六

瑞みづの御魂みたまの誓約うけひによりて  
 八桑やくはえ枝え如なして榮さかえゆく  
 罪つみに汚けがれし人ひとの子こよ  
 青人草あをひとぐさは日ひに月つきに  
 來きたりてすすげ八洲やすの河かは  
 集つどひて飲のめよ由良川ヨルダンの  
 清きよき生命いのちの眞ま清しみづ水を。

第四七

一

嚴いづの御魂みたまの御みひかりは  
罪つみに曇くもりてさまよへる

至いたらぬ隈くまなく世よを照てらす  
人ひとよ來きたりて御光みひかりあびよ。

二

瑞みづの御魂みたまは月つきにしあれば  
東雲しののめちか近く朝日あさひの空そらも

蔭かげに坐ねむまして惠めぐませ玉たまふ。  
寢ねむれる夜よの間まも守まもらせ玉たまふ

三

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>みの</sup>教<sup>のり</sup>を心<sup>こころ</sup>にかけ  
神<sup>かみ</sup>の榮<sup>さか</sup>光<sup>え</sup>を世<sup>よ</sup>に廣<sup>ひろ</sup>く

あらはし奉<sup>まつ</sup>らむ道<sup>みち</sup>のため。  
日<sup>ひ</sup>々<sup>び</sup>の業<sup>なり</sup>務<sup>はひ</sup>いそしみ勵<sup>はげ</sup>み

## 第四八

一

神<sup>かみ</sup>のめぐみは天地<sup>あめつち</sup>の  
廣<sup>ひろ</sup>けく高<sup>たか</sup>くましまして  
い<sup>あ</sup>や新<sup>あた</sup>しく現<sup>あ</sup>れませり。

はてしも知<sup>し</sup>らぬ御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>まで  
その神<sup>かみ</sup>業<sup>わざ</sup>は日<sup>ひ</sup>に月<sup>つき</sup>に

二

天と地とを抱きつつ  
天津御國には日と化りて  
靈魂をいともねもごろに  
海とあらはれ山と成り  
生命を授くる伊都の神

靈の御國には月と化り  
天津使や信徒の  
恵まひたまふぞ有難き  
河野となりて物皆に  
瑞の御魂ぞいと尊し。

三

八束の生鬘抜き取られ  
血潮に染りし瑞御靈  
青人草になりかはり  
更生主ぞ誠の母に坐す  
生命の清水そそがせて  
貴の御柱となさしめ玉へ

手足の爪まで除かれて  
天津國人地の上の  
千座の置戸を負ひませし  
われらの死せるたましひに  
呼び生け浄め大神の  
あゝ惟神々々

瑞みづの御魂みたまぞ慕したはしき。

四

瑞みづの御靈みたまのおんめぐみ  
嚴いづの御楯みたてを前まへにおき  
戦たたかふ如ごとき思おもひして  
身みもたなしらに道みちのため  
御神みかみのために仕つかふべし  
守まもらせたまへ瑞みづみたま。

第四九

一

眞誠まことひと一つは荒磯あらいそに  
逆捲さかまきかみ付き襲おそひ來くる  
竝ならべる千引ちびきの巖いはのごと  
浪なみにも動ゆるがぬ神國みくに魂たまよ。

二

神かみのめぐみは由良河ゆらがはの  
眞砂まさごのごとくいつまでも  
數かぞへつくすべき時ときもなし  
大海おほうななせるみづの御魂みたま。

三

世よは紫陽花あざさいの七變ななかはり  
さだめなき身の果敢はかなさを  
命いのちの神かみにまつろひて  
永久とほの榮光さかえを樂たのしまむ。

四

山やまと積つみてし身みの罪つみや  
みづの御魂みたまの眞清ましみづ水づに

ふかき心こころのけがれをば  
洗あらはれ清きよく世よに生いきむ。

第五〇

一

遠とほき神代かみよの昔むかしより  
守まもり玉たまひし伊都いづの神かみ

末すゑの末すゑまで吾魂わがたまを  
瑞みづの御魂みたまぞ御祖神みおやがみ。

二

天あめと地つちとの別わかれざる

前まへより坐ゐます皇神すめがみは



斯世このよを造つくりし御祖みおやなる

大國おほくに常立とこたちの大おほ神かみぞ。

三

千ち年とせ八や千ち年とせ萬よろづの年としも  
川かはの水みな泡なわか草くさの露つゆ

神かみの御眼みめより見みたまへば  
短みじき夏なつの夢ゆめの如ごとし。

四

空うつ蝉せみの世よの人の身みは  
水みな泡なわとなりて亡ほろぶとも  
まことかみの神かみの御みひかりを  
天津御國あまつみくにに榮さかえかし

消きえて跡あとなき草くさの露つゆ  
永と久はに滅ほろびず榮さかえます  
人ひとは神かみの子こ神かみの民たみ。  
身み魂たまに浴あびて限かぎりなく

五

天<sup>あめ</sup>と地<sup>つち</sup>とは變<sup>かは</sup>るとも  
 伊<sup>い</sup>都<sup>づ</sup>の御<sup>み</sup>座<sup>くら</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>けれ  
 高<sup>たか</sup>天<sup>あま</sup>原<sup>はら</sup>の貴<sup>うづ</sup>の國<sup>くに</sup>  
 夜<sup>よる</sup>と冬<sup>ふゆ</sup>なき神<sup>かみ</sup>のそ<sup>の</sup>。  
 永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に動<sup>うご</sup>かぬ神<sup>かみ</sup>の國<sup>くに</sup>  
 われらが御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の住<sup>す</sup>む家<sup>いへ</sup>は

第五一

一

伊<sup>い</sup>都<sup>づ</sup>の大神<sup>おほかみ</sup>瑞<sup>みづ</sup>の神<sup>かみ</sup>  
 人<sup>ひと</sup>の言<sup>こと</sup>葉<sup>は</sup>に盡<sup>つく</sup>し得<sup>え</sup>ぬ  
 深<sup>ふか</sup>き恵<sup>めぐ</sup>みをうかがへば  
 計<sup>はか</sup>り知<sup>し</sup>られぬ姿<sup>すがた</sup>なり。  
 尊<sup>たふと</sup>きひろき限<sup>かぎ</sup>りなき

二

暗くらき浮うきよ世よにふみ迷まよひ

道みちを忘わすれし人ひとの身みに

聖きよき光ひかりをあたへつつ

安やすきにすくふ神かみの稜い威づ

こころおごりし時ときにまた

慈な悲さの鞭むちを加くはへつつ

眼まなこを覺さまし生いく魂たまの

力ちからを振ふり立たて給たまふこそ

實げにも尊たふとき神かみの恩おん。

三

いやしき吾われ等らの身みにあまる 厚あつきめぐみを限かぎりなく

幼をさなき時ときよりたまひつつ 山やまより高たかく海うみよりも

深ふかき仁みろく愛くの御おん守まもり うれしみ畏かしこみ仰あふぎまつる。

四

月つきと現あれます瑞みづ御み魂たま  
あつき恵めぐみの露つゆあびて  
うつし世よかくり世よ隔へだて無なく  
神かみの功いさを績をを稱たたふべし。

第二篇 神國みくにの春はる

第六章 神天しんてん〔一五五六〕

第五二

一

天と地とを統べ給ふ

元津御神の御功を

ほめよ稱へよ人の子よ

御神のまします高天原の

珍の宮居はきらきらと

月日の如く輝きて

千代に八千代に榮えけり。

二

眞と信との光明を

みけしとなして八重雲を

珍の車となしたまひ

鳴る雷を遣はして

みさきを馳けらせ玉ひつつ

天と地との諸々を

知召すこそ畏けれ。

三

神の掟のいすくはし  
落つるくまなく雪としき  
恵の雨は非時に  
降りて谷間に溢れつつ  
河を渡りて海に入る  
命の風は永遠に吹き  
榮光の花は咲き匂ふ。

四

塵の浮世に生れたる  
汚れ切りたる人の身は  
瑞の御霊の眞清水に  
清むる外に道ぞなき  
幾世變らぬ御恵を  
與へたまひし大御神

瑞みづの御み靈たまの御み功い績さを

謹つつしみ感かん謝しゃし奉たてまれ。

第五三

一

天津あまつ御み神かみの永とこ遠とはの

嚴いづの惠めぐみをことほぎし

稱たたへの歌うたのうるはしさ

大おほ海うな原ばらに鼓つづうつ

浪なみの音ねよりも彌いや高たかく

響ひびく言こと靈たま勇いさましき

晨あしたの風かぜや夕ゆふ風かぜの

音ねよりも清きよく聞きこゆなり

二

この世を洗ふ瑞御靈  
天津御神の御言もて  
綾の高天に天降りまし  
限り知られぬ慈愛  
開かせたまふ尊さよ  
その功績は現世に  
たとふるものも無かるべし  
聖の君の筆にさへ  
寫さむ術もなかるべし

三

わが垂乳根の父母の  
愛より厚く恵みまし  
千尋の海の底よりも  
深き恵を垂れたまふ  
厚き尊き御心は  
人の思ひの上に聳え  
大空よりも彌廣し。

四



金銀瑪瑙瑠璃碑磔  
誠の寶は御神より  
あゝ諸人よ諸人よ  
八洲の河原に楔して  
神の御前に勇ましく

七寶よりも美はしき  
下し給へる御寶ぞ  
神に受けたる魂を  
清き身魂となり變り  
仕ふる魂となれよかし。

## 第五四

一

奇しき貴き御惠の  
世人の悩む暗路をば  
神は愛なり世を守る

珍の光は現身の  
清く照させたまふなり  
人よ愛せよ愛の神を。

二

醜しこの叢雲塞むらくもふさがりて  
誠まことの神かみは笑えみ榮さかえ  
神かみは愛あいなり光ひかりなり

珍うづの御顔みかほを包つつめども  
光ひかり輝かがやき給たまふなり  
人ひとよ愛あいせよ愛あいの神かみを。

三

百ももの禍群わざはひむら起おこり  
愛あいの御神みかみは彌廣いやひろき  
いと平たひらかに安やすらかに  
神かみは愛あいなり光ひかりなり  
吾身わがみを責せむる時ときさへも  
望のぞみを吾等われらに與あたへつつ  
慰なぐさめ給たまふぞ尊たふとけれ  
人ひとよ愛あいせよ愛あいの神かみを。

四

世は紫陽花の七變り  
河の淵瀨と移るとも  
惠の光は永久に  
輝き渡り給ふなり  
神は愛なり光なり  
人よ愛せよ愛の神を。

第五五

一

吾身の末は如何にして  
浮世を渡るか知らねども  
惠の深き皇神は  
嚴の御靈や瑞御靈  
此世に降したまひつつ  
行手を照らし禍を  
科戸の風に吹き拂ひ  
安きに導き給ふべし。

二

如何なる曲の襲ふとも  
 心たゆまず恐れずに  
 神の光に従ひて  
 ひたすら眞道を進むべし  
 世の人々は變りゆき  
 總ての物は移るとも  
 我皇神の御心は  
 彌永遠に動かまじ  
 賞めよ稱へよ神の徳  
 慕ひまつれよ神の愛。

三

荒き海路を打ち開き  
 限りも知らぬ沙漠をも  
 厭ひたまはず雨降らせ  
 恵の露を平けく  
 與へ給ふぞ尊けれ  
 神は愛なり光なり  
 喜び敬へ神の徳  
 慕ひまつれよ神の愛。

第五六

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の深<sup>ふか</sup>き惠<sup>めぐみ</sup>は伊<sup>い</sup>勢<sup>せ</sup>の海<sup>うみ</sup>  
如何<sup>いか</sup>でか知<sup>し</sup>らむ底<sup>そこ</sup>の心<sup>こころ</sup>を。

二

罪<sup>つみ</sup>汚<sup>けが</sup>れ吾<sup>わが</sup>過<sup>あやま</sup>ちを憐<sup>あは</sup>れみて  
赦<sup>ゆる</sup>すは神<sup>かみ</sup>の力<sup>ちから</sup>なりけり。

三

許々こ多た久くの犯をせる罪つみを淨きよめむと  
開ひらかせ給たまひぬ命いのちの門かどを。

四

ためらはで御み神かみのかたに任まかせかし  
罪つみの重おも荷にも助たすけたまはむ。

五

皇すめ神かみの清きよめの道みちを聞きく人ひとは  
人ひとより幸さちの多おほき身み魂たまぞ。

六

言ことの葉はに稱たたへ盡つくせぬ皇神すめかみの  
惠めぐみに酬むくふ術すべもなきかな。

第五七

一

高たかき惠めぐみはスメールの 珍うづの御山みやまの白雪しらゆきに  
朝日あさひ輝かがやく如ごとくなり 天教山てんけうざんや地教山ちけうざん  
高天原たかあまはらの靈場れいぢやうの 姿すがたも如何いかで及およばむや  
神かみは愛あいなり光ひかりなり。

二

嚴いづの惠めぐみはいと深ふかし  
窺うかがふよしも荒波あらなみの  
千尋ちひろの海うみも如しかざらめ  
夕日輝ゆふひかがやく十和田湖とわだこの  
水みづにも勝まさり深ふかきかな  
神かみは愛あいなり光ひかりなり。

三

瑞みづの惠めぐみはいと廣ひろし  
空そら打ち仰あふぐ青雲あをくもの  
棚曳たなびくかぎり白雲しらくもの  
降居おりゐむかふす果はてまでも  
限かぎりあらしの眞砂地まさごぢに  
三五さんごの月つきの澄すみ渡る  
蒙古もうこの野のにも彌勝いやする  
靈みたまの海うみの廣ひろきかな  
神かみは愛あいなり光ひかりなり。

第五八



此世このよに生いきとし生いけるもの  
擧こぞりて迎むかへ奉たてまつれ

三千年さんぜんねんの昔むかしより  
待まちに待まちたる更すく生ひぬし主

嚴いづの御み靈たまは現あれましぬ  
瑞みづの御み靈たまは現あれましぬ

五み六ろ七くの御み世よは近ちかづきぬ。

堅かたく鎖とさせる鐵くろがねの  
嚴いづの扉とびらを打うち開ひらき

擒とりことなりし罪つみ人びとを  
放はなちて許ゆるす更すく生ひぬし主

嚴いづの御み靈たまは現あれましぬ  
瑞みづの御み靈たまは現あれましぬ

五み六ろ七くの御み代よは近ちかづきぬ。

三

天あめと地つちとの常世とこよ行ゆく

照てらさせ給たまふ御光みひかりと

瑞みづの御靈みたまは現あれましぬ

常夜とこよの闇やみを打うち開ひらき

嚴いづの御靈みたまは現あれましぬ

五み六ろ七くの御世みよは近ちかづきぬ。

四

惱なやみ萎しをれし村肝むらきもの

惠めぐみの露つゆを垂たれ給たまふ

瑞みづの御靈みたまは現あれましぬ

心こころの花はなを馨かをらせて

嚴いづの御靈みたまは現あれましぬ

五み六ろ七くの御代みよは近ちかづきぬ。

五

高たか天原あまはらの主ぬしと坐ます  
現あらはれたまひし更すく生ひ主ぬし  
賞ほめよ稱たたへよ眞ま心こに  
賞ほめよ稱たたへよ眞ま心こに  
賞ほめよ稱たたへよ神かみの御み子こを。  
誠まことの神かみの一人ひとり子こと  
其その御み功い績さをを信ま徒め等ひとら

第五九

—

勇いさみ喜よろこべ人ひとの子こよ  
閻やみに鎖とぎせし胸むねの戸とを  
迎むかへ奉まつれよ瑞みづ御み靈たま  
命いのちの神かみは現あれましぬ  
神かみの御み聲こゑに打うち開ひらき  
神かみは愛あいなり力ちからなり。

二

神かみの恵めぐみの御光みひかりは  
天津神あまつかみ人初ひとめとし  
珍うづの光ひかりを謳うたへかし

天地あめつち四方よもに充みち足たらふ  
蒼生あをひとも諸もろ共に  
神かみは愛あいなり權威ちからなり。

三

醜曲しこま神かみに呪のろはれし  
恵めぐみの光ひかり充みちぬれば  
幸さいはひあれと祝いはひ玉たまふ

暗くらき國くににも皇神すめかみの  
茨いばらも生はえず曲まがもなく  
神かみは愛あいなり權威ちからなり。

四

神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと惡あくとを立たて別わかける  
此この世よを造つくりし神かみ直なほ日ひ  
唯ただ何なに事ごとも人ひとの世よは 神かみの御み胸むねに任まかしつ  
われも人ひとも共ともに赤まご心ころを 捧ささげて仕つかへまつるべし  
神かみは愛あいなり權ちから威なりなり。

第六〇

—

暗やみ世よを照てらす朝あさ日ひ子この 光ひかりは清きよく昇のぼりけり  
罪つみに迷まよへる人ひと々びとよ 來きたりて仰あふげ御み光かりを  
愛あいの御み德とくに充みてる更き生ま主み 輝かがやき玉たまへり現うつし世よに

惱める人よ逸早く  
集ひ來りて御惠の  
露の御玉を浴びよかし。

二

智慧と權威に充ちたまふ  
命の主は現れませり  
虐げられし人々よ  
集まり來りてひたすらに  
平安と榮光と歡喜を  
下したまへと願ぎまつれ  
五六七の神代も近づきて  
靈の國より瑞御靈  
天津國より嚴御靈  
世界十字に踏み鳴らし  
豐葦原の中津國  
其の眞秀良場に照り玉ふ  
あゝ惟神々々  
神の御心有難き。

三

憂うきを慰なぐさめ浄きよめます  
惱なやみ苦くるしむ人ひと々は  
心こころの丈たけを告つげまつれ  
鳩はとの如ごとくに下くだりましぬ  
來きたりて生いきよ神かみの前まへ。  
來きたりて珍うづの御おん前に  
生いのち命ちを賜たまふ神かみの御み子こ  
罪つみと汚けがれに死しせし人ひと

四

現うつしよ世かくりよ幽もろ世とも諸もろ共ともに  
綾あやの聖せい地ちに下くだりましぬ  
老おいも若わかきもおしなべて  
生いかさせ給たまふ瑞みづ御み靈たま  
貴たかき卑ひくきの隔へだてなく  
來きたりて祝いはへ神かみの德とく。  
來きたりて祝いはへ神かみの德とく。

五

天と地とを統べたまふ  
大國常立大御神  
光となりて現れましぬ  
蒼生は云ふも更  
山河草木一時に  
動みて謳ふ神の御代  
あゝ惟神々々  
恩頼ぞ尊けれ。

第六一

—

神々達は榮えませ  
大地は安く穩かに  
蒼生の身魂には  
幸あれかすと謳ひます  
御使達の稱へ言  
御歌を聞きて諸人よ  
共に喜び謳ひつつ  
再び此世に現れましし



命いのちの主きみを稱たたへかし。

二

世よを久方ひさかたの神代かみよより 定さだめたまひし時とき來きたり  
救すくひの御手みてを伸のべたまひ 天津御座あまつみくらを立たち給たまひ  
八重やへ棚雲たなぐもを搔かき分わけて 綾あやの高天たかまに下くだりまし  
いといも卑いやしき賤しづの女めの 身魂みたまに宿やどりたまひつつ  
世よ人びとの中なかに交まじこりて 嚴いづの御靈みたまの御柱みはしらと  
現あれます 教をしへの教祖みおやがみ神かみ 稱たたへ奉まつれよ信徒まめひとよ。

三

嚴いづの御靈みたまは東雲しののめの

御空みそらを照てらして昇のぼります

朝日あさひの如ごとく輝かがやきて  
 暗くらき浮うきよ世よを照てらしつつ  
 盡つきぬ生いのち命めいを與あたへむと  
 現あらはれましし神かむばしら柱しら  
 元もと津つく國くになる神かみくに國くにに  
 嚴いづの光ひかりを世よに放はなち  
 地つちより生あれし人ひとの子こに  
 國くに常とこ立たちの命みこともて  
 稱たたへ奉まつれよ信まめ徒ひとよ  
 生うまれあひたる人ひと々びとよ。

(大正一二・五・二 舊三・一七 加藤明子録)

第七章 神地しんち〔一五五七〕

一

天津御空あまつみそらに集つどひます  
あまね 洽よく世びと人に傳つたへませ  
來きたりて拜をがめよ嚴いづ御魂みたま

神かみの使つかひよ詳まつぶさ細こに  
珍うづの聖せい地ちに逸いちはや早く  
瑞みづの御魂みたまの御柱みはしらをと。

二

教をしへを傳つたふる神かむつかさ司か 身みもたなしらに勵いそしみて  
空そらより來きたる清きよめの神かみの 聲こゑを畏かしこみ逸いちはや早く  
嚴いづの御魂みたまや瑞みづ御魂みたま 下くだりましたる綾あやの園その  
來きたりて拜をがめよ清きよめの主きみを。

三

形かたちの上うへに囚とらはれし  
綾あやの聖せい地ちにあれ給たまふ  
尋たづね来きたりて大おほ稜みいづ威び  
瑞みづの御み魂たまの清きよめの主きみを。

學まなびの司つかさよ逸いち早はやく  
此こ上よなく尊たふとき御み光ひかりを  
崇あがめ奉まつれよ嚴いづ御み魂たまに

四

神かみの御み靈たまを宿やどしたる  
綾あやの御みそののに上のぼり來きて  
心こころの限かぎり告つげ奉まつれ  
天あめより降くだりし瑞みづ御み魂たま

翁おきな姫めづなよ逸いち早はやく  
清きよめの主きみの御おん前まへに  
汝なれら等らを淨きよめむ其その爲ために  
五み六ろ七くの神かみの御おん前まへに。

五

寄邊渚の捨小舟よるべなきさ すてをぶね      とりつく島もなく斗りしま ばか  
 憂ひに沈む人々ようれ しづ ひとびと      綾の聖地に上り来てあや せいち のぼ き  
 清めの主を伏し拜みきよ きみ ぶ かが      身魂を清く明けくみたま きよ あきら  
 鍛へ奉れよ神の前きた まつ かみ まへ      五六七の神は天降りましみ ろく 七 かみ あも  
 恵みの御手を伸べさせてめぐ みて の      汝が身魂を救ふべしなれ みたま すく  
 あゝ惟神々々かむながらかむながら      神の御稜威ぞ尊けれ。かみ み いづ たふと

第六三

—

天津使の宣る歌はあまつつかひ の うた      御空を渡り地に響くみそら わた ち ひび  
 神の一人子と現れませるかみ ひとりこ あ      瑞の御魂は御空よりみづ みたま みそら

地上に降り給ひぬと。

二

更生主は降りて世の爲に  
寶座となりて現世の  
珍の宮居となし給ふ。  
穢れし人の身魂をば  
賤の御舟となり給ひ

三

高き低きも押立てて  
清めの主を祝ひませ  
充てる東の月光を  
神の御子なる嚴御魂  
望みの光の天地に  
稱へ奉れよ人の子よ。

四

嚴いづの御魂みたまよ瑞御魂みづみたま  
 御側みそばに近くちか吾魂わがたまを  
 生命いのちの更生き主みよ永遠とこしへに  
 住すまはせ給たまへ現身うつそみの  
 吾等われらを清きよむる神柱かむばしら  
 吾等われらと共にともましませよ。

第六四

一

三千年みちとせあまる古いにしへに  
 御代みよを守りまもし嚴御魂いづみたま  
 あかして茲こゝに千萬ちよろづの  
 初はじめて天あめより降くだりまし  
 瑞みづの御魂みたまの訪おとづれを  
 妙たへなる歌うたとなりなりにけり。

二

世を良に隠れたる  
 三千世界の梅の花  
 二度天の岩屋戸を  
 その神業を祝ぎて  
 いとも清けくなりけり。

嚴の御魂の表はれて  
 薫る常磐の春は來ぬ  
 開きて暗夜を照します  
 今千萬の稱へ歌

三

老も若きも皆歌へ  
 長閑に天地に輝きて  
 變りし五六七の神の世を  
 恵の日光は春の如  
 冬の夜半さへ春景色  
 祝ひて百千の歌成れり。



四

八十路の坂を越え乍ら

罪の重荷を負ひたまひ

世人を清め助けむと

國常立の命もて

現はれ給ひし嚴御魂

その御恵を稱へむと

百千萬の歌成れり。

第六五

一

青人草に御恵の

露をば降らせ荒金の

土には平安を來しつつ

神には御榮光あれかしと

謳<sup>うた</sup>ふも清<sup>きよ</sup>き神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup> 天津<sup>あまつ</sup>使<sup>つかひ</sup>の涼<sup>すず</sup>しげに  
謳<sup>うた</sup>ふ御<sup>み</sup>聲<sup>こゑ</sup>は春<sup>はる</sup>霞<sup>がすみ</sup> 遙<sup>はる</sup>かに更<sup>ふけ</sup>行<sup>ゆ</sup>く夜<sup>よ</sup>の耳<sup>みみ</sup>に  
いと賑<sup>にぎは</sup>しく響<sup>ひび</sup>きけり。

二

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の更<sup>すく</sup>生<sup>ひぬ</sup>主<sup>し</sup> 數<sup>あまた</sup>多<sup>た</sup>の使<sup>つかひ</sup>と諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に  
つかれし此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>を守<sup>まも</sup>らむと 綾<sup>あや</sup>の高<sup>たか</sup>天<sup>ま</sup>に降<sup>くだ</sup>りまし  
騒<sup>さわ</sup>ぎ悲<sup>かな</sup>しむ都<sup>みや</sup>路<sup>ぢ</sup>や 苦<sup>くる</sup>しみ惱<sup>なや</sup>む鄙<sup>ひな</sup>にさへ  
慰<sup>なぐさ</sup>め與<sup>あた</sup>ふる言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の 榮<sup>さかえ</sup>光<sup>か</sup>の歌<sup>うた</sup>を宣<sup>の</sup>り給<sup>たま</sup>ふ。

三

罪<sup>つみ</sup>の重<sup>おも</sup>荷<sup>に</sup>を背<sup>せ</sup>負<sup>お</sup>ひつつ

浮<sup>うき</sup>世<sup>よ</sup>の旅<sup>たび</sup>路<sup>ぢ</sup>に行<sup>ゆ</sup>き惱<sup>なや</sup>む

いととも憐れな人の子よ  
頭をもたげて大空に  
輝き渡る喜びの  
光を謳ふ神人の  
いと楽しげな御聲をば  
聞きて安けく憩へかし。

四

天津御國の御使の  
清けき歌に地の上は  
平安と榮光と歡喜の  
雨は頻りに降り來る  
代々の聖者のあこがれて  
待ちに待ちたる神國に  
五六七の神を仰ぎ見て  
清めの主と稱へつつ  
普く此世に住める民  
聲を揃へて御惠の  
廣き厚きを謳はなむ。

第六六

一

心の限り身のかぎり  
 天津御神や國津神  
 拜み奉り吾魂を  
 清め助くる瑞御魂  
 功績を稱へて勇みたつ。

二

卑しき此身も捨てまさず  
 御使人となし玉ひ  
 堅磐常磐の御末まで  
 恩頼を幸ひて  
 恵ませ玉ふ嬉しさよ。

三

神かみの御名おんなはいと清きよく  
世よ々に絶たえせぬ慈愛いつくしみ  
伊い仕つひ奉まつる人ひとこそは

その神業かむわざは畏かしこけれ  
眞心まごころこめて朝夕あさゆふに  
宇豆うづの恵めぐみを受うくるなり。

四

憂うれ瀨せに落おちて惱なやみたる  
高たか天あま原はらの神國かみくにに  
心こころ驕おごれる曲まが神がみを  
朝あしたの御霧みぎりと打拂うちばらひ  
進すすませ給たまふ有難ありがたさ  
言向和ことむけやはし雲霧くもぎりも  
守まもらせ給たまふ尊たふとさよ。  
辱弱かよわき人ひとを救すくひ上あげ

五

第六七

此世を照す神の子の  
 御裔を永久に省みて  
 五十鈴の川の流れをば  
 忘れ玉はず永久に  
 洗はせ玉ふ瑞御魂  
 その功績ぞ尊けれ。

一

御空に清く澄渡り  
 響くは何の調ぞや  
 天津使の寄り合ひて  
 神の稜威の妙なるを  
 歌ひ舞ひつつ叫ぶ聲。

二

世よの大本おほもとを造つくらしし  
誠まこと一つの皇神すめかみに  
御榮みさかえあれとすがしくも  
合あひたる歌うたの聲清こゑきよし。

三

神かみの恵めぐみの訪おとづれは  
高天原たかあまはらは言いふも更さら  
豊葦原とよあしはらのはてまでも  
神かみのまにまに響ひびき行ゆく。

四

瑞みづの御魂みたまの更生すくひぬし主  
天津御神あまつみかみの御言みこともて  
地ちじよう上うまに生たまれ給たまひけり  
島しまの八やそ十しま島やそ八そ十その國くに  
至いたらぬ隈くまなく住すむ人ひとは  
清きよく迎むかへて御榮光みさかえの  
誠まことの更生き主みと仰あふぐべし  
あゝ惟神かむながらかむながら々々

五六七の御代ぞ有難き。

第六八

一

嚴いづの御魂みたまの清きよめ主ぬし天あめより降くだり玉たまひけり  
求まぎてや行ゆかむ綾あやの里さと清きよき御聲みこゑを聞きかむため。

二

賤しづが伏屋ふせやに生あれましし教をしへ御祖みおやの嚴いづ御魂みたま  
直日なほひの主ぬしの神代かみしろは誠まことの神かみの御柱みはしらぞ



仰あふぎ敬うやまへ百人ももびとよ。

三

天あめにまします皇神すめがみに  
御榮光みさかえあれと歌うたひつる  
天津使あまつつかひの聲こゑすなり  
此地このちの上うへに住すむ人も  
皆みな押おし竝なべて御光みひかりを  
賞ほめ稱たたへつつ村肝むらきもの  
心こころの玉たまを研みがくべし  
いや永久とこしへの御言葉みことばは  
今更いまあらためて降くだりけり  
五六七みろくの御代みよの來きたる日ひを  
待まち佗わびみたりし諸人もろびとよ  
己おのが御幸みさちを祝いはふべし。

第六九

一

御空みそらに閃ひらめく千ちよろづ萬づの  
 神かみの御み威い稜づを永とこしへ遠へに  
 清きよめの頼たよりと仰あふぎてし  
 御空みそらに輝かがやく三みつの星ほし。

伊い都づの星ほし光かげ眺ながむれば  
 謳うたひ奉まつれど罪つみ人びとの  
 光ひかりは高たかき花かめ明や山まの

二

黒あやめ白めも分わかぬ暗やみの夜よに  
 荒あれに荒あれたる海うなばら原らに  
 今いまや沈しづむと死しを待まちし  
 望のぞみとなりしは花かめ明や山まの

嵐あらしは烈はげしく吹ふき猛たけり  
 漂ただよふ舟ふねは危あやふくも  
 悲かなしき時ときに只ただ一ひとつ  
 空そらに輝かがやく三みつの星ほし。

三

嵐あらしをのこ残し暗やみをあと後に

見み捨すてて船ふな路ぢ恙つがなく

神かみのみなと港に來きたりけり

今いまよりよ夜よなよ夜な畏おそれつし謹みて

御み空そらをあふ仰ぎ手てをう拍ちて

稱たへうた謳はむか花め明や山まの

空そらにかが輝やくみ三つのほし星。

第七〇

一

野の山やまのく草さ木きもは花な咲さくは春るをこ焦がれてた樂のしくね眠むりつつ

木こ枯が荒らぶす冬ふゆのよ夜の 惱なやみも知しらぬ神かみ心こころ

天と地とに隈もなく  
瑞の御魂の御誓ひの  
人こそ實にも尊けれ。

望みは充ちて月の神  
なる日を静かに待ち暮す

二

雨と露との露ひに  
草木によりて諸々の  
己の命を捨ててこそ  
詳細に委曲に遂ぐるなり。

百の草木も茂るなり  
生きたるものは皆育つ  
始めて愛の御業をば

三

元津御祖の皇神も

背きし御子を憐れみて

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の珍<sup>うづ</sup>の子<sup>こ</sup>に  
世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>の爲<sup>ため</sup>に御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>より  
限<sup>かぎ</sup>りも知<sup>し</sup>らぬ皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の  
如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>にう<sup>つ</sup>つさむ術<sup>すべ</sup>もなし。  
千<sup>ち</sup>座<sup>くら</sup>の置<sup>お</sup>戸<sup>きど</sup>を負<sup>お</sup>はせつ  
降<sup>くだ</sup>し玉<sup>たま</sup>へる有<sup>あ</sup>難<sup>りがた</sup>さ  
惠<sup>めぐ</sup>みの露<sup>つゆ</sup>の畏<sup>かしこ</sup>さを

四

天<sup>あま</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>空<sup>そら</sup>に御<sup>み</sup>使<sup>つかひ</sup>の  
涼<sup>すず</sup>しく響<sup>ひび</sup>く琴<sup>こと</sup>の音<sup>ね</sup>に  
輝<sup>かが</sup>く群<sup>むれ</sup>を伏<sup>ふ</sup>し拜<sup>をが</sup>め  
妙<sup>たへ</sup>なる神<sup>かみ</sup>の御<sup>おん</sup>歌<sup>うた</sup>に  
寄<sup>よ</sup>りて御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>と此<sup>この</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>  
日<sup>い</sup>月<sup>つき</sup>の調<sup>しらべ</sup>は整<sup>ととの</sup>ひぬ。

五

背そむきし仇あだを彌いや深ふかく  
此この世よの清きよめの御み柱しらと  
いいざ人ひと々びとよ身みも魂たまも  
心こころの限かぎり祝いはへかし。

慈いつくしみます瑞みづ御み魂たま  
貴うづの聖せい地ちに現あれましぬ  
捧ささげて今こよひ宵ひの御み惠めぐみを

六

天てん地ちも清きよき今こよひ宵ひこそ  
島しまの八や十そ島しま八や十その國くに  
五み六ろ七くの末すゑの代よ俣しのぶ時とき

昔むかしの神かみ代よぞ俣しのばるる  
神かみの御み國くにと變かはり行ゆく  
喜よろこび溢あふれて歌うたとなりぬ。

第七一

一

東あづまの空そらに輝かがやける  
 星ほしをしるべに道みち遠とほく  
 たづね來きたりし識ものしり者が  
 救すくひの御み子こに會あひし如ごと  
 今いまも吾われ等らを御おん前まへに  
 導みちびき玉たまへと願ねぎまつる。

二

喜よろこび胸むねに充みち溢あふれ  
 天あま津つ御み神かみの一人ひとり子ごを  
 馬ば槽さうに近ちかづき拜をがみたる  
 人ひとの如ごとくに吾われ々われも  
 瑞みつの御み魂たまの更すく生ひぬ主し  
 仰あふがせ玉たまへと願ねぎ奉まつる。

三

龍たつの宮居みやゐの皇神すめかみの  
授さうけ玉たまひし玉手たまて筥ばこ  
開ひらきし如ごとく大前おほまへに  
禮代いやしろ通とほして吾寶わがたから  
一ひとつも殘のこさず大前おほまへに  
いたさせ玉たまへと願ねぎ奉まつる。

四

狭せまき野道のみちも嶮けはしき坂さかも  
踏ふみあやまらで草枕くさまくら  
旅路たびぢ終をはらば望月もちづきの  
しるべを頼たよらむ神國かみにに  
入いらしめ玉たまへと願ねぎ奉まつる。

五

天津御國あまつみくにを永遠とこしへに  
照てらす光ひかりは現世うつしよの  
目めに見みる月日つきひに非あらずして  
永遠とこしへの榮光さかえの御神みかみなり



神かみの御子おんこと生うまれたる  
神かみの稱たへの御聲おんこゑを

吾等われらは朝あさ夕ゆふ潔けいく  
歌うたはせ玉たまへと祈ねぎ奉まつる。

（大正一二・五・二 舊三・一七 北村隆光録）

第八章 神臺しんだい（一五五八）

第七二

一

此世このよを造つくり固かためたる

元津御祖もとつみおやの大神おほかみの

天降り玉ひて諸人の  
罪や穢れを清めつつ  
やすきに生かせ玉ふなる  
五六七の御代は近づきぬ  
あゝ惟神々々  
仰ぎ敬へ伊都御魂。

二

綾の高天の蓮華臺  
珍の御祭なす毎に  
御空は清く地の上は  
恵みの雨に霑ひて  
歡喜の花は咲き匂ふ  
平和の流れは由良の川  
清めの水は滔々と  
溢るるばかり澄み渡る  
美都の御魂の御功績  
喜び祝ひ奉れ。

三

粟<sup>あは</sup>なす百<sup>もも</sup>の王<sup>きみ</sup>たちは 神<sup>かみ</sup>の御前<sup>みまへ</sup>に平伏<sup>ひれふ</sup>して  
黄<sup>こがね</sup>金<sup>しろがね</sup>白<sup>うづた</sup>銀<sup>たから</sup>珍<sup>み</sup>寶<sup>つぎ</sup> 貢<sup>たてまつ</sup>物<sup>つぎ</sup>となして奉<sup>たてまつ</sup>り  
世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>の爲<sup>ため</sup>に祈<sup>いの</sup>りをば 日<sup>ひ</sup>毎<sup>ごと</sup>夜<sup>よ</sup>毎<sup>ごと</sup>に捧<sup>ささ</sup>げつつ  
五<sup>み</sup>六<sup>ろ</sup>七<sup>く</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>を嬉<sup>うれ</sup>しみて 心<sup>こころ</sup>の限<sup>かぎ</sup>り戀<sup>こひ</sup>慕<sup>した</sup>ふ  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>稜<sup>いづ</sup>威<sup>づ</sup>ぞ畏<sup>かしこ</sup>けれ 神<sup>かみ</sup>の光<sup>ひかり</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>けれ。

第七三

一

東<sup>あづま</sup>の空<sup>そら</sup>に輝<sup>かがや</sup>きし 五<sup>み</sup>六<sup>ろ</sup>七<sup>く</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>を三<sup>み</sup>つ星<sup>ぼし</sup>や  
光<sup>ひかり</sup>を下<sup>げ</sup>界<sup>かい</sup>に放<sup>はな</sup>ちつつ 清<sup>きよ</sup>め<sup>の</sup>主<sup>きみ</sup>の在<sup>ま</sup>す村<sup>むら</sup>に  
しるべとなりて闇<sup>やみ</sup>の夜<sup>よ</sup>に 迷<sup>まよ</sup>ふ人<sup>ひと</sup>々<sup>びと</sup>導<sup>みちび</sup>けよ。

二

雨洩り柱歪みたる

賤が伏屋に産聲を

あげし清めの瑞御魂

天と地との神人の

司となりて世に出づる

神の仕組ぞ畏けれ。

三

四方の國人逸早く

深山の奥に分け入りて

黄金白銀珍寶

芽出度きものを取集め

神世の柱とあれませる

浄めの主に眞心を

つくして捧げ奉れ。

四

ももちよろづ 百千萬の珍寶 御前に貢ぎ奉り  
 ましころ 眞心こめて仕ふとも 神の恵みに比ぶれば  
 おほつなばら 大海原に漂へる 波の沫の一つだに  
 およすべ 及ぶ術なき貢物 神の御言を畏みて  
 いける 生ける勤めを勵みなば これに過ぎたる貢物なし  
 あをひとぐさ 靑人草よ信徒よ 心の限り身の極み  
 みづ 瑞の御魂の言の葉を 身魂の糧と仰ぎつつ  
 しぐみ 仕組に仕へ奉れ。

第七四

青垣山を繞らして 緑滴る綾の里に  
そそぎ玉ひし恵みの雨は 乾き果てたる魂を  
清く豊に霑はし 永遠の生命を與へ玉ふ。

二

暗にさまよふ魔神の胸を はらし玉へる神柱  
珍の御聲を畏みて 聞かむと先を争ひつ  
寄り來る身魂ぞ美はしき 來りて聞けよ懐しき  
情のこもる御聲を。

三

此世の光に立ち別れ

夜なき國に進む時

ありし昔の思ひ根を  
望みの月の神國へ  
昇らせ玉へ惟神  
後に残さずすくすくと  
暗き身魂を導きて  
恩頼を願ぎ奉る。

四

山の尾の上の一ノ瀬の  
千代に盡きせぬ御恵の  
嚴の御魂の我教祖  
死せし御魂を神國に  
仰ぎ敬へ信徒よ  
吾等が命の綱とまし  
甦生らせる光なり  
拜み奉れ奥津城を。

第七五

瑞みづの御魂みたまの言ことの葉はは 此世このよの中なかに生出おひいでし

青人草あをひとぐさの朝夕あさゆふに 行おこなひ行ゆくべき務つとめなり

その行おこなひは唯人ただひとの 目めには怪あやしく映うつれども

天地てんちの神かみの定さだめてし 生いける誠まことの掟おきてなり

心こころを清きよめて魂たましひを 直日なほひに研みがき磨とぎすまし

必かならず過あやまつ事こと勿なかれ 神かみは愛あいなり光ひかりなり。

瑞みづの御魂みたまの靈たま幸ちはふ 惠めぐみの露つゆは天地あめつちに

空くう氣きの如ごとく充みち足たらふ 誠まことの宣のり言りは天地あめつちに

伊行いゆき渡わたらひ隈くまもなく 人ひとの心こころを照てらし行ゆく



仰あふぎ尊たふとべ嚴いづ御み魂たま

御み袖そでの影かげに立たち寄よりて。

三

草くさ木きも生はえぬ岩いは山やまも

荒あ野らのヶ原がはらのはてまでも

千ち代よに八や千ち代よに語かたらねど

無む言ごんの言こと靈たま相あひ放はなち

瑞みづの御み魂たまの御み惠めぐみを

彌いや永とこ久しへに稱たたふなり

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

いかに山さん野やの草くさや木きに

劣おとりし事ことのあるべきぞ

省かへりみせよや皇すめ神かみの

瑞みづの御み魂たまの御おん聖な苦やみ。

四

瑞みづの御み魂たまは方はう圓えんの

器うつはに随したがひますと聞きく

此世このよに生いける人ひとの子こよ  
神かみの教をしへに照てらしつつ  
瑞みづの御魂みたまの御鏡みかがみに  
神かみは汝なんぢと俱ともにあり  
己おのが身魂みたまをよく清きよめ  
珍うづの姿すがたを映うつせかし  
日ひに夜よに心行こころなひを

## 第七六

一

罪つみに穢けがれし人ひとの身みも  
祈いのらせ玉たまふ瑞御魂みづみたま  
荒野あれのの末すゑも變かはりなく  
仰あふぎ敬つやまへ神かみの德とく  
慕したひまつれよ神かみの愛あい。  
榮さかえあれよと朝夕あさゆふに  
情なさけの聲こゑは山里やまざとも  
響ひびき渡わたるぞ尊たふとけれ

二

瑞みづの御魂みたまの御聲おんこゑの  
妙音めうおんぼさつ菩薩おんがくの音樂おんがくも  
來りて聞きけよ神かみの聲こゑ。

その美うるはしさ迦羅嚩伽カラビンガ  
例たとへにならぬ勇いさましさ

三

百ももの罪科つみとが穢けがれをば  
神かみの御前みまへに平伏ひれふして  
諾うべなひまして片時かたときも  
生いかさせ玉たまへと惟神かむながら

袂はらはむ爲ために朝夕あさゆふに  
祈いのり奉まつりし誠心まごころを  
早はやく御許みもとに招まねき寄よせ  
神かみに誓ちかひて願ねぎ奉まつれ。

四

心の裡に暴狂ふ  
 荒波高く立ち騒ぎ  
 命の舟を覆さむと  
 襲ひ來りし魔暴風を  
 鎮める由もなきままに  
 歎き悲しむ時もあれ  
 瑞の御魂は忽ちに  
 清めの舟を漕ぎ出して  
 千代に八千代に安らけき  
 珍の島根に救ひ上げ  
 恵み玉ふぞ尊けれ  
 仰ぎ敬へ諸人よ  
 愛の御神の御姿を。

五

行く手は闇に包まれて  
 虎狼の哮え猛り  
 恐れ惑へる夜の道も  
 伊都の言靈宣りつれば  
 忽ち開く天地の  
 恵みの光は輝かむ  
 賞めよ稱へよ嚴御魂  
 瑞の御魂の御功績

神かみは汝なんぢと俱ともにあり。

第七七

一

御み惠めぐみに輝かがやき愛あいに薰かをりたる  
嚴いづの御み魂たまの御み跡あと美うるはし。

二

世よの人の憂うれひも罪つみも身み一つに  
負おひ玉たまひたる御み魂たまぞ尊たふとし。

三

千座ちくらなす置戸おきどを負おへと叫さけびたる  
仇あだをも許ゆるす瑞みづの神柱みはしら。

四

責せめらるる苦くるしき身みにも虐しひたぐる  
仇あだを愛あいする心賜こころたまはれ。

五

仇あだをなす醜人しこびとのみを憐あはれみて  
平安やすきを祈いのる心賜こころたまへよ。

第七八

一

瑞御魂千座を負ひし月と日に  
優りて尊き折こそあらめや。

二

宮垣内湧き出る水は世の人の  
罪を清むる命なりけり。

三

世よの人の呪のろひを愛あいに宣のり直なす  
人ひとの心こころに神國かみくにはあり。

四

喜よろこびと悲かなしみ胸むねに往ゆき交かひて  
涙なみだのみづの御跡みあと露つるほす。

五

罪つみ科とがも恐おそれもいつか消きえ果はてて  
神かみの教をしへに望のぞみ湧わき出いづ。

六



仰あふぐさへいとも畏かしこき慈いつくしみの  
神かみの御みもと許もとを吾われ離はなれむや。

第七九

一

教をしへ祖みおやの嚴いづ御み魂たま 貴たかき御み神かみの御み靈たまなれど  
吾われ等らの罪つみや穢けがれをば 洗あらひ清きよめて生いかさむと  
賤しづが伏ふせ屋やにあれまして 清きよき教をしへを宣のり玉たまふ。

二

醜しこの曲津まがつの荒すさぶなる  
天てんより高たかう咲さく花はなも  
蔑さげすまれつつ朝あさ夕ゆふに  
深ふかき恵めぐみを仰あふぐべし。

汚きたき浮世うきよの人の目ひとめに  
荒あれたる冬ふゆ野のの木きの如ごとく  
嚴いづの言こと靈たま宣のり玉たまふ

三

限かぎり知しられぬ憂うき苦く勞らう  
安やすく眠ねむらむ家いへも無なく  
果は敢かなき人ひとと呼よばれつつ  
教祖をしへみおやぞ尊たふとけれ。

艱難なやみに耐たへて朝あさ夕ゆふに  
所ところもなくて悲かなしみの  
清きよめの道みちを宣のべ玉たまふ

四

高たか天原あまはらの靈國れいこくの 月つきの御神みかみは聖靈せいれいを  
充みして瑞みづの神かみの子こに 降くだらせ玉たまひ言靈ことたまの  
伊吹いぶきの狭霧さぎりに暗やみの夜よを 照てらさせ玉たまふぞ畏かしこけれ  
仰あふぎ敬うやまへ嚴御魂いづみたま 慕したひ奉まつれよ瑞御魂みづみたま。

第八〇

一

嚴御魂いづみたま暗くらき此世このよに降くだり來きて  
世人よびとの爲ために蔑さげすまれ玉たまふ。

二

瑞御魂負はせ玉へる八千座の  
上人なき恵みを世の人は知らず。

三

一度は天津御神や國津神  
百の罪科負はせ玉ひぬ。

四

素盞鳴の神の恵みに村肝の  
心せまりて涙零るる。

五

河かはなせる涙なみだもいかで報むくゆべき  
身み魂たま捧ささげて恵めぐみに報むくいむ。

第八一

—

神かみの恵めぐみの永とこ久しへに  
清きよき眞ま清しみ水みづ汲くむ人ひとは  
瀨せ織おり津つ姫ひめに洗あらはれて  
仕つかふる身みとぞなりぬべし  
瑞みづの御み魂たまぞ尊たふとけれ。  
流ながれ溢あふる由ヨル良ダ川の  
罪つみも穢けがれも苦くるしみも  
高たか天あま原はらの信まめ徒ひとと  
あゝ惟かむながらかむながら神かむ々々

二

嚴いづの御魂みたまや瑞御魂みづみたま 上こよなき恵めぐみを身みにしめて  
 罪つみに亡ほろびし世よの中なかを 生いかし榮さかゆる神かみの道みち  
 進すすみて世よの爲ため人ひとの爲ため 吾わが身みを忘わすれて勤つとむべし  
 神かみは汝なんぢと俱ともにあり。

三

百ももの誹そしりや嘲あざけりも サタンの審判さばきの道みちなきも  
 世よ人びとの爲ためには厭いとはずに 笑ゑが顔を以もちて迎むかへたる  
 淨きよめの主きみの御恵みめぐみを 暗やみにさまよふ人ひと々は  
 悟さとる術すべなき果敢はかなさよ 仰あふぎ敬うやまへ嚴御魂いづみたま  
 慕したひ奉まつれよ瑞御魂みづみたま。

（大正一二・五・三 舊三・一八 北村隆光録）

第九章 神行しんかう（一五五九）

第八二

一

移うつり行ゆく世よにも變かはらず永とこ遠とはに  
たたせたまへる嚴いづの御み柱しら。

二

御教みをしへの光ひかりは百ももの罪咎つみとがを  
拂はらひ清きよむる嚴いづの言靈ことたま。

三

怖おそれ惱なやみ罪つみに圍かこまる身みなりとも  
やすきを與あたふ瑞靈みづの御柱みはしら。

四

瑞御靈嚴みづみたまいづの御靈みたまの御光みひかりに  
人ひとの踏ふむべき道みちを悟さとりぬ。

五



世よの中なかの善よきも悪あしきも幸さいも  
禍わざはひともに澄すます御み教をしへ。

### 第八三

一

千ち早はや振ふる神かみの教をしへに從したがひて  
愛あいの溢あふるる神みくに國くにへ往ゆかむ。

二

千ち座くらなす置おき戸とをお負おひて世よの爲ために

盡つくしたまひし君きみをしぞ思おもふ。

三

八千座やちくらの上うへにも嚴いづの喜よろこびの  
絶たえず溢あふる瑞靈みづみたまかも。

四

夜よるもなく冬ふゆなき國くにに昇のぼるまで  
千座ちくらの下もとに立たちてぞ待またむ。

第八四

一

常<sup>とこ</sup>暗<sup>やみ</sup>の夜<sup>よ</sup>はますますに更<sup>ふ</sup>けゆきぬ  
民<sup>たみ</sup>安<sup>やす</sup>かれと祈<sup>いの</sup>るわが更<sup>き</sup>生<sup>み</sup>主<sup>み</sup>。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の胸<sup>むね</sup>もはりさく苦<sup>くる</sup>しみを  
夢<sup>ゆめ</sup>にも知<sup>し</sup>らぬ御<sup>み</sup>弟子<sup>こ</sup>ぞうたてき。

三

世<sup>よ</sup>の罪<sup>つみ</sup>に泣<sup>な</sup>きて祈<sup>いの</sup>れる吾<sup>わが</sup>きみを  
元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>は嘉<sup>よみ</sup>したまはむ。

四

大空おほぞらゆ 天津あまつつ使かひの 下くだり 來きて  
更き生み主まへの 御み前まへに 侍はべる 尊たふとさ。

第八五

一

瑞みづの 御み靈たまの 千ち座くらを 見みれば  
物ものの 數かずか は 誇ほこる に 足たらず。

富とみも 譽ほまれも 希のぞ望みも な べ て

二

千座ちくらの下もとに吾われ寄り立たちて  
卑いやしき心こころを留とめざらしめよ。

此世このよの空むなしき寶たからや富とみに

三

手足てあしの爪つめまで拔ぬかれまし  
洗あらひたまひし尊たふとさよ。

血ちをもて吾等われらの罪咎つみとがを

四

總すべての物ものを奉たてまつり  
大御惠おほみめぐみの萬分まんぶ一いつ

赤心まごころ籠こめて盡つくすとも  
報むくゆすべなき人ひとの身みは

魂たまを捧ささげて仕つかへなむ。

五

曇<sup>くも</sup>り果<sup>は</sup>てたる世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に  
千<sup>ち</sup>座<sup>くら</sup>の置<sup>おき</sup>戸<sup>ど</sup>を負<sup>お</sup>ひましし  
常<sup>とこよ</sup>世<sup>よ</sup>の春<sup>はる</sup>を過<sup>す</sup>ごさなむ。

果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき生<sup>いの</sup>命<sup>ち</sup>を保<sup>たも</sup>ちつつ  
更<sup>き</sup>生<sup>み</sup>主<sup>み</sup>が恵<sup>めぐみ</sup>を嬉<sup>うれ</sup>しみて

第八六

一

清<sup>きよ</sup>め<sup>め</sup>の主<sup>きみ</sup>は瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
榮<sup>さか</sup>えませしぞ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>

蘇<sup>よみ</sup>生<sup>が</sup>りしぞ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>  
尊<sup>あが</sup>めまつれよ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>。

二

千座ちくらを負おひし瑞御靈みづみたま  
生命いのちの主きみの瑞御靈みづみたま

罪つみに勝かちたる瑞御靈みづみたま  
人ひとをば生いかす瑞御靈みづみたま。

三

惱なやみを受うけし瑞御靈みづみたま  
月つきの御神みかみは瑞御靈みづみたま

世よびと人を癒いやす瑞御靈みづみたま  
吾等われらの友ともなる瑞御靈みづみたま。

第八七

一

嚴いづの御靈みたまの神柱かむばしら 瑞みづの御靈みたまの清きよめ主ぬし  
此世このよにあれます其限そのかぎり 吾等われらは死しをも恐おそれまじ。

二

吾等われらの御親みおやとあれませる 嚴いづの御靈みたまは永遠とこしへに  
生きて守まもらず其上そのうへは 死しするは滅ほろびに非あらずして  
いや永遠とこしへに榮さかゆなる 生命いのちに在あるの門かどぞかし。

三

嚴いづの御靈みたまの神柱かむばしら 瑞みづの御靈みたまの在ますかぎり  
夜よも死しも冥途めいどの曲津靈まがつひも 如何いかでか吾等われらを襲おそふべき  
神かみは生命いのちの御親みおやなり。



四

嚴いづの御靈みたまの神柱かむばしら  
瑞みづの御靈みたまの清きよめ主ぬし

此この世よに現あらはれいます上うへは  
天地あめつちこそりて吾あが主きみと  
齋いつきまつらむ五み六ろ七くの代よ  
俣しのぶも嬉うれしき限かぎりなり。

五

嚴いづと瑞みづとの二柱ふたはしら  
此この世よに現あらはれます限かぎり

天あめ地つち四よ方もは安やすらけく  
花はな咲さく春はると榮さかえゆく  
其その功いさ績をしぞ嬉うれしけれ。

第八八

一

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>御<sup>いく</sup>軍<sup>さ</sup>に勝<sup>かち</sup>鬪<sup>ど</sup>あ<sup>げ</sup>て  
 綾<sup>あや</sup>の<sup>た</sup>高<sup>か</sup>天<sup>ま</sup>へ歸<sup>かへ</sup>ります  
 瑞<sup>みづ</sup>の<sup>み</sup>御<sup>たま</sup>靈<sup>ま</sup>の<sup>み</sup>御<sup>は</sup>柱<sup>しら</sup>を  
 賞<sup>ほ</sup>めよ稱<sup>た</sup>へよ信<sup>ま</sup>徒<sup>め</sup>等<sup>とら</sup>。

二

瑞<sup>みづ</sup>の<sup>み</sup>御<sup>たま</sup>靈<sup>ま</sup>の<sup>み</sup>吾<sup>あ</sup>が更<sup>き</sup>生<sup>み</sup>主<sup>み</sup>は  
 惡<sup>あく</sup>魔<sup>ま</sup>の<sup>つ</sup>司<sup>かさ</sup>や死<sup>し</sup>の<sup>く</sup>國<sup>くに</sup>の  
 長<sup>を</sup>の<sup>さ</sup>軍<sup>いく</sup>を<sup>さ</sup>やぶ<sup>ら</sup>せ<sup>て</sup>  
 高<sup>た</sup>天<sup>あ</sup>原<sup>ま</sup>に歸<sup>かへ</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>ぬ</sup>。

三

日<sup>ひ</sup>の<sup>で</sup>出<sup>で</sup>の<sup>み</sup>御<sup>よ</sup>代<sup>よ</sup>と<sup>な</sup>る<sup>ら</sup>ば  
 黄<sup>よ</sup>泉<sup>み</sup>の<sup>く</sup>國<sup>くに</sup>を<sup>ば</sup>晴<sup>は</sup>らし<sup>つ</sup>つ  
 綾<sup>あや</sup>の<sup>た</sup>高<sup>か</sup>天<sup>ま</sup>へ勇<sup>い</sup>ま<sup>し</sup>く  
 歸<sup>かへ</sup>りて<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>を<sup>ば</sup>治<sup>を</sup>め<sup>たま</sup>ふ。

四

千座ちくらの置戸おきどに吾靈わがたまの  
御創みきずの血潮ちしほに吾惱わがなやみ  
清きよき言靈ことたま張はり上あげて

死しをば生いかされ手てや足あしの  
いと安やすらけく癒いやされぬ  
稱たたへよ謳うたへよ貴美きみの稜威いづ。

第八九

一

黄泉よみの國くによりうとび來くる  
瑞みづの御靈みたまは悉ことごとく  
言こと向むけ和やはしたまひける  
曲まがの軍いくさに立たち向むかひ  
四方よもの國くに人ひと勇いさみたて  
惡魔あくまの力ちからは失うせ果はてて

神かみの御み子こなる人ひとの身みに  
慕したへよ祝いはへよ嚴いづ御み靈たま

瑞みつの御み靈たまの神かむ柱ばしら。  
永と久はの生いの命ちを賜たまふべし

二

瑞みつの御み靈たまの神かむ柱ばしら 靈たまの御み國くにのいと高たかき  
清きよき御み座くらにましまして 天あま津つ使つかひに圍かこまれつ  
常とこ世よの歌うたを謳うたひたまふ 喜よろこび勇いさめ人ひと々びとよ  
限かぎりも知しらぬ玉たまの緒をの 生いの命ちの主きみの御おん前まへに。

生いの命ちの主きみの御おん前まへに。

三

明あ日すをも知しれぬ現うつ身そみの  
絶たえぬ此この世よに住すむ人ひとは

生いの命ちを長ながらへ苦くるしみ  
いと耐たへ難がたく悲かなしきを

神かみの御み稜い威づに助たすけられ  
榮さかえ行ゆくこそ尊たふとけれ  
慕したひまつれよ瑞みづ御み靈たま。

今いまは憂うきめ目めも知しらぬ身みと  
仰あふぎ敬うやまへ嚴いづ御み靈たま

四

涙なみだの谷たにに雨あめ晴はれて  
長の閑どかな春はるの花はな盛さかり  
琴ことの調しらへもいいや高たかく  
世よの幸さいはひを祈いのれかし。

教をしへの道みちのいと廣ひろく  
いざいざ謳うたへ諸もろとも共に  
清きよめの神かみの御み榮さか光かえと

第九〇

一

曲津軍の軍勢に  
 勝てりと誇り驕ぶりし  
 其雄猛びは一夜の  
 夢と消え行く憐れさよ  
 神に刃向かふ仇はなし  
 勇み進めよ神の道  
 神は汝と俱にあり。

二

根底の國に墮されし  
 元津御神の嚴御靈  
 旭の如く昇りまし  
 惡魔の猛る醜國を  
 高天原の樂園と  
 開かせたまふぞ有難き。

三

恵めぐみと愛あいと御み榮さ光かえを  
嚴いづの姿すがたの美うるはしさ  
神かみは汝なんぢを待まちたまふ。

身みに翳かぎします皇すめ神かみの  
慕したひて來きたれ綾あやの里さと

四

鬼おにと大を蛇ろちの裔すゑなるや  
此この世よに住すめる諸もろ人びとは  
百ももの罪つみ科とが赦ゆるすべき  
慕したひて來きたれ綾あやの里さと。

罪つみの鎖くさりにつながれし  
五み六ろ七くの御み代よの近ちかづきて  
教をしへの庭にはは現あらはれぬ

五

豊とよ葦あし原はらの瑞みづ穂ほ國くに

住すむ人ひと々びとは悉ことごとく

嚴いづの言こと靈たま打うち揃そろへ  
清きよめの主きみの現あれましし  
其その瑞ずあし祥しやうを喜よろこびて  
謳うたへよ舞まへよ皆みな踊をどれ  
神かみは愛あいなり權ちから威からなり。

第九一

一

天あま津つ神かみ等たち國くに津つ神かみ  
蒼あを生ひとも諸もろ共ともに  
喜よろこび謳うたへ今け日ふの日ひを  
惡あく魔まに勝かちし今け日ふの日ひは  
瑞みづの御み靈たまの生うまれたる  
生いく日ひ足たる日ひぞいさぎよく  
謳うたへよ舞まへよ惟かむ神かみ  
神かみの惠めぐみを嬉うれしみて。



二

海の内外の嫌ひなく  
 此世に生きとし生ける人  
 精霊も共に求ぎ來れ  
 くだらぬ欲に争ひて  
 罪を犯せし其昔の  
 艱みを忘れ逸早く  
 誠の神の立てませる  
 珍の宮居の御教を  
 唯一言も漏らさじと  
 耳を澄まして聞けよかし  
 神は言靈權威なり。

三

吾と吾手に穿ちたる  
 暗き穴へと落ち込みて  
 惱み苦しむ人々よ  
 瑞の御靈の現はれて  
 罪の惱みの朽ち断れし  
 其勳を謳へよや

人の皮着る曲人は 一人ものこらず失せゆきて  
誠の人のみ現はるる 五六七の神代をほめよかし  
神は愛なり權威なり 汝等神と俱にあり。

四

神の御國に仇をなす 醜の惡魔に打ち勝ちて  
榮え久しき天津國 高天原の聖場に  
嚴の御靈は昇りましぬ 瑞の御靈は月の國  
御座を放ち八重雲を 伊都の千別きに千別きつつ  
綾の聖地に天降りましぬ 心を盡し身を盡し  
清めの主に頼りなば いや永久の生命をば  
現幽共に保ちつつ 花咲き匂ふ天國の  
春の御園に昇るべし 神は愛なり權威なり

汝等なれらと神かみは俱ともにます  
慕したひまつれよ瑞みづの愛あい  
恩みたまのふゆ頼ねを願ねぎまつれ。

仰あふぎ敬うやまへ嚴いづの德とく  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

(大正一二・五・三 舊三・一八 於教主殿二階 加藤明子録)

第一〇章 神嚴しんげん〔一五六〇〕

第九二

—

朝日輝く神の國　　その眞秀良場に築きたる  
神の御庭に上ります　天津使の瑞御魂  
御魂幸ひましまして　罪の重荷に苦しめる  
百の身魂をいと安く　珍の御前に導き玉へ。

二

瑞の御魂と現はれて　災多き世の中の  
艱難の道も悲しみの　山も安々過ぎ玉ふ  
此世の旅に迷ふなる　青人草を導きて  
明き神國へ進ませ玉へ。

三

天津御國の御使を  
率ゐて再び現世に  
現はれ玉ふ時とこそ  
今や全くなりけり  
嚴の御魂の御側に  
吾等が身魂を導きて  
つきぬ喜び榮光をば  
得させ玉へと願ぎ奉る  
神は愛なり權威なり  
珍の御前に伏し拜む。

第九三

一

現身の姿その儘天津國に  
上りて行かむ身こそ樂しき。

二

八雲立つ出雲小琴の音に合ひて  
神と人との息は揃へる。

三

根の國の御門は神に碎かれて  
天津大道に妨げもなし。

四

死出の山醜の川邊も何かあらむ  
恵の神の導きあれば。

第九四

一

つきひかがや  
月日輝く  
おほぞら  
大空を

やへたなぐも  
八重棚雲に  
うち  
打乗りて

のほ  
上り行きます  
みづみたま  
瑞御霊

さかえ  
栄光の主の  
みすがた  
神姿を

なが  
眺めて迎ふ  
あまつかひ  
天使

もも  
百の音楽奏で  
つ

みかど  
御門を開き  
むか  
迎へ入る

たたへ  
稱讚の歌は  
あめつち  
天地に

ひび  
響き渡るぞ  
かしこ  
畏けれ。

二

みろく  
五六七の殿は  
にきは  
賑しく

よ  
寄り来る人は  
ひと  
笑み  
さか  
榮ゆ

ことたまいくさ  
言靈軍を統べ  
たま  
玉ふ

みづ  
瑞の御魂は  
し  
死の長の

御手みてより此世このよをとり返しかへ 生命いのちの國くにを開ひらきつつ  
勝かちの祝いはひを平たひらかに いと安やすらかに謳うたひ玉たまふ。

三

元津御神もとつみかみと諸共もろともに 神かみの大道おほぢを歩あゆみなば  
生命いのちと滅亡ほろびと別わかれる道みちの 八衢やちまた街道かいだうも何なんのその  
目めにも止とまらず皇神すめかみの 榮光さかえの國くにへ上のぼるべし  
神かみは言靈ことたま權威ちからなり。

四

土つちの上うへにて朽くち果はつる 人ひとの命いのちを憐あはれみて  
榮さかえ久ひさしき天津國あまつくに 千代ちよの御園みそのに昇のぼらせて



惠みの露を垂れ玉ふ  
清めの神の御後をば  
慕ひまつれよ人の子よ  
振りさけ見れば大空に  
吾等が行くべき千代の里  
いともさやかに見え渡る。

第九五

一

千座の置戸を負ひましし  
榮光の主の瑞御魂  
その名を聞くも潔し  
青人草を生かさむと  
八束の鬣を抜きとられ  
手足の爪を除かれて  
血潮に染り身に罪を  
負はせ玉ひて世の人を  
清むる神業を詳細に  
遂げさせ玉ふ尊さよ。

二

嚴いづの御魂みたまの大神おほがみの

右みぎに居ゐまして永久とこしへの

珍うづの住居すまゐを構かまへつつ

吾等われらを守まもる瑞御魂みづみたま

深ふかき恵めぐみを嬉うれしみて

賞ほめよ稱たたへよ御榮光みさかえを

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや。

三

瑞みづの御魂みたまの御恵おんめぐみ

清きよき稜威みいづは世よに廣ひろく

現あらはれましていと高たかく

妙たへに尊たふとき大神業おほみわざ

天津使あまつつかひと相共あひともに

世人よびとこそ舉こぞりて主きみの名なの

輝かがやき榮さかゆる有様ありさまを

賞ほめよ稱たたへよ眞心まごころに。

第九六

一

三五あななひの神かみの教をしへの司つかさたち等  
瑞みづの御魂みたまの徳とくを仰あふげよ。

二

天津あまつ日の神かみの御裔みすゑとあれませる  
珍うづの御子みこをば敬うやまひ奉まつれ。

三

許々ここ多た久くのの罪つみやや穢けがれをを身みにに負おひひて  
世よ人びと清きよめめしし主きみをを崇あがめめよ。

四

皇すめ神かみのの惠めぐみみとと主きみのの惱なやみみととを  
思おもひひ出いだししてて神かみをを稱たたへへよ。

五

千ち萬よろづのの國くにのの益ます人ひと御おん前まへに  
平ひ伏れしし御み稜いづ威を畏かしこみみ崇あがめめよ。

六

永久とこしへの嚴いづの御歌みうたに聲合こゑあはせ  
萬司よろづつかさの主きみを崇あがめよ。

第九七

一

世よを洗あらふ嚴いづの御魂みたまや瑞御魂みづみたま  
その聖顔かんばせは伊照いてり輝かがやく。

二

天地あめつちに類たぐひもあらぬ清きよめ主ぬし

天津使も擧りて仕ふ。

三

世の人を憐み玉ひ千座をば  
負ひて落ち行く主ぞ尊き。

四

根の國に落ち行く身魂憐みて  
天津神國に生かす君はも。

五

限りなき恵みを受けし人の身は  
心の限り仕へまつれよ。

## 第九八

一

世の人を恤り玉ふ瑞御魂  
響き渡りぬ世の民よ  
栄光の冠を獻れ。

嚴の御魂の吾主に  
御聲は妙に天地に

二

天津使も打伏して  
あこがれ拜む尊さよ  
栄光の冠を捧げよや。  
嚴の御魂の御光を  
いざ諸人よ清めの主に

三

矢叫びの聲鬨の聲  
庭は神國となり變る  
天と地とに響きけり  
寶の冠を獻れ  
殘る隈なく御榮光の  
嚴の御魂や瑞御魂  
栄光の冠獻れ。  
俄に止みて戦ひの  
祈りと歌との言靈は  
四方の民草平和の主に  
御空の極み地のはて  
珍の光は照り渡る  
此世を知らず神柱に



第九九

一

總すべての司つかさとあれませる

清きよめの主きみの瑞みづ御み魂たま

賞ほめつ稱たたへつ神かみの聲こゑ

世よびととの聲こゑは海うみ山やまに

限くまなく響ひびき渡わたりけり

嚴いづの御み魂たまよ瑞みづ御み魂たま

諾うべなひ玉たまへ惟かむ神ながら。

二

榮さかえの主きみよ嚴いづ御み魂たま

瑞みづの御み魂たまよ神かみの世よを

彌いやととこしへへにしろしめし

神かみの稜み威いづの御み光かりを

治あまくね天てん地ちに輝かがかし

凡すべてをい生いかし玉たまへかし

珍うづの御前みまへに願ねぎ奉まつる  
守まもらせ玉たまへ惟かむながら神かむながら。

嚴いづの御魂みたまや瑞みづ御魂みたま

三

清きよめの主きみよ來きたりませ

珍うづの御聲みこゑを嬉うれしみて

吾等われらが身魂みたまを清きよめつつ

命いのちの糧かてと仕つかへなむ

假令たとへてんち天地ちは失うするとも

吾等われらは主きみの御惠みめぐみを

彌いやとこしへ永久こしへに喜よろこびて

黄こがね金の琴ことをかき鳴ならし

稜威みいづを仰あふぎ奉まつるべし

嚴いづの御魂みたまや瑞みづ御魂みたま

來きたらせ玉たまへ惟かむながら神かむながら。

第一〇〇

一

烏羽玉うばたまの暗くらき闇やみ夜よは消きえ去さりて  
東あづまの空そらに茜あかねさすなり。

二

美うるはしき主きみの御影みかげを伏ふし拜をがみ  
光ひかりの主きみと仕つかへまつらむ。

三

神國かみくにの光ひかりといいます嚴御魂いづみたま  
瑞みづの御魂みたまの御稜み威いづ畏かしこし。

四

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の恵<sup>めぐ</sup>みの露<sup>つゆ</sup>に生<sup>お</sup>ふる民<sup>たみ</sup>の  
歡<sup>よろこ</sup>喜<sup>び</sup>榮<sup>さ</sup>光<sup>かえ</sup>何<sup>なに</sup>に譬<sup>たと</sup>へむ。

五

大<sup>おほ</sup>空<sup>ぞら</sup>の星<sup>ほし</sup>にも勝<sup>まさ</sup>る民<sup>たみ</sup>の數<sup>かず</sup>  
恵<sup>めぐ</sup>ませ玉<sup>たま</sup>ふ神<sup>かみ</sup>ぞ畏<sup>かしこ</sup>き。

第一〇一

一

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の名<sup>な</sup>に優<sup>まさ</sup>る  
清<sup>きよ</sup>きは他<sup>ほか</sup>にあらじとぞ思<sup>おも</sup>ふ。

二

いと貴<sup>たか</sup>き神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>にしましませど  
世<sup>よ</sup>を洗<sup>あら</sup>ふため降<sup>くだ</sup>りましぬる。

三

八<sup>やち</sup>千<sup>くら</sup>座<sup>うへ</sup>の上<sup>うへ</sup>に掲<sup>かか</sup>げし珍<sup>うづ</sup>の名<sup>な</sup>を  
萬<sup>よろづ</sup>國<sup>くに</sup>民<sup>たみ</sup>今<sup>いま</sup>や仰<sup>あふ</sup>がむ。

四

皇神すめかみの右みぎにぞ坐まして神かみの世よと  
現世うつしよしらす君きみぞ畏かしこし。

（大正一二・五・三 舊三・一八 北村隆光録）

第三篇 白梅しらつめの花はな

第一章 神浪しんらう〔一五六一〕

第一〇二

一

天津御空は捲き去られ  
 大地は沈み崩るとも  
 堅磐常磐に高知らす  
 伊都の御靈は唯ひとり  
 變らせたまふことぞなし  
 仰ぎ敬へ神の稜威。

二

只一息の言靈に  
 冠島沓島の荒風や  
 伊たけり狂ふ高浪を  
 鎮めて珍の神島へ  
 安く穩ひに渡りたる  
 美都の御魂の神力は  
 今猶ほ變らせ玉ふなし  
 仰ぎ敬へ神の稜威。

三

そむける教をしへの司つかさ等らも  
まどへる信人まめひとを導みちびきて  
深ふかき恵めぐみは永とこ遠しへに  
流ながれて盡つきぬ由良ゆらの川かは  
來きたりてすすげ汚けがれし魂たまを。  
憐あはれみ捨すてずいつくしみ  
助たすけたまへる神柱かむばしら

四

罪つみとけがれに沈しづみたる  
あまたの人の子こことごとく  
愛めぐしき吾子わがこと生おふしたて  
育はぐくみたまふ瑞御魂みづみたま  
仁じん慈じ無む限げんの御心みこころは  
千代ちよに八千代やちよに變かはりなし  
慕したひまつれよ神かみの稜威いづ。  
千代ちよに八千代やちよに變かはりなし



一

みづみづし教をしへの主きみの御姿みすがたは  
空照そらてり渡わたる月つきのかんばせ。

二

春はるの朝露あさつゆにほころぶ白梅しらつめの  
花はなにもまして美うつくしき貴美きみ。

三

秋あきの夜よの御空みそらに澄すめる月つきかげも  
貴美きみの姿すがたに見み惚とれたまはむ。

四

清<sup>すが</sup>々<sup>すが</sup>しく夏<sup>なつ</sup>の夕<sup>ゆふ</sup>べの風<sup>かぜ</sup>よりも  
冬<sup>ふゆ</sup>の雪<sup>ゆき</sup>にも勝<sup>すぐ</sup>れたる貴<sup>き</sup>美<sup>み</sup>。

五

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>神<sup>かみ</sup>の榮<sup>さか</sup>光<sup>かえ</sup>を身<sup>み</sup>に浴<sup>あ</sup>びて  
吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>のため<sup>に</sup>天<sup>あ</sup>降<sup>も</sup>り玉<sup>たま</sup>ひぬ。

第一〇四

一

神かみの御み榮さ光かえ御み功い績さをは  
高たかく廣ひろけく限かぎりなし  
黄こがね金の琴ことをかきならし  
天津あまつつかひ御み使つかひと相あひ共ともに  
うたひ調しひへを競きそはまし。

二

天あめ地つち百ももの罪つみ人びとを  
生いかせたまひし瑞みづ御み靈たま  
千ち座くらの置おき戸とのいさをしを  
八やく雲もの小を琴ごとをかき鳴なして  
天あまつつかひ津つかひ使あひと相とも共ともに  
心こころの限かぎりうたはまし。

三

まことに充みちて御み惠めぐみの  
溢あふるる貴き美みを言ことの葉はの  
かぎりを盡つくし御みさかえを  
天津あまつつかひ使つかひと相あひ共ともに

小琴をごとに合あはせてうたはまし。

四

清きよめの主きみによるこびて  
限かぎりも知しらぬ幸さちはひを  
八やくも雲もの小琴をごとに合あはせつつ

見まみゆる日ひこそ近ちかづきぬ  
授さづけたまへる嬉うれしさを。  
調しらへも清きよくうたはまし。

第一〇五

一

日ひかげも清きよく大空おほぞらは

いや廣ひろらかに澄すみわたり

霜しもを送おくりし木こ枯からやみて  
草木くさきは若わか芽かめを吹ふき出いだし  
花はないろいろに咲さき匂にほふ  
勇いさみよるこべ五み六ろ七くの神かみは  
綾あやの高たか天あまに現あれましぬ。

二

叢むらくも雲もおこりて大おほ空そらふさぎ  
雷いかづち轟とどろき稻いな妻づまの  
東ひがしの空そらより西にしのはて  
ひらめき走はしり降ふる雨あめは  
いかに激はげしくありとて  
五み六ろ七くの神かみの現あれし上うへは  
恐おそれもなやみもあらざらむ  
いさみ歡よろこべ諸もろ人びとよ。

三

高たかき尊たふときいと美うるはしき  
みいづを纏まとひてめぐみの衣ころも

身みにつけ乍ながら降くだりたまふ  
いさみて仰あふげ神代かみよは近ちかし。

五み六ろ七くの神かみの御み榮さ光かえを

四

誠まことの貴き美みはあらがねの  
古ふるりにし惡あくは根絶こんぜつし  
栗あは如なす司つかさとく來きたれ

神かみは日ひに夜よに待まち玉たまふ。  
聖きよきよろこび茂しげるらむ  
地つちに降くだりて世よを守まもる

第一〇六

一

木枯すさび 萬木枯るる  
悪魔の如き 冬去りゆきて  
希望に充てる 春日は來たる  
森羅萬象 擧りて勇め  
瑞の御靈ぞ 現はれたまふ。

二

悲しきこの世の 旅人たちよ  
勇みよるこべ 清めの主は  
月の御神の 榮光に充ちて  
綾の高天に 現はれましぬ  
神の本宮の 聖エルサレム  
淤能碁呂島の 眞秀良場に。

三

神かみの御國みくにの  
御許みもとを放はなれ

四方よもにさすらふ  
珍うづの民草たみぐさよ

再降臨さいかうりんを

迎むかふる時ときこそ  
近ちかづき來きたりぬ

よろこび勇いさめ  
神かみの御民みたみよ。

四

五み六ろ七くの神代かみよは  
早近はやちかづきて

この世よは日ひに夜よに  
あらたまり行ゆく

その瑞祥すゐしやうを  
あがめまつりて

歌うたへよ舞まへよ  
四方よもの人の子こ。



第一〇七

一

瑞<sup>みづ</sup>の御魂<sup>みたま</sup>の更生<sup>すくひぬし</sup>主  
東<sup>あづま</sup>の空<sup>そら</sup>に現<sup>あら</sup>はれて  
鹽<sup>しほ</sup>の八百路<sup>やほぢ</sup>の浪<sup>なみ</sup>を超<sup>こ</sup>え  
舟<sup>くも</sup>に乘<sup>の</sup>りつつ神司<sup>かむつかさ</sup>  
あまた引<sup>ひ</sup>連<sup>つ</sup>れエルサレム  
神<sup>かみ</sup>の都<sup>みやこ</sup>城<sup>こ</sup>にしづしづと  
降<sup>くだ</sup>り玉<sup>たま</sup>はむ時<sup>とき</sup>は來<sup>き</sup>ぬ  
萬<sup>よろづ</sup>の國<sup>くに</sup>の人<sup>ひと</sup>草<sup>くさ</sup>は  
貴<sup>き</sup>美<sup>み</sup>の御榮<sup>みさかえ</sup>光<sup>みめぐ</sup>御惠<sup>めぐ</sup>みの  
露<sup>つゆ</sup>にうるほひ勇<sup>いさ</sup>みたち  
天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>も動<sup>ゆる</sup>ぐ言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の  
水<sup>い</sup>火<sup>き</sup>を合<sup>あ</sup>せて伏<sup>ふ</sup>し拜<sup>をが</sup>む  
其<sup>その</sup>光<sup>くわう</sup>景<sup>けい</sup>の眼<sup>がん</sup>前<sup>ぜん</sup>に  
現<sup>あら</sup>はれ來<sup>きた</sup>るぞ樂<sup>たの</sup>しけれ。

二

まこと一つの瑞御魂　メシヤの神は舟にのり  
神の都のエルサレム　再び御姿あらはして  
今まで神の大道を　嘲り破り御使を  
傷つけ殺しし曲人を　審判たまへば罪人は  
恐れをののき平伏して　嘆き悲しむ時は來ぬ  
あゝ諸人よ諸人よ　一日も早く眼を覺せ  
五六七の御代は近づけり。

三

この世を洗ふミカエルの　面は月日と輝きぬ  
千座のおき戸を負はせつつひ　囚獄の中に苦しみし  
貴美の恵は幸はひて　日出づる神代と成りにけり  
よろこび祝へ人の子よ。

四

天<sup>あめ</sup>と地<sup>つち</sup>とは新<sup>あた</sup>しく  
生<sup>う</sup>まれ來<sup>きた</sup>りし心<sup>こ</sup>地<sup>こち</sup>せり  
廣<sup>ひろ</sup>きこの世<sup>よ</sup>をしるしめす  
メシヤの御<sup>み</sup>座<sup>くら</sup>は定<sup>さだ</sup>まりぬ  
ハレルヤ ハレルヤ神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>。

第一〇八

一

心<sup>こころ</sup>きよめて仰<sup>あふ</sup>いで待<sup>ま</sup>てよ  
東<sup>あづま</sup>の空<sup>そら</sup>を輝<sup>かがや</sup>かし  
榮<sup>さかえ</sup>光<sup>え</sup>に充<sup>み</sup>てる舟<sup>くも</sup>にのり  
やがて輝<sup>かがや</sup>く日<sup>ひ</sup>の下<sup>もと</sup>に  
あまたの御<sup>み</sup>使<sup>つかひ</sup>を伴<sup>ともな</sup>ひまして  
仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>の露<sup>つゆ</sup>にうるほひ光<sup>ひか</sup>る

眼まなこを照てらし降くだりまさむ  
夢ゆめ々ゆめうたがふこと無なかるべし  
東しのめ雲そらあかねの空そら茜あかねさして  
やがて日ひの出では近ちかづき來きたらむ。

二

この世よを照てらす皇すめ神かみは  
嚴いづの御み燈ひかり明あぶら油なり  
清きよめのために瑞みづ御み魂たま  
弘ぐぜい誓いの舟ふねに身みを任まかせ  
神かみに親したしむ氏うぢの子こを  
慰なぐさめ安やすんじみちからを  
あたへむために來きたるべし  
勇いさみよろこびまごころを  
こめて貴き美みをば迎むかへまつれ。

三

光ひかりと權ちから威ちからに充みたせる主きみよ  
大だい地いちを包つつみし黒くろ雲くもを拂はらひ

まちこがれたる誠まことの民たみを  
忍しのびたまひし其その有難ありがたさ  
清きよき神み民たみを初はじめとなして  
神かみの御國みくにに生いかせ玉たまはむ  
御靈みたま幸まへ坐ましませよ。

救すくはむために三みちとせ千年あひだの間  
しひたげられし大日おほひの下もとの  
萬よろづの國くにの民草たみぐさらをば  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

第一〇九

一

この世よの終末をはりはちかづきぬ  
八重やへたな雲ぐもをかきわけて  
ヨルダン河がはの上流みなかみに

千座ちくらを負おひて生あれましぬ  
東あづまの空そらのエルサレム  
瑞みづの御魂みたまのミカエルは

浮世の泥に染みながら  
普く世人にあざけられ  
笑みを湛へて言霊の  
再び舟に打ちのりて  
黄金の棹をさしながら  
都をさして降ります  
萬の國人勇ましく  
清めの主の再臨を  
諸のなやみを身にうけて  
いばらの冠を被せられ  
大道を開き玉ひつつ  
天と地との中空を  
大日の本のエルサレム  
時こそ近づき來りけり  
音楽かなで花かざし  
仰ぎよろこび迎へかし。

二

伊都の御魂の御をしへを  
清めの御手に取りすがり  
まことの道によみがへり  
信ひまつり美都御魂  
御言のまにまに謹みて  
天津御國にのぼりゆき

上なき喜悅きえつに充ちあふれ  
つかふる身魂みたまとなれよかし

天津御神あまつみかみのおんもとに

三

罪つみにけがれし人の眼ひとめは 仁慈じんじの神かみの御顔おんかほも  
いかりのおもてとながむべし 神かみは愛あいなり仁じんなれば  
かならず人ひとを捨てまさじ 一日ひとひも早く罪つみを悔くい  
神かみの御前みまへにひれ伏ふして その日ひの來きたるを待まてよかし。

四

この世よの終をはりとなりにけり 仁慈じんじの神かみは瑞御魂みづみたま  
清きよめの主ぬしとさだめまし 榮光さかえの舟くもにのらせつつ

日ひの下もとくに國くにへ現あれまさむ  
さばきの御みこゑ聲こゑのいと高たかく  
研みがき清きよめてそなへせよ。

聖きよき月つき日は迫せまりきぬ  
聞きこゆるまでにたましひを

第一一〇

一

つみ人びとをさばかせたまふ時ときは來きぬ  
悔くいあらためよ魂たまをきよめて。

二



わが名なをば洩もらし玉たまはず神かみの書ふみに  
しるさせ玉たまへ伊都いづの大神おほかみ。

二

うたがひや恐おそれの雲くもを吹ふきはらひ  
みちびき玉たまへ神かみのます國くにへ。

四

えらまれし人ひとをあつむる笛ふえの音ねの  
耳みみに入るいるまでみがかせたまへ。

第一一

一

更生主すくひぬし降くだらせ玉たまふ日ひは近ちかし

心こころの燈火あかりとりて迎むかへむ。

二

皇神すめかみの清きよきしもべの譽ほまれをば

受うけさせ玉たまへわれを導みちびきて。

三

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>の空<sup>そら</sup>の清<sup>きよ</sup>くして  
神<sup>かみ</sup>の柱<sup>はしら</sup>となるぞ尊<sup>たふと</sup>き

四

思<sup>おも</sup>はざる時<sup>とき</sup>に思<sup>おも</sup>はず降<sup>くだ</sup>ります  
神<sup>かみ</sup>の榮<sup>さか</sup>光<sup>かえ</sup>に入<sup>い</sup>る人<sup>ひと</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>き。

（大正一二・五・三 舊三・一八 出口鮮月録）

第一二章 神<sup>しん</sup>德<sup>とく</sup>（一五六二）

第一一二

一

うつし世よに爲なせる業わざをら神かみの前まへに  
さらけ出ださるる時ときは來きにけり。

二

むら肝きもの心こころのそこに潛ひそみたる  
鬼おにも大蛇おろちも今いまや怖おぢつつ。

三

よしあしも洩れなくさばく伊都御魂  
世に現はれぬ謹み悔いよ。

四

人の身はいつ死るとも白露の  
果敢なきものぞ神に頼れよ。

第一一三

一

聖靈よ吾身に宿らせたまひつつ

妙<sup>たへ</sup>なるちからわかち玉<sup>たま</sup>はれ。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>みの</sup>教<sup>のり</sup>の書<sup>ふみ</sup>をおろかなる  
われにも正<sup>ただ</sup>しく悟<sup>さと</sup>らせ玉<sup>たま</sup>へ。

三

い<sup>ひ</sup>や廣<sup>ひろ</sup>きめぐみの翼<sup>つばさ</sup>伸<sup>の</sup>べ玉<sup>たま</sup>ひ  
曇<sup>くも</sup>りし魂<sup>たま</sup>を守<sup>も</sup>る伊<sup>い</sup>都<sup>づ</sup>の神<sup>かみ</sup>。

四

諸々の罪に曇りしたましひを  
照させたまへ伊都の光に。

五

いや深き愛のながれの水底を  
はからせ玉へ伊都の光に。

六

古のモーゼ エリヤにハリストス  
ヨハネの魂のみつの御柱。

七

御<sup>み</sup>めぐみの光<sup>ひかり</sup>は豊<sup>ゆた</sup>にみつ御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>  
暗<sup>やみ</sup>を照<sup>てら</sup>して現<sup>あ</sup>れましにけり。

第一一四

一

曇<sup>くも</sup>り切<sup>き</sup>りたる御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>を照<sup>てら</sup>し  
汲<sup>く</sup>みて嬉<sup>うれ</sup>しく思<sup>おも</sup>はず知<sup>し</sup>らず  
いさみ歡<sup>よろこ</sup>び溢<sup>あふ</sup>るるいづみ  
たたへの御<sup>み</sup>歌<sup>うた</sup>うたふ大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>。

二

悲<sup>かな</sup>しき辛<sup>つら</sup>き思<sup>おも</sup>ひに沈<sup>しづ</sup>む

果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき身<sup>み</sup>にも光<sup>ひかり</sup>をあたへ



守りたまへば思はず知らず

よろこび歌ふ貴美の大前。

三

玉の殿にも伏屋の軒も  
のぞみ坐すこそいと尊けれ  
罪もけがれも伊吹にはらひ

仁慈の神は照りかがやきて

清き祈りを諾ひまして  
千代の宮居と住まはせ玉へ。

四

皇神と俱にありせば陸奥の  
荒野の末もなにか恐れむ。

五

鳥とりさへも通かよはぬ深ふかき山やま奥おくも  
神かみとありせば天津あまつ御國みくにぞ。

六

朝あさ夕ゆふにあふるる惠めぐみを身みにうけて  
露つゆの生いの命のちの玉たまはかがやく。

第一一五

一

瑞みづ御魂みたま吾魂わがたまに降くだりまして

神かみの御姿みすがたおがませ玉たまへ。

二

ねぎごとを御心平みこころたひらにやすらかに  
聞きこしたまひて守まもりませ岐美きみ。

三

岐美きみといへどこの世よを治をさむる君きみならず  
魂たまを治をさむる清きよめの神かみぞや。

四

瑞御魂みづみたま「きみ」とふ名なをば楯たてにとり  
醜しこのたぶれの迫せまり來くるかも。

五

現世うつしよの君きみより外ほかにきみなしと  
おもふ人ひとこそ愚おろかなりけり。

六

伊邪那岐いざなぎの岐きの字じと竝ならび伊邪那美いざなみの  
美みの字じ合あはせて岐き美みとこそなれ。

七

神かみと云いひ岐き美みと稱となふも一ひとつなり  
夢ゆめあやまつな神かみの御み子こたち。

八

聖せい靈れいよけがれし身みをもめぐまひて  
宮みや居ゐとなして宿やどらせたまへ。

九

叢むらくも雲を伊い吹ぶき拂はらひて天あま津つ日ひの  
魂たまの光ひかりを照てらしませ岐き美み。

春風はるかぜの薰かをりて諸もの花開はなひらく

長閑のどかな御代みよとなさしめ玉たまへ。

第一一六

一

暗夜やみよを照てらす嚴御魂いづみたま

世人よびとを守まもる瑞御魂みづみたま

定めなき世よのたづきをもち知らず浮世うきよの旅たびをなす

人を導みちびき天津日あまつひの神國みくにに來こよと宣のり給たまふ

珍うづの御聲みこゑを具まづさにかけさせ玉たまへと願ねぎまつる。

二

光<sup>ひかり</sup>つきせせぬ<sup>いづみたま</sup>嚴<sup>いづみたま</sup>御<sup>いづみたま</sup>魂<sup>いづみたま</sup>  
 榮<sup>さかえ</sup>光<sup>のぞみ</sup>と希望<sup>のぞみ</sup>の消<sup>き</sup>え失<sup>う</sup>せし  
 常<sup>とこよ</sup>世<sup>の</sup>暗<sup>やみ</sup>に踏<sup>ふ</sup>み迷<sup>まよ</sup>ひ  
 恐<sup>おそ</sup>れ戦<sup>をの</sup>きする民<sup>たみ</sup>を  
 惠<sup>めぐみ</sup>の御<sup>み</sup>手<sup>て</sup>をさしのべて  
 天<sup>あまつ</sup>津<sup>みそら</sup>御<sup>かみくに</sup>空<sup>の</sup>の神<sup>かみくに</sup>國<sup>に</sup>に  
 登<sup>のぼ</sup>り來<sup>きた</sup>れと宣<sup>の</sup>り玉<sup>たま</sup>ふ  
 珍<sup>うづつ</sup>の御<sup>みこゑ</sup>聲<sup>を</sup>を安<sup>やす</sup>らかに  
 聞<sup>き</sup>かしめ玉<sup>たま</sup>へと宣<sup>の</sup>り奉<sup>まつ</sup>る。

三

千<sup>ち</sup>座<sup>くら</sup>の置<sup>おき</sup>戸<sup>ど</sup>のあななひに  
 只<sup>ひたすら</sup>管<sup>たよ</sup>頼<sup>たよ</sup>り世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>の  
 百<sup>もも</sup>の務<sup>つと</sup>めを相<sup>あひ</sup>果<sup>は</sup>たし  
 天<sup>あまつ</sup>津<sup>みそら</sup>御<sup>ふるさと</sup>空<sup>の</sup>の故<sup>ふるさと</sup>郷<sup>へ</sup>へ  
 勇<sup>いさ</sup>みて上<sup>のぼ</sup>る佳<sup>よ</sup>き日<sup>ひ</sup>をば  
 喜<sup>よろこ</sup>び勇<sup>いさ</sup>み松<sup>まつ</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>  
 早<sup>はや</sup>く來<sup>きた</sup>れと玉<sup>たま</sup>の聲<sup>こゑ</sup>  
 命<sup>いのち</sup>の頼<sup>たよ</sup>りを願<sup>ね</sup>ぎ奉<sup>まつ</sup>る  
 あゝ惟<sup>かむながら</sup>神<sup>かむながら</sup>々々  
 御<sup>みたま</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>は</sup>ひましませよ。

第一一七

一

浮雲うきくものかかる心こころを打うち開ひらき  
日ひの出での國くにに上のぼらせ玉たまへ。

二

罪つみ穢けがれ清きよめて生いかす瑞御魂みづみたま  
常世とこよの春はるに導みちびき玉たまへ。

三



皇神すめかみの稜威いづの光ひかりに疑うたがひの  
暗くらき雲霧くもぎりはれ渡わたり行ゆく。

四

限かぎりなき又また新あたらしき命いのちをば  
賜たまふ主きみこそ珍うづの母ははなる。

五

皇神すめかみの魂たまの光ひかりを身みに受うけて  
愛あいの御園みそのに進すすむ嬉うれしさ。

第一一八

一

吾<sup>わが</sup>祈<sup>いの</sup>る誠<sup>まこと</sup>を愛<sup>め</sup>でて惟<sup>かむながら</sup>神<sup>かみ</sup>  
奇<sup>く</sup>しき力<sup>ちから</sup>を授<sup>さづ</sup>け玉<sup>たま</sup>へよ。

二

暗<sup>やみ</sup>の夜<sup>よ</sup>を稜<sup>い</sup>威<sup>づ</sup>の光<sup>ひかり</sup>に照<sup>てら</sup>しつつ  
命<sup>いのち</sup>の道<sup>みち</sup>に進<sup>すす</sup>ませ玉<sup>たま</sup>へ。

三

嚴いづみ御み魂たま燃もゆる焰ほのほに現うつ身のそみ  
穢けがれを焼やきて吾あを清きよめませ。

四

科し戸な邊どの風かぜの響ひびきに四よ方もの國くに  
神かみの訪おとつれ宣のべ傳つたへませ。

五

八や咫た烏から愛すの翼つばさに吾わが魂たまを  
乗のせて神みくに國にへつれ行ゆけよかし。

六

聖せい靈れいよ 吾わが言こと靈たまを 諾うべなひて  
神かみの 柱はしらと 使つかは せ 玉たまへ。

第 一 一 九

一

照てり 渡わたる 清きよき 御み魂たまの 御み光かりに  
照てし 玉たまは れ 暗くらき 心こころを。

二

百ももの 罪つみに 曇くもる 心こころを 研みがき 上あげ

妙<sup>たへ</sup>なる力<sup>ちから</sup>を下<sup>くだ</sup>し玉<sup>たま</sup>はれ。

三

天<sup>あま</sup>津<sup>つく</sup>國<sup>くに</sup>の永<sup>と</sup>遠<sup>は</sup>の歡<sup>よろこ</sup>喜<sup>び</sup>此<sup>この</sup>身<sup>み</sup>にも  
充<sup>み</sup>たし玉<sup>たま</sup>はれ神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>使<sup>つかひ</sup>。

四

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>に住<sup>す</sup>みて天<sup>あま</sup>使<sup>つかひ</sup>  
治<sup>をさ</sup>め玉<sup>たま</sup>へよ吾<sup>わが</sup>魂<sup>たましひ</sup>を。

第一二〇

一

鳩はとの如ごと天あ降もりましたるる天あま使つかひ  
吾わが魂たましひを慰なぐさめ玉たまへ。

二

村むら肝ぎもの心こころの思おもひ爲なす業わざも  
いと清きよかれと守まもらせ玉たまへ。

三

明あきけき神かみの道みちを歩あゆむべく  
嚴いづの光ひかりを吾われに與あたへよ。

四

皇神すめかみの御前みまへを去さらず謹つつしみて  
心こころの限かぎり仕つかへしめ玉たまへ。

五

永久とこしへの命いのちの主きみに從したがひて  
天津御國あまつみくにへ進すすむ嬉うれしさ。

六

吾身わがみ魂たま清きよめて神かみの御舍みあらかに  
進すすませ玉たまへ導みちびき玉たまへ。

第一二一

一

冷渡る吾身に愛の焰をば  
燃やし玉へよ嚴の大神。

二

さまよひて果敢なき影を追ひ慕ひ  
露だに知らぬ身こそ悲しき。

三



ちから  
力なき吾等の祈祷も稱へ言も  
いと安らかに聞し食す主。

四

やちくら  
八千座を負ひし主をば思はずに  
ゆめつつ  
夢現にて暮す愚さ。

五

みづみたまめぐ  
瑞御魂恵みの聖火を下しつつ  
つめ  
冷たき心を温め玉ふ。

(大正一二・五・五 舊三・二〇 北村隆光録)

第一三章 神雨〔一五六三〕

第一二二

一

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>みの雨<sup>あめ</sup>しげく降<sup>ふ</sup>る神<sup>かみ</sup>の園<sup>その</sup>に  
千<sup>ち</sup>花<sup>ば</sup>百<sup>も</sup>花<sup>も</sup>咲<sup>はな</sup>き薰<sup>か</sup>るなり。

二

木<sup>こ</sup>枯<sup>がらし</sup>の吹<sup>ふ</sup>き荒<sup>す</sup>ぶなる此<sup>この</sup>身<sup>み</sup>にも  
花<sup>はな</sup>を咲<sup>さ</sup>かせよ恵<sup>めぐ</sup>みの雨<sup>あめ</sup>に。

三

春<sup>はる</sup>雨<sup>さめ</sup>のいと長<sup>のど</sup>閑<sup>か</sup>なる姿<sup>すがた</sup>より  
まさりて樂<sup>たの</sup>し恵<sup>めぐ</sup>みの雨<sup>あめ</sup>は。

四

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>清<sup>きよ</sup>き誓<sup>ちか</sup>ひに頼<sup>たよ</sup>りつつ  
常<sup>とこ</sup>世<sup>よ</sup>の春<sup>はる</sup>を仰<sup>あふ</sup>ぎ待<sup>ま</sup>たなむ。

第一二三

一

古いにしへの神代かみよの如ごとく嚴御魂いづみたま  
長閑のどかなる世よと惠めぐませ玉たまへ。

二

瑞御魂みづみたま吾身わがみに充みちて古いにしへの  
神代かみよの人ひととならしめ玉たまへ。

三

瑞御魂降り玉ひて萎れたる  
心の花を露し玉へ。

四

瑞御魂弱き吾身に降りまし  
珍の力に富ましめ玉へ。

五

瑞御魂汚れし魂を清めつつ  
清めの道に入らしめ玉へ。

第一二四

一

嚴いづみ御み魂たま與あたへ玉たまへる惠めぐみこそ  
生命いのちを守るまも寶たからなりけり。

二

苦くるしみの深ふかき谷たに間まに落おちしとき  
生命いのちの網つなとなるぞ此この神ふ書み。

三

死しの影かげの暗路やみぢに迷まよふ時ときこそは  
明燈あかりとならむ此これの神書みふみは。

四

天津日あまつひの光ひかりを仰あふぎまつる迄まで  
導みちびき玉たまへ嚴いづの大神おほかみ。

第一二五

一

嚴いづの神書みふみ瑞みづの言葉ことばは此この上うへも

なき生命の御綱とこそ知れ。

二

暗路往く道の燈火渴きたる  
喉を霑す水の流れよ。

三

御教は嚴の生命の糧なるぞ  
いざ諸人よ來り緡け。

四



日の守り夜の守りと月と日の  
あれます限り何か恐れむ。

五

かくれたる神勅の奥を悟るべく  
誠の智慧をわかたせ玉へ。

第一二六

一

大空の廣きは神の御榮光を

完全うまらに詳細つばらに示しめすなりけり。

二

限かぎりなく空そらに輝かがやく星影ほしかげは  
神かみの宣みのり勅あを現あらはしにけり。

三

天あま傳つたふ月つき日ひの光ひかりキラキラと  
神かみの力ちからを聲こゑなく語かたる。

四

御教みをしへの書見ふみる度たびに思おもふかな  
神かみの御審判みさばきおこそ厳かなるを。

五

瑞御魂みづみたま宣のらす言靈ことたま神書ふみ見みれば  
深ふかき恵めぐみの露つゆぞ滴したたる。

六

村肝むらきもの心こころも暗くらき世よの旅たびに  
迷まよふ世よびと人を照てらす神かみはも。

七

御光みひかりを日に夜よに受うくる嬉うれしさは  
教をしへの神書みふみの賜物たまものとぞ知しる。

第一二七

一

永遠とほの生命いのちを賜たまふたる 神かみの言葉ことばはいと清きよし  
瑞みづの御魂みたまの言葉ことばは 底そこひも知らぬ奇くしびさよ  
目めに見みぬ神かみの御心みこころを 具つぐさに諭さとし神姿みすがたを  
いと明あきかに現あらはせり 嚴いづの言葉ことばは生命いのちなり  
瑞みづの言葉ことばは薬くすりなり 奇くしびなる哉かな神かみの經綸のり。

二

嚴いづの御魂みたまの御教おんをしへ  
瑞みづの御魂みたまの言ことの葉はは

いと慕したはしき珍うづの聲こゑ  
普あまねく四方よもに轟とどろきて

迷まよひ惱なやめる罪人つみびとを  
天津御國あまつみくにに救すくひます

崇あがめよ稱たたへよ神かみの德とく  
慕したひまつれよ神かみの愛あい。

三

五み六ろ七くの御代みよの近ちかづく  
宣のらせ玉たまひし訪おとづれの

たえず聞きこゆる嬉うれしさよ  
赦罪ゆるしと歡喜よろこび榮光さかえをば

授さづくる神かみの御惠おんめぐみ  
光ひかりとなりて現身うつそみの

世界せかいに清きよく現あらはれぬ  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々

感謝かんしゃし仕つかへ奉たてまつれ。

第一二八

一

賤<sup>しづ</sup>田<sup>たま</sup>卷<sup>まき</sup>數<sup>かず</sup>ある神<sup>み</sup>書<sup>ふみ</sup>の其<sup>その</sup>中<sup>なか</sup>に  
誠<sup>まこと</sup>の書<sup>ふみ</sup>は嚴<sup>いづ</sup>の神<sup>かみ</sup>書<sup>ふみ</sup>。

二

奥<sup>おく</sup>山<sup>やま</sup>の暗<sup>くら</sup>き谷<sup>たに</sup>間<sup>ま</sup>を潛<sup>くぐ</sup>るとも  
神<sup>かみ</sup>の惠<sup>めぐ</sup>みは行<sup>ゆ</sup>く手<sup>て</sup>を照<sup>てら</sup>す。

三

世よの中なかの物もの識しり人の踏ふみしてふ  
道みちを諭さとすはこれの神書かみふみ。

四

幾度いくたびも繰返くりかへしつつ眺ながむれど  
神書かみふみの旨むねをはかり兼ねつつ。

五

如何いかにして神書かみふみの旨むねを悟さとるべき  
智慧ちゑも力ちからもなき身みなりせば。

六

惟かむ神道なみちの誠まことの尊たふとさは

踏ふみてののち後にさと悟りこそすれ。

七

許こ々こ多た久くの書ふみの心こころは悟さとるとも

神かみの神書みふみは悟さとりがたかり。

八

皇神すめかみに祈いのらざりせば百千度もちたび

讀よむも悟さとらじ神かみの心こころは。

九



愚おろかなる人ひとも誠まことにかなひなば  
神かみの心こころは悟さとり得えられむ。

一〇

圓まる山やまに燃もゆる躑つ躑つの色いろ赤あかき  
魂たまをうつつして神かみに仕つかへむ。

一一

天あめの涯はて地つちの極きはみもおつるなく  
照てらす光ひかりと現あらはれし岐き美み。

一二

神かみの書ふみ繙ひもとく毎ごとに新あたしく  
思おもふは神かみの恵めぐみなりけり。

第一二九

一

大空おほぞらゆ下くだりて人ひととなりましし  
教をしへの主きみの御みのり教まも守もれよ。

二

嚴いづの神ふみ書みづ瑞みづの言こと葉はは世よに迷まよふ

暗くらき心こころを照てらす御鏡みかがみ。

三

限かぎりなき智ち慧ゑの言ことば葉はを連つらねたる  
神かみの神書みふみは世よの寶たからなる。

四

彌いや廣ひろく此この神かみの世よを照てらせよと  
神かみの授さづけしこれの神書かみふみ。

五

如意寶珠黄金の玉も此神書に  
潜みてありぬ探りて受けよ。

六

狭霧こむ大海原を行く船の  
燈火とぞなる巖の神書。

七

風荒く波猛るなる海原を  
安く導く瑞の言靈。

八

雲くもは晴はれ暗やみは消きえ失うせ世よを照てらす  
主きみを拜をろがむ嚴いづの神書かみふみ。

九

惟かむながら神かみの光ひかりを身みに受うけて  
萬よろじの國くにを照てらさせ玉たまへ。

第一三〇

一

瑞御魂みづみたま千座ちくらの置戸おきどの贖罪あがなひに

國くにの礎いしずみたて玉たまひぬ。

二

國くに々に御み名なを變かへさせ玉たまひつつ  
清きよめの爲ために降くだります主きみ。

三

争あらそひは四よ方に起おこりて人ひと々の  
艱なや難み拂はらはむ爲ために來きましぬ。

四

皇神すめかみは祈禱いのりを聞ききて人々ひとびとの  
歎なげきを歌うたと變かはらせ玉たまはむ。

五

現世うつしよに残のこりし人ひとも死みまかりし  
人ひとをも共ともに守まもります神かみ。

六

永久とこしへの安やすき生命いのちを待まち佗わびて  
岐美きみの來きますを祈いのる民草たみぐさ。

第一三一

一

永とこしへ久への岩いはの礎いしすゑいいや固かたに  
神かみの都みやこは榮さか光かえ充みちぬる。

二

皇すめ神かみは愛あいの石垣いしがき圍めぐらして  
民たみの安やすきを守まもらせ玉たまふ。

三



つくるなき愛の泉は永遠に  
生命の水と湧き出でにけり。

四

永久に恵みの露に霑ひし  
神の御子等は渴く事なし。

五

皇神の守らせ玉ふエルサレム  
上る人こそ樂しかるらむ。

六

塵ちりの世よの人の嘲あざけり何かあらむ  
神かみに生いきたる吾わが身みなりせば。

七

露つゆの如ごとち消きゆる樂たのしみや  
空むなしき富とみに迷まよふ曲まが人ひと。

八

惟かむながら神かみ嚴いつの恵めぐみに露つゆひて  
情つれなき此この世よを安やすく渡わたらむ。

(大正一二・五・五 舊三・二〇 北村隆光録)

第一四章 神服〔一五六四〕

第一三二

一

すめおほかみ  
皇大神の御教に  
みをしへ  
まつろ  
服従ひまつる人の身は  
ちびき  
千引の巖と動きなく  
いほほ  
スメール山と聳え立つ。  
ざん  
そび  
た

二

神かみの教をしへに清きよまりし  
抱いだかしたまふ愛あいの御手みて  
抱いだきたまひて珍うづの國くに  
選えらみの民たみを子この如ごとく  
いと柔やはらかに穩おだやかに  
神かみの都みやこに導みちびき玉たまふ。

三

貴うづの御國みくにの花はな園ぞのに  
導みちびきたまふ瑞御魂みづみたま  
限かぎりも知しらぬ御榮光みさかえの  
中なかに安やすけく吾わが靈たまを  
住すまはせたまふぞ尊たふとけれ。

第一三三

一

興<sup>おこ</sup>りては直<sup>すぐ</sup>に倒<sup>たふ</sup>るる國<sup>くに</sup>々<sup>くに</sup>は  
皆<sup>みな</sup>かげるふの姿<sup>すがた</sup>なりけり。

二

永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に動<sup>うご</sup>かず立<sup>た</sup>てる神<sup>かみ</sup>國<sup>くに</sup>は  
亂<sup>みだ</sup>れも知<sup>し</sup>らず嵐<sup>あらし</sup>だもなし。

三

立<sup>た</sup>ち騒<sup>さわ</sup>ぐ浪<sup>なみ</sup>にも似<sup>に</sup>たる世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>に  
心<sup>こころ</sup>やすくて住<sup>す</sup>む人<sup>ひと</sup>はなし。

四

山やまのごと動うごかぬ國くには伊都いづ能賣のめの  
神かみのまします松まつの神國かみくに。

五

皇神すめかみの廣ひろき心こころは和わ田だの原はら  
目めにも留とまらぬ如ごとくなりけり。

六

神國かみくにの清きよき力ちからは潮うしほなす  
海うみの底そこひもはかり知しられじ。

第一三四

一

あな尊千座を負ひて罪人を  
生かしたまひし岐美の御姿。

二

吾魂の礎固し瑞御靈  
その御懐に抱かれし上は。

三

赤心まごころの清きよき涙なみだを濺そそぎつつ  
清きよめの貴き美みの艱なやみをぞ思おもふ。

四

皇神すめかみの御座みくらの前まへに近ちかづきて  
友ともに交まじはる事ことの樂たのしき。

五

曲神まががみの深ふかき企たくみに勝かたせかし  
きみのきみなる嚴いづの大神おほがみ。

六



皇神すめかみの誠まことの道みちの榮さかゆれば  
天地てんちの幸さちは神都みやこにぞ降ふる。

第一三五

一

現世うつしよはよしや惡魔あくまと變かはるとも  
吾われは變かはらじ神かみのまにまに。

二

天地あめつちは碎くだけ壞やぶるる事ことあるも

やすくあるべし神の都は。

三

父母の情も友の親しみも  
變る御代にも神は變らじ。

四

皇神の恵の露は永久に  
かわきし靈に降り濺ぐなり。

五

火ひに焼やかれ水みづに溺おぼる苦くるしさも  
心こころはやすし神かみの御み民たみは。

第一三六

一

友ともとなり又また仇あだとなる國くに々くにも  
同おなじ御み神かみの露つゆに露つるほふ。

二

御み惠めぐみの露つゆを降ふらして世よを洗あらふ

瑞みづの大神おほかみいとぞ尊たふとし。

三

皇神すめかみの珍うづの御舍みあらかつか仕つかへてし  
清きよき心こころを神かみは愛めでなむ。

四

喜よろこびの御歌みうたうたひて御舍みあらかを  
仕つかへまつりし人ひとを愛めでます。

四

赤<sup>まごころ</sup>心の清<sup>きよ</sup>き祈<sup>いの</sup>りにこたへつつ  
たまふ惠<sup>めぐみ</sup>のいや廣<sup>ひろ</sup>きかな。

六

世<sup>よ</sup>の民<sup>たみ</sup>を瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>に清<sup>きよ</sup>めつつ  
幸<sup>さち</sup>ひたまふ珍<sup>うづ</sup>の言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>。

七

又<sup>また</sup>も世<sup>よ</sup>に現<sup>あら</sup>はれまして天<sup>あめ</sup>の下<sup>した</sup>  
知<sup>し</sup>らすよき日<sup>ひ</sup>にあはせたまはれ。

八

愛善あいぜんのつくる事ことなき父ちちの神かみ  
瑞みづの御靈みたまを與あたへたまへり。

九

此上このうへもなき御榮みさかえの永久とこしへに  
あれよと祈いのる信徒まめひと天晴あはれ。

第一三七

一

元津御祖もとつみおやの皇神すめかみの

惠めぐみの露つゆの彌廣いやひろく

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>を世<sup>よ</sup>に下<sup>くだ</sup>し 罪<sup>つみ</sup>に死<sup>し</sup>したる人<sup>ひと</sup>草<sup>ぐさ</sup>を  
甦<sup>よみがへ</sup>らして神<sup>かみ</sup>國<sup>くに</sup>へ 導<sup>みちび</sup>きたまひ今日<sup>けふ</sup>よりは  
御<sup>み</sup>民<sup>たみ</sup>の數<sup>かず</sup>に入<sup>い</sup>らしめよ。

二

元<sup>もと</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>神<sup>かみ</sup>は瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup> 下<sup>した</sup>津<sup>つ</sup>御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>に下<sup>くだ</sup>しまし  
千<sup>ち</sup>座<sup>くら</sup>の置<sup>お</sup>戸<sup>きと</sup>を負<sup>お</sup>はせつつ 世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>の罪<sup>つみ</sup>の贖<sup>あがな</sup>ひの  
清<sup>きよ</sup>めの主<sup>きみ</sup>となしたまふ 仰<sup>あふ</sup>ぎ敬<sup>うやま</sup>へ神<sup>かみ</sup>の恩<sup>おん</sup>  
慕<sup>した</sup>ひまつれよ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>。

三

暗<sup>くら</sup>き司<sup>つかさ</sup>の魔<sup>ま</sup>の手<sup>て</sup>より

諸<sup>も</sup>の罪<sup>つみ</sup>をば贖<sup>あがな</sup>はれ

世人の爲めに千萬の  
諸の惡魔は争ひて  
其光景の物凄さ  
仁慈の鞭をふり上げて  
榮光を清く現はして  
艱みをうけし瑞御靈  
亡ぼし呉れむと攻め來る  
神の御子たる瑞御靈  
言向和し神の代の  
眠をさまし玉ひけり。

四

嚴の御靈や瑞御靈  
生きては頼り死りては  
恵に離るる事もなく  
つかはせたまへ惟神  
清めのきみの御もとに  
御側に近く縋りつき  
清く正しく永久に  
謹みゐやまひ願ぎまつる。



第一三八

一

暗くらき世よの光ひかりとなりて天あ降もります  
嚴いづの御み靈たまの御み稜い威づかしこし。

二

今いまよりは命いのちの主きみの御み手てのままに  
うちまかせつつ神みくに國くにに進すすまむ。

三

素盞鳴の神の血潮に洗はれし  
人は御國に直に進まむ。

四

罪に死し恵に生きて皇神の  
御もとに榮ゆる身こそ嬉しき。

五

皇神の教の御子の數に入る  
其御するしの守神祭かな。

六

許々こ多た久くの罪つみを清きよむる身みの幸さちは  
世よに比くらぶべきものこそあらめ。

七

吾わが靈たまも身からだ體たも捧ささげて皇すめ神かみの  
御み名なを稱たへつ月つき日ひを送おくらむ。

第一三九

一

三み千ち年とせの月つき日ひ重かさねて今いまもなほ

變<sup>かは</sup>りたまはぬ神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>瑞<sup>しる</sup>兆<sup>し</sup>。

二

奥<sup>おく</sup>深<sup>ふか</sup>くはかり知<sup>し</sup>られぬ秘<sup>ひめ</sup>事<sup>ごと</sup>を  
やすく覺<sup>さと</sup>りぬ神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>文<sup>ふみ</sup>に。

三

蓮<sup>れん</sup>華<sup>げ</sup>臺<sup>だい</sup>清<sup>きよ</sup>き御<sup>み</sup>庭<sup>には</sup>に集<sup>あつ</sup>まりし  
身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>を永<sup>と</sup>久<sup>は</sup>に照<sup>てら</sup>させたまへ。

四

永久とこしへの誠まことのみのり結むすぶべく  
すすがせたまへおのが身み魂たまを。

第一四〇

一

八束やつか髻ひげ手足てあしの爪つめを剥はがれつつ  
血ちをもて世よをば清きよめたまひぬ。

二

許こ々こ多た久くの罪つみも汚けがれも皇すめ神かみの

血潮ちしほによりて洗あらはれにける。

三

御惠みめぐみの教をしへの文ふみを謹つつしみて

味あぢはふ靈魂たまとならしめたまへ。

四

安河やすかはに誓約うけひの業わざを始はじめたる

嚴いづと瑞みづとの神かみぞ尊たふとき。

五

八衢やちまたの醜しこの大蛇をろちの帯おばせたる  
嚴いづの劍つるぎを奉たてまつりたる君きみ。

第一四一

一

選えらまれし神かみの御民みたまよ聲こゑ高く  
瑞みづの御靈みたまを稱たたへ唱うたへよ。

二

言靈ことたまのあらむ限かぎりを盡つくすとも

如何いかでうつし得えむ瑞みづの御勳みいさを。

三

現世うつしよにおどろき難儀なんぎおほ多けれど  
神かみとしあれば撓たわむことなし。

四

千座ちくらなす置戸おきどを負おひて神人かみびとの  
生命いのちまも守りしきみぞ尊たふとき。

五



風流なる御歌うたひて瑞御靈  
ほめ稱へなむ高き勳を。

六

飢ゑ渴く心に生命の糧と水  
豊にたまひし瑞の大神。

七

御恵ののどかなりける筵には  
掟の影も消えてゆくなり。

八

玉たまの緒をの生命いのちと誠まことの御光みひかりと  
輝かがやきたまふ嚴いづの大神おほかみ。

九

夜よは更ふけて曲まがの軍いくさの狂くるひ立たつ  
折をりにも神かみは安やすきを賜たまへり。

（大正一二・五・五 舊三・二〇 於教主殿 加藤明子録）

第一五章 神前しんぜん（一五六五）

第一四二

一

皇大神の永久に 鎮まり居ます天津國  
大御座よりこぼれたる 屑だに拾ふ價なき  
吾身を如何に過ごさむや あはれみたまへ瑞御靈  
嚴の御靈の御前に 赤心捧げて願ぎまつる。

二

諸の罪科悉く 赦させたまふ大神の  
廣き誓ひをひたすらに 身魂の綱と頼みつつ  
嚴のおめしに従ひて 御許にゆくより道はなし

あゝ惟神々々かむながらかむながら

謹み敬ひ願ぎまつる。つつしうやまね

三

瑞みづの御み靈たまの笑ゑが顔ほをば  
胸むねの帳とばりを引ひきあけて  
拜をろがみまつる其その時ときは  
浪なみ風かせ猛たける世よの中なかも  
何なんの苦くもなく勇いさましく  
再ふたび生いきて働はたらかむ  
神かみの恵めぐみは上うへもなく  
其その功いさ績をしは果はてもなし。

四

罪つみを重かさねし吾われ々われの  
醜みにくき身み魂たまを科し戸など邊べの  
風かぜに苦くもなく吹ふき拂はらひ  
勇いさみて此この世よにながらへつ  
雄を々をしく大おほ道どの眞ま中なかを  
進すすませたまへと願ねぎまつる。

五

嚴いづの御聲みこゑの嬉うれしさに  
 吾身わがみを忘わすれて大前おほまへに  
 近ちかづき清きよき信まめ徒ひとの  
 集あつまる筵むしろに連つらなりて  
 御稜威みいづを讚ほめさせたまへかし。

六

今日けふの生いく日の御祭みまつりの  
 限かぎりも知しらぬ喜よろこびに  
 身みも魂たましひも包つつまれて  
 いや永とこ久しへに響ふる應まひの  
 筵むしろに加くはへたまへかし  
 あゝ惟かむながらかむながら  
 御前みまへに感謝かんしゃし奉たてまつる。

第一四三

一

夜なき國を永久に  
 知らさむと御空より  
 下らせたまふ五六七神  
 常世の春の來るまで  
 守る尊き神の法  
 悟らせたまへと願ぎ奉る。

二

世人の爲に赤心を  
 盡す誠の無き人は  
 深遠微妙の神の法  
 如何でか悟り得らるべき  
 心を鎮めて皇神の  
 嚴の御文を調ぶべし。

心こころの中うちに犯をかしたる 吾身わがみの罪つみを悔くゆる事こと  
 知しらざるものは如何いかにして 神かみの教をしへの悟さとれむや  
 改悟かいごの涙なみだなき人は 如何いかでか知しらむ皇神すめがみの  
 盡つきせぬ惠めぐみの御心みこころを 瑞みづの御靈みたまの苦くるしみを  
 心こころを潛ひそめてよく悟さとり 味あぢはひかしくみ守まもりなば  
 これの教をしへは明あきかに 手てに取とる如ごとく悟さとり得えむ  
 千代ちよに盡つきせぬ命いのちをば 受うけし吾等われらは生うみの子この  
 彌いやつぎつぎに云いひ傳つたへ 守まもり進すすまむ神かみの法のり。

一

惠めぐみの主きみにうれしくも  
 高天原たかあまはらの聖場せいぢやうに  
 親したしく謁まみえ奉たてまつり  
 永遠とこほに盡つきせぬ幸さちを  
 身魂みたまに受うけし嬉うれしさよ。

二

命いのちの神かみの降くだります  
 目出度めでたき生日いくひを頼たのもしく  
 思おもひかへして現世うつしよの  
 重荷おもにを下おろし皇神すめかみの  
 珍うつつの筵むしろにうら安やすく  
 つかせたまへと願ねぎまつる。

三



神かみの恵めぐみのたれる時とき  
瑞みづの御み霊たまと諸もろとも共に  
瑞みづの御み霊たまの贖あがなひ罪なみに

永とこ遠はの生いのち命ちの充みてる時とき  
生いくひ日ひを祝いはひて過すごすべし  
すべの靈みたまは清きよまりぬ。

四

玉たまの御み聲こゑを耳みみにして  
變かはりゆくこそ尊たふとけれ。

惱なやみは忽たちまち喜よろこびと

五

汚けがれも頓とみに清きよまりて  
加くははり行くこそ畏かしこけれ  
宴うたげ會かいの幸さちは如いか何ならむ

嚴いづの力ちからは日ひに月つきに  
天あま津つ御み國くにの喜よろこびの  
現うつしよ世よさへも斯かくばかり

樂たのしき清きよき喜よろこびの  
宴會うたげの席むしろ眺ながむれば  
神國みくにの姿すがたぞ憇しのばるる。

第一四五

一

咲さき匂におふ春はるの花はな野のに遊あそべよと  
珍うづの御聲みこゑのかかる嬉うれしさ。

二

人足ひとあしも絶たえて淋さびしき陸奥みちのくの

荒野あらのが原はらにも恵めぐみの花はな咲さく。

三

親おやが子こを戀こふる如ごとくに大おほ道みちに  
迷まよふ吾われ等らをいたはりたまふ。

四

谷たに深ふかみ人ひとも通かよはぬ山やま奥おくの  
花はなにも神かみの恵めぐみありけり。

五

瑞御靈其面影は見えずとも  
珍の心を諭す神文。

六

瑞御靈いづくのはてに潜むとも  
清めたまはむ安けき國へ。

第一四六

一

罪深き身を持ちながら貴美の前に

額ぬかづき得えしぞ惠めぐみなるらむ。

二

信まめ徒ひとが共ともに手てを曳ひき變かはりなく  
相あひ見みる幸さちの如い何かに尊たふとき。

三

現うつ世しよの醜しこの戦たたかひ諸ももの罪つみ  
鎮しづまりて行ゆく神かみの權ちから威らに。

四

許々こ多た久くのな艱やみうれ憂ひもみ御こ心ころぞ  
やがてはふか深き喜よろこびとならむ。

五

勇いさましくみづ瑞の御み靈たまにしたが従ひて  
千ちく座らをお負はむさかえ榮光のた爲めに。

六

滅ほろびゆ行く世よをい生かしますみづ瑞み御み靈たま  
めぐみのつゆ露の清きよくしたたる。

第一四七

一

神かみの前まへよしや離はなれて行ゆくとても  
心こころはなすな清きよめの主きみに。

二

大神おほみわぎ業わざ清きよくつとめて村むら肝きもの  
心こころ一つひとに勵はげめ信まめ徒ひと。

三

日ひに月つきに神かみの御畑みはたを耕たがせば  
秋あきの垂穂たりほは豊ゆたかなるべし。

四

天津あまつく國くに神かみの御前みまへに舞昇まひのぼり  
教をしへの御子みこと共に樂たのしむ。

五

かくならば別わかれなやみも非あらずして  
いや永とこしへ久しへにつきぬ親したしみ。



第一四八

一

世よの幸さちを來きたさむ爲ために瑞御靈みづみたま  
シシオオンの山やまにくだりますかも。

二

仇あだに勝かち世よを知し召めす嚴御靈いづみたま  
瑞御靈みづみたまの神かみぞうるはし。

三

千ちは早はや振ふる神かみの御み代よより待まち佗わびし  
命いのちの主きみのくだるう嬉うれしさ。

四

上かみつ代よの聖ひじりもつひに知しらざりし  
光ひかり見みる身みの頼たのもしきかな。

五

丸まる山やまの臺うてなに起おこる神かみ歌うたは  
四よ方もの國くに々くに響ひびき渡わたれり。

六

四方よもの國くにもらさず落おとささず生命せいめいの  
教をしへの道みちに入いらしめ給たまへ。

第一四九

一

誰たれも彼かも神かみの給たまひし御みめぐみ恵を  
受うけざるはなし堅かき磐は常とき磐はに。

二

飢うゑ渴かわく人ひとに眞ま清しみ水みづ糧かて與あたへ

生いかさせたまふ瑞みづの大神おほかみ。

三

選えらまれし民たみの受うけたる御み恵めぐみを  
廣ひろく分わかてよ四よ方もの人ひと等らに。

四

つかれたる人ひとには安い息こひ飢う渴かわ  
まづしき者ものに糧かてを與あたふる。

五

冬<sup>ふゆ</sup>さむき薄<sup>うす</sup>衣<sup>ぎ</sup>に慄<sup>ふる</sup>ふ民<sup>たみ</sup>草<sup>くさ</sup>も  
やがては開<sup>ひら</sup>く花<sup>はな</sup>の春<sup>はる</sup>來<sup>こ</sup>む。

六

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>を喜<sup>よろこ</sup>ぶ聲<sup>こゑ</sup>は迦<sup>か</sup>陵<sup>らびん</sup>伽<sup>が</sup>の  
鳴<sup>な</sup>く音<sup>ね</sup>よりもなほ心<sup>こ</sup>地<sup>ち</sup>よきかな。

七

來<sup>く</sup>る春<sup>はる</sup>の花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>き匂<sup>にお</sup>ふ樂<sup>たの</sup>しさは  
ミロク<sup>ミロク</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>の兆<sup>しるし</sup>なりけり。

第一五〇

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>に捧<sup>ささ</sup>ぐるものは悉<sup>しつじつと</sup>く  
神<sup>かみ</sup>より受<sup>う</sup>けし御<sup>み</sup>賜<sup>たま</sup>なり。

二

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>に受<sup>う</sup>けし寶<sup>たから</sup>をおとさず  
清<sup>きよ</sup>く用<sup>もち</sup>ひよ道<sup>みち</sup>の信<sup>まめ</sup>徒<sup>ひと</sup>。

三

放はなたれて山路やまぢに迷まよふ人ひともあり  
神かみの恵めぐみに囚とらはるもあり。

四

冷ひえわたり恵めぐみの花はなは打うち菱しをれ  
のぞみなき家やは數かず限かぎりなし。

五

曲まが道みちに迷まよふ羊ひつじを皇すめ神かみの  
大おほ路ぢにかへし清きよむる神かみ人びと。

六

皇神すめかみの嚴いづの神業みわざに神習かむならひ  
捧ささぐる誠まこと受けさせたまふ。

第一五一

一

天地あめつちを作りつく固かためし大神おほかみの  
いづの恵めぐみに酬むくふ術すべなし。

二

春はるは花はな秋あきは紅葉もみぢと折をり々をりに



世人よびとを笑ゑませ給たまふ大神おほかみ。

三

家う族から親や族から睦む睦つび親したしみ家いの業へ  
富とみ榮さゆるも神かみの賜たまの賜もの。

四

瑞みづ御み靈たま千ち座くらの置お戸きどを負おはせつつ  
世人よびとの犧に牲えと降くだりましけり。

五

瑞御靈天津空より降らせて  
吾等が靈を生かしたまへり。

六

神國に昇る望みを與へます  
皇大神に酬ふ術なし。

七

白銀も黄金も玉も悉く  
錆腐り行く假の寶ぞ。

八

皇神すめかみを稱たへまつりて備そなへ奉まつる  
寶たからは神國みくにの倉くらに納をさまる。

九

鏘腐さびくさる假かりの寶たからも神かみの國くにの  
貢みつぎとなして受うけさせたまへ。

一〇

御惠みめぐみの深ふかきに酬むくい足たらねども  
身みも魂たましひも喜よろこび捧ささげむ。

(大正一二・五・五 舊三・二〇 於教主殿 加藤明子録)

第四篇 風山雅洋ふうざんがやう

第一六章 神英しんえい〔一五六六〕

第一五二

一

左手ゆんでにて施與ほどこしするを右みぎの手てにて

知らせざるこそ神かみに叶かなへり。

二

川かはの瀬せに落おちて流ながる種た子ねさへも  
何いづれの岸きしにか生おひたつものを。

三

惟かむ神なのまにまに何なに事ことも  
務つとめ行ゆく身みに過あや失まちはなし。

四

荒風あらかぜに裂さき折をられしと見みえし木きの  
木蔭こかげにさへも人ひとは寄より來くる。

第一五三

一

常暗とこやみの夜よは明あけ行ゆきて地ちの上うへに  
住すむ人ひとの子こも眼まなこさましぬ。

二

御教みをしへを聞きいて涙なみだに咽むせびつつ

犯<sup>をか</sup>せし罪<sup>つみ</sup>を悔<sup>く</sup>ゆる尊<sup>たふと</sup>さ。

三

大<sup>おほ</sup>八<sup>や</sup>洲<sup>しま</sup>八<sup>や</sup>十<sup>そ</sup>の國<sup>くに</sup>人<sup>びと</sup>悉<sup>ことごと</sup>く  
御<sup>みまへ</sup>前<sup>か</sup>に畏<sup>かしこ</sup>む時<sup>とき</sup>近<sup>ちか</sup>づきぬ。

四

千<sup>ちよ</sup>萬<sup>ろづ</sup>の國<sup>くに</sup>の人<sup>ひと</sup>草<sup>くさ</sup>心<sup>こころ</sup>より  
御<sup>みそら</sup>空<sup>あふ</sup>仰<sup>あ</sup>ぎて惠<sup>めぐみ</sup>を慕<sup>した</sup>ふ。

五

いと清し由良の流に罪を洗ひ  
神の御國に行くぞかしこき。

六

瑞御靈現はれ玉ひ御惠の  
潤ふ日まで忍ばせ玉へ。

第一五四

一

世界を繞る氷の山も

照る日にやける眞砂の濱も



神かみの恵めぐみを求めもとつつ  
叫さけぶ聲こゑこそ響ひびきけり  
艱なやみの鎖くさり解とけよ放はなてよ。

二

皇神すめかみの恵めぐみの露つゆは草くさにすら  
豊ゆたかにかかり月つき日は宿やどる。

三

嚴いづの恵めぐみは足あし曳びきの  
山やまにも野のにも充みちたらふ  
萬よろづの物ものの司つかさなる  
人ひとをば見み捨すて玉たまはむや  
慕したひまつれよ神かみの愛あい  
上うへなる神かみの御おん智ち慧ゑに  
暗くらき心こころを照てらされし  
吾われ等らはいかみで御み光かりを

暗くらきに迷まよひ苦くるしめる

世よ人に照てらさで秘ひめ置おかむや。

四

瑞みづの御み靈たまの世よを治しらす  
身み魂たまを磨みがき生せい命めいの  
四よ方もの國くに々くに照てらせかし。

光ひかりの御み旗はた掲かかげつつ  
五み六ろ七くの御み代よの來きたる迄まで

第一五五

一

天あま津つ日ひの照てらす限かぎりは皇すめ神かみの

御國みくにとなりて永遠とくはに榮さかえむ。

二

嚴いづ御魂みたま瑞みづの御魂みたまの御名みなにより  
捧ささぐる祈いのり禱はは安やすく受うけまさむ。

三

諸もろ々もろの國くに々くにの民たみ皇すめ神かみの  
御名みなを稱たふる時ときは來きにけり。

四

囚人めしうどは罪つみは赦ゆるされ貧まつしきは  
富とみて恵めぐみの雨あめに潤うるほふ。

五

天あめケ下がした萬よろづの物ものは皇神すめかみの  
御名みなを謳うたひて歡えらぎ樂たのしむ。

第一五六

一

地ちの上うへの總すべては神かみに服まつろひしと

天あめなる神かみは喜よろこび玉たまふ。

二

高たか山やまも低ひき山やまも皆みな皇すめ神かみに  
仕つかへて御み名なを稱たたふる神かみの代よ。

三

五み六ろ七くの世よ現あらはれ來きたる日ひを待まちて  
祈いのる吾われ等らの誠まことを聞きこしめせ。

第一五七

一

夜の守り日の御守りと朝夕に  
恵の光照らす皇神。

二

山の端に輝く星の光見れば  
旅の夕のいとど楽しき。

三

東の空に輝く星かげに  
信徒永遠の希望を仰ぐ。

四

永久とこしへにつきぬ恵めぐみも御教みをしへも  
今いまはさやかにきらめきにけり。

五

いと寒さむき露つゆをばあびて夜よを守まもる  
業わざの勉つとめも果はつる日ひ近ちかし。

六

世よの道みちに悩なやみて旅たび行く人々ひとびとの  
憩いこふ時ときこそ近ちかづきにけり。

第一五八

一

國くに々くにに輝かがき渡わたる御み惠めぐみの  
光ひかりは瑞みづの御み靈たまなりけり。

二

日ひに月つきに彌い益ます幸さちを得えよかしと  
光ひかりの神かみを祈いのりこそすれ。

三



ほろびしと世よに思おもはれし三五あななひの  
神業みわざの焰ほのほまたも燃もえつつ。

四

常世とこよ行く暗やみを照てらして嚴いづの神かみ  
罪つみの根城ねじろを碎くだかせ玉たまふ。

五

日ひの下もとに天降あもりましたる御使みつかひを  
慕したひて來きたれ世よの悉ことごとは。

六

嚴いづ御み靈たま瑞みづの御み靈たまの力ちからならで  
誰たれか此この世よを清きよめ得うべしや。

七

手て毬まりなす雲くもも忽たちまち大おほ空ぞらを  
塞ふさぐが如ごとき三あな五なひの道みち。

八

地ちの上うへの在ありの悉ことごとく潤うるはむ  
惠めぐみの雨あめの降ふりしきる世よは。

九

一粒の粟種子蒔きて萬倍の  
實を結ぶなる三五の道。

第一五九

一

嚴の御靈や瑞御靈  
穢れを清め世を生かす  
よき訪れは久方の  
天にも地にも雷の  
轟く如く鳴り響く  
山河草木相共に  
五六七の御代を稱へつつ  
調を合せ御榮光を  
謳ひ樂しむ時は來ぬ  
朝日の如く輝きて  
御空に上る皇神の  
光を共に仰げかし。

萬よろづの戰たたかひ治をさまりぬ

百ももの國くに人びと生せい命めいの

御旗みはたの下もとに馳はせついで

平安やすきと榮光さかえを祈いのるべし

憂うれひ艱なやみの雲くもはれて

惠めぐみの月つき日ひ空そらに照てり

彌いや永とこ久しへにやすむべき

目め出で度たき日ひこそ來きたりけり

嚴いづの御魂みたまの御教おんをしへ

瑞みづの御魂みたまの御誓おんちかひ

充みつる時ときこそ來きたりけり

待まち焦こがれたる再臨さいりんの

月日つきひを喜よろこび謳うたひつつ

喜よろこび見みるべき時ときは來きぬ。

第一六〇

風荒み波は逆巻く海の上に  
船を操る人ぞ危き。

二

いと安く港に進む御力を  
授け助くる神ぞ戀しき。

三

黄昏れて嶮しき山に迷ふ身も  
誠の神は照らし玉はむ。

四

吾<sup>わが</sup>思<sup>おも</sup>ふ心<sup>こころ</sup>のままに貧<sup>まじ</sup>しきを  
賑<sup>にぎは</sup>す寶<sup>たから</sup>なきぞ悲<sup>かな</sup>しき。

五

形<sup>かたち</sup>ある寶<sup>たから</sup>を持<sup>も</sup>ちてつくすより  
誠<sup>まこと</sup>の教<sup>のり</sup>に身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>洗<sup>あら</sup>へよ。

六

星<sup>ほし</sup>光<sup>かげ</sup>の洩<sup>も</sup>れ來<sup>く</sup>る伏<sup>ふせ</sup>屋<sup>や</sup>に住<sup>す</sup>むとても  
喜<sup>よろこ</sup>び多<sup>おほ</sup>き神<sup>かみ</sup>の教<sup>をし</sup>へ子<sup>ご</sup>。

七

秋あきの田たに立たち出でて巖いづの八束穂やつかほを  
集あつむる人ひとぞ樂たのしかるらむ。

八

神國かみくにの神苑みそのに種たねをおろしなば  
彌いやまさりたる收みのり穫りあるべし。

九

心こころなき田人たびとのうとく殘のこしたる  
落穂おちほ拾ひろひて道みちにささげむ。

雨あめの漏もる賤しづケ伏が屋ふせの軒のきにさへ  
堇すみれは香にほひ蒲たん公英ぼは咲さく。

一一

蟆頭ひきがへじらにさへも夜よる光ひかる  
玉たまの潜ひそめる例ためしありけり。

一二

眞砂まさごにも黄金こがねの混まじる物ものぞかし  
心こころをとめて探さぐり求もとめよ。

一三



何處いづこにも人ひとの爲なすべき神業かむわざの  
開ひらかれあるを人ひとは知しらざり。

第一六一

一

天津日あまつひの光ひかりの届とどかぬ國くにさへも  
神かみの恵めぐみの雨あめは降ふるなり。

二

三五あななひの神かみの教をしへは常世とこよ行く

暗<sup>やみ</sup>を分<sup>わ</sup>け行<sup>ゆ</sup>く月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>なりけり。

三

目<sup>め</sup>の見<sup>み</sup>えぬあはれ果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>なき人<sup>ひと</sup>の身<sup>み</sup>を  
神<sup>かみ</sup>は宿<sup>やど</sup>りて守<sup>まも</sup>り玉<sup>たま</sup>ひぬ。

四

世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>の惱<sup>なや</sup>み苦<sup>くる</sup>しみ患<sup>わづら</sup>ひを  
憐<sup>あは</sup>れみ清<sup>きよ</sup>むる瑞<sup>みづ</sup>の大神<sup>おほかみ</sup>。

五

吾<sup>わが</sup>生<sup>いのち</sup>命<sup>と</sup>永<sup>は</sup>遠<sup>は</sup>に與<sup>あた</sup>ふる皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>は  
身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の燈<sup>あかり</sup>火<sup>てら</sup>照<sup>てら</sup>し玉<sup>たま</sup>ひぬ。

六

現<sup>うつしよ</sup>世<sup>よ</sup>の暗<sup>やみ</sup>路<sup>ぢ</sup>に光<sup>ひかり</sup>與<sup>あた</sup>へつつ  
神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>へ進<sup>すす</sup>ませ玉<sup>たま</sup>ふ。

七

瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>命<sup>いのち</sup>の主<sup>きみ</sup>よ海<sup>うみ</sup>原<sup>のみ</sup>の如<sup>ごと</sup>  
みたさせ玉<sup>たま</sup>へ嚴<sup>いづ</sup>の惠<sup>めぐ</sup>みを。

八

惟かむながら神かみ知しろしめす世よの中なかは

心こころひと一つで曲まが神かみもなし

(大正一二・五・六 舊三・二一 北村隆光録)

第一章 神月しんげつ〔一五六七〕

第一六二

一

あな尊たふとあな美うるはしき綾あやの里さとに

珍うづの光ひかりの照てりそめにける。

二

常とこ暗やみに迷まよひ苦くるしむ民たみ草ぐさも  
此このみしるしをことほぎ奉まつれ。

三

あな尊たふとあな美うるはしき聖せい地いちの朝あさ  
心こころ樂たのしき日ひは來きたりけり。

四

日ひの本もとの日ひの出での島しまも諸もろ國くにも  
今いまこそ神かみの幸さちを受うけなむ。

五

山やまも野のも花はな咲さき匂にほひ永とこ久しへの  
泉いづみ湧わき出づる神かみ代よ來きにけり。

六

ミロクの代よ喜よろこび祝いはふ聲こゑ々々は  
山やまの尾を上のへにも響ひびき渡わたれり。

七

スメールの山やまより高く皇神すめかみの  
御稜威みづを清きよく稱たへまつれよ。

八

三五あななひの教をしへの道みちの輝かがきて  
遍あまねく闇やみを照てらしゆくなり。

第一六三

一

秋あきの田たの黄金こがねの浪なみは益人ますひとの

齡<sup>よほひ</sup>をわたす御船<sup>みふね</sup>とぞ知<sup>し</sup>れ。

二

八束<sup>やつかほ</sup>穂<sup>ほ</sup>の足<sup>たり</sup>穂<sup>ほ</sup>は色<sup>いろ</sup>づき満<sup>み</sup>ちにけり  
いざ刈<sup>か</sup>り取<sup>と</sup>れよ秋<sup>あき</sup>の最<sup>も</sup>中<sup>なか</sup>に。

三

刈<sup>か</sup>り入<sup>い</sup>るる稲<sup>いな</sup>穂<sup>ほ</sup>は多<sup>おほ</sup>く刈<sup>か</sup>る人<sup>ひと</sup>は  
少<sup>すく</sup>なし下<sup>しも</sup>僕<sup>べ</sup>いそしみ仕<sup>つか</sup>へよ。

四



東雲しののめと共ともに起おき出いで八束やつかほ穂ほを  
刈からしめ給たまへ夕暮ゆふぐるるまで。

五

刈かり入いれの終をはりし上うへは天津あまつくに國くにの  
御倉みくらに納をさめて祝いはひまつらむ。

第一六四

一

心こころ傲おごれる國くに人びと達たちも

いづの御神みかみによく仕つかへ

瑞の御靈に頼り來る

よき日を早く來らせたまへ。

二

榮えの夢に酔ひ果てし

泡なすきみも村肝の

心おどろき馳せ來り

命の主を世柱と

仰ぐ神代を速に

來らせたまへ惟神

御前に平伏し願ぎまつる。

三

劍も太刀も大砲も

軍の艦も武夫も

用なき御代にかへしまし

平和と榮光と歡喜を

此世に來たす瑞御靈

ミロクの神の大神に

心清めて願ぎまつる。

四

いとも尊き奇なる  
神の御業を畏みて  
榮えつきせぬ大御名を  
國人各稱へあげ  
恵の教を完全に  
語り廣めさせたまへかし。

第一六五

一

瑞の御靈の恵の雨の

普く下界に降りそそぐ

清きよき御み音を今いまぞ聞きく  
心こころ汚きたき吾わが身みにも。

濺そそがせたまへ村むら肝きもの

二

乾かわきし地つちも潤うるひぬ  
命いのちの雨あめの一滴ひとしづく

瑞みづの御み霊たまの御おん恵めぐみ  
下くださせたまへ吾わが身みにも。

三

嚴いづの御み霊たまの御おん父ちちよ  
吾われ等らを捨すてさせたまふなく

瑞みづの御み霊たまの母はは神がみよ  
留とどまりたまひて人ひと草ぐさを  
守まもり恵めぐまひたまへかし。  
此この地ちの上うへに永とこ久しに

四

命いのちの主きみの瑞御靈みづみたま

清きよき御名みなをば慕したはしめ

御神みかみと共にとも永久とこしへに

盡つきぬ生命いのちを長ながらへて

希望のぞみと榮光さかえと歡喜よろこびに

弱よわき身魂みたまを生いかしませ

心靜こころしづかに大前おほまへに

謹つつしみ敬うやまひ願ねぎまつる。

五

嚴いづの御靈みたまや瑞御靈みづみたま

月日つきひの如ごとき御光みひかりに

眩くらみし眼まなこを押おし開ひらき

神かみの御國みくにの有様ありさまを

吾われにも見みさせたまへかし

あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの稜威みいづを仰あふぐなり。

第一六六

一

瑞みづの御み靈たまの御み惠めぐみは 堅かき磐は常とき磐はに湧わき出いでて  
 流ながれも清きよきヨルダンの 水みづ永とこ久しへに現うつ世しよを  
 潤うるほし生いかし衰おとろへし 世よの民たみ草ぐさに眞ま清しみづ水づを  
 與あたへて千ち代よに榮さかえしめ 其その御み勳いさをを口くち々くちに  
 讚ほめつ稱たたへつ謳うたはしめよ。

二

神かみの惠めぐみのなかりせば 人ひとは此この世よに如い何かにして  
 生いきて榮さかゆる事ことを得えむ 瑞みづの御み靈たまの命いのちの主きみに

まつろひ奉り仕へつつ  
乞ひ願ぎまつる赤心を  
導きたまへと願ぎまつる。

弱き吾身に御力を  
諾ひまして天津御國まで

第一六七

一

瑞御靈世に賜ひたる皇神の  
御稜威畏く仰ぎ見るかな。

二

皇神すめかみは榮光さかえにみちて吾魂わがたまを  
生いかしたまはむ仰あふぎ敬うやまへ。

三

嚴いづ御靈みたま降くだしたまひし月神つきかみの  
瑞みづの御靈みたまの惠めぐみかしこし。

四

天津あまつ火つひを豊葦原とよあしはらの民草たみぐさに  
燃もやして希望のぞみを抱いだかせたまへ。

五



日ひの下もとに降くだらせたまふ生命いのちの主きみは  
日ひの出での島しまに輝かがやきたまふ。

第一六八

一

瑞御靈みづみたま嚴いづの清きよめにもらさじと  
導みちびきたまへ安やすき神國みくにへ。

二

朽くち果はてし心こころの家いへをたてなほし

安やすく御國みくにに住すまはせたまへ。

三

大前おほまへに平伏ひれふし悔くゆる吾罪わがつみの  
嘆なげきを赦ゆるし力ちからをたまへ。

四

いと弱よわき吾身わがみは神かみの御力みちからに  
生いかさるるより外ほかに道みちなし。

五

久方ひさかたの天あめにも地つちにも一柱ひとはしら  
吾等われらを生いかす神かみはまします。

第一六九

一

嚴いづの御聲みこゑを天地あめつちに響ひびかせたまへ角笛つのぶえを  
吹ふき立て世よ人にひと隈くまもなく平和やすきと榮光さかえと歡喜よろこびに  
充みてる神かみの代よ來きたること知しらしめたまへ惟神かむながら  
畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる。

二

千座ちくらの置戸おきどの贖罪あがなひに  
神かみの大道おほぢに從したがひて  
天津國あまつくになる故郷ふるさとへ  
神かみは汝なんぢと俱ともにあり。

洗あらはれたりし諸人もろびとよ  
喜よろこび勇いさみて久方ひさかたの  
疾とく疾とく急いそぎ立たち歸かへれ

三

誠まことの道みちの信徒まめひとよ  
畏かしこき罪つみの贖罪あがなひに  
笑わらひ榮さかへつ天津國あまつくに  
歸かへりて神かみに仕つかふべき  
仰あふぎ敬うやまへ諸人もろびとよ

いとも尊たふとき皇神すめかみの  
死ししたる御靈みたまは甦よみがへり

喜よろこび盡つきぬ故郷ふるさとに  
よき日はもはや近ちかづきぬ  
神かみは吾等われらの御親みおやなり。

四

ミロクの御代は近づきぬ  
千座の置戸の麻柱に  
清められたる人々よ  
喜び勇みて久方の  
天津御國の故郷へ  
疾く疾く急ぎ立ち歸れ  
神は汝と俱にあり

第一七〇

一

起てよ奮へよ勇めよ醒めよ  
神に受けたる吾等が精靈  
罪も汚れも恐れも知らず  
此世の欲を打ち捨てて  
夜なき嚴の故郷へ  
歸らせたまへと願ぎまつれ  
瑞の御靈は汝が爲めに  
天津御神の御言もて

此世に下りたまひけり。

二

元津御祖の皇神の  
右にまします瑞御靈  
世の罪人を神直日  
見直しまして吾名をも  
生命の文に記しまし  
永久の榮光と御恵を  
下したまふぞ尊けれ  
仰ぎゐやまへ諸人よ  
神は汝と俱にあり。

三

誠一つの言靈に  
天津御神の御心は  
いとも穩にやはらぎて  
赦しの御聲をかけたまふ

人は神の子神の宮  
父と母との皇神を  
慕ひまつりて恐れずに  
近づき仕へまつるべし  
神の御名は恵なり。

第一七一

一

何事も我に任せと宣りたまふ  
瑞の御靈のこころ尊き。

二

罪つみ深ふかき吾わが身みの幸さちも唯ただ神かみの  
御み靈たまの中なかにあるぞ畏かしこき。

三

黑くろ鐵がねのたゆまぬ堅かたき心こころをも  
碎くだく力ちからは神かみにまします。

四

何なに一ひとつ世よに功いさ績をしはなけれども  
岐き美みの力ちからに榮さかえゆくかな。

五



滅ほろびたる吾魂わがましひも甦よみがへる  
岐美きみの恵めぐみの露つゆに露つるほひて。

（大正一二・五・六 舊三・二一 於教主殿 加藤明子録）

第一八章 神人しんじん（一五六八）

第一七二

一

神素かむす蓋さ鳴のの大おほ神かみの

負おはせたまひし罪つみのかせ

千座ちくらの置戸おきどに清きよめられ

われ等らは日ひ々に榮さかゆなり。

二

力ちから空むなしき吾わが身み魂たま 神かみの任よさしの幸さちふかく  
醜しこのまがひに打うち勝かちて 常世とこよの御國みくにに昇のぼりゆく。

三

誠まこと一ひとつの麻柱あななひの 教をしへをかしくみうやまひて  
すめらみことおんの御た爲ために 盡つくす御國みくにの益ます良夫らをが  
伊寄いより集つどへる神かみの園その 綾あやの高天たかまに開ひらかれぬ。

四

たたへまつれよ我日の國の柱と坐ます日の御子の  
清き尊き大みいづ 神にぞ坐ます主師親を。

第一七三

一

まがのさへぎる山路をわけて 清き樂しき高天原の  
神國に昇り行く人は 神に愛され皇神を  
心の限り愛したる 誠一つの麻柱の  
いと美はしき身魂なり。

二

迷まよひつかれし心こころの暗やみを  
昇のぼる誠まことのまめひとは

苦くもなく破やぶりて神かみ國くにに  
眞理まことの燈ひかり火ともと俱ともにあり。

三

世よ人びとの生いのち命ちを左さ右いうする  
生いのち命ちの基もとの瑞みづ御み魂たま  
仰あふぎ敬あやまへ神かみの稜いづ威づ。

醜しこのつかさに打うちかつは  
清きよめの主きみの御み神ちか力からぞ

四

眞理まことと生いのち命ちと道みちなる主きみを  
身み魂たまは尊たふとき天あま津つく國くに  
常とこ世よの春はるを樂たのみつ

神かみの御み書ふみに誌しるされて  
神かみのまにまに榮さかゆべし。  
いよいよ明さやか白かに悟さとり得うる

第一七四

一

宇都のみやこにとこしへに 鎮まり坐ます日の御子の  
大御恵をかしこみて 國民こそり麻柱の  
まことを盡し身も魂も 捧げて御國を守れかし。

二

千座の置戸を負ひましし 命の神の御功績を  
かたじけなみて朝夕に 天津祝詞の太祝詞  
稱へ奉れよ神國人。

三

四方よもの國民くにたみことごとく 恵めぐみの冠かむりを與あたへむと  
 大御心おほみこころを朝夕あさゆふに 配くばらせたまふ日の御子みこの  
 仁愛きみの恩賴みたまのふゆをば 束つかのあひだも忘わするなく  
 眞心まじこころささげて仕つかへまつれ。

四

天津御祖あまつみおやの皇神すめかみは 聖きよき仁慈めぐみの日の御子みこを  
 豐葦原とよあしはらの國中くになかに 天あめの八重雲やへくもかきわけて  
 降くだし玉たまひし畏かしこさよ 朝あさな夕ゆふなに謹つつしみて  
 君きみの御光みかげを伏ふしをがみ 心こころの限かぎり身みの限かぎり  
 まこと一つひとつに仕つかふべし。

第一七五

一

天津御光かがやきて  
罪になやみし身魂をば

暗きこの世を守りまし

照させ玉ふぞかしこけれ。

二

天津御光うくるわれ  
盡きぬ恵みは心の空に

暗をも知らぬ身となりぬ

月日となりてかがやきぬ。

三

天津御光にあひそむき  
榮光の花のひらくべき

罪に溺れし人草の  
仰げ月日の御姿を。

第一七六

一

勞れなやめるはらからよ  
あらはれませる神園に  
おろして休めとくやすめ  
いとも長閑に聞ゆなり。

一日もはやく伊都御魂  
來りてつみの重荷をば  
神のまねきの御聲こそ

二



身魂みたまのえさに飢うゑかわく  
とくとく來きたれ神園かみそのへ  
御聲みこゑ長閑のどかに聞きこゆなり。

こころ貧まうしき人ひとの子こよ  
伊都いづの御魂みたまの招まねきます

三

常夜とこよのやみにさまよひて  
とくとく來きたれとくとく來きたれ  
まことの玉たまの御光みひかりを  
御聲みこゑのどかに聞きこゆなり。

苦くるしみなやめる人ひとの子こよ  
伊都いづの御魂みたまや麻柱あななひの  
照てらして汝なれを招まねきます

第一七七

一

日ひに夜よに慕したひたてまつる 瑞みづの御魂みたまのうるはしさ  
 三五さんごの月つきか花紅葉はなもみぢ なににたとへむすべもなし。

二

なやみ苦くるしみもだへたる 悲かなしき時ときの吾わがちから  
 仰あふぐもうれし神かみの稜威いづ 三五さんごの月つきか花紅葉はなもみぢ  
 なににたとへむすべもなし。

三

まこと一ひとつのあななひの 神かみのをしへにすがりなば

いや永とこしへ久くの御おン契ちぎり ほどくることもあらなみの  
水みづにも火ひにもおそれなし 悪あく魔まをふせぐ岐き美みは城しろ  
瑞みづの御み魂たまの御おン守まもり 身み魂たまもやすく榮さかゆべし。

四

伊い都づの御み魂たまのうるはしさ 身み魂たまは照てりて日ひか月つきか  
はた白しら梅うめか松まつみどり 世よにたとふべきものもなし。

第一七八

一

皇神すめかみのいづの御顔みかほをがむまで  
みあと慕したひて昇のぼり行ゆかなむ。

二

永久とこしへの生命いのちにすすむ道みちなれば  
いさみて行ゆかむ神かみの御前みまへに。

三

いと清きよき教をしへの友ともとあひともに  
勇いさみすすまむ神かみの御園みそのへ。

四

いかにして身魂みたまのつみを清きよめむと  
心こころ碎くだきぬ道みちしらぬうちは。

五

瑞みづの道みちここにありとて招まねき玉たまふ  
うれしき御みこ聲ゑ聞きくぞ樂たのしき。

六

村むら肝きもの心こころのままに大おほ前まへに  
言ことあげやせむわれ等ら神かみの子こは。

七

人の身の罪をいとはず受けたまふ  
瑞の御魂のこころうるはし。

八

豊なるめぐみの露にうるほひて  
笑みさかえけり朝な夕なに。

第一七九

一

神の御前にのがれ来て

諸の汚れも清まりぬ

八岐大蛇やしこ鬼に  
外に頼らむすべも無し。

勝たせたまひし瑞御靈

二

この世に生れて露ほども  
罪にけがれし吾身魂  
安きを賜ふ瑞御靈

嬉しみかしくみ祝ぎまつる。

いさをし立てしこともなき  
生命の清水に清めつつ

三

日に夜に神の御こころに  
にくみたまはずねもごろに  
榮光をたまふたとさよ。

そむきし吾等が身魂をば  
導きたすけ永久の

第一八〇

一

萬國よろしくくにのまことの君きみをさとりたる  
今日けふこそ吾われはすくはれにけり。

二

退しりぞきも進すすみもならぬ今いまの世よは  
神かみのみひとり力ちからなりけり。

三



大君おほきみの御命みことかしくみ謹つつしみて  
仕つかふは民たみのつとめなりけり。

四

日ひの御子みこの深ふかき恵めぐみをさとりなば  
怪けしき心こころもおこらざらまし。

第一八一

一

さざれ石いしの巖いはとならむ時ときもあり

五<sup>み</sup>六<sup>ろ</sup>七<sup>く</sup>の御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>の來<sup>き</sup>たらざらめや。

二

地<sup>ち</sup>の上<sup>うへ</sup>の凡<sup>すべ</sup>てのものは亡<sup>ほろ</sup>ぶとも  
神<sup>かみ</sup>と君<sup>きみ</sup>とのめぐみは盡<sup>つ</sup>きせじ。

三

月<sup>つき</sup>は落<sup>お</sup>ち日<sup>ひ</sup>はいや暗<sup>くら</sup>く隠<sup>かく</sup>るとも  
神<sup>かみ</sup>と君<sup>きみ</sup>とのめぐみは盡<sup>つ</sup>きせじ。

四

門かどを掃はき清きよめて待またむ日ひの御み子この  
空そらを照てらして來きたります日ひを。

(大正一二・五・六 舊三・二一 出口鮮月録)

第一章 神惠しんけい〔一五六九〕

第一八二

一

久方ひさかたの天津御國あまつみくににまごころの

寶積たからつむより越こゆる幸さちなし。

二

言ことの葉はのあらむ限かぎりをつくす共とも  
稱たたへつくせじ神かみのめぐみは。

三

瑞御魂命みづみたまいのちの主きみの幸さきはひに  
こころうれしき身みとはなりけり。

四

わざはひの限かぎり知しられずおこる世よに  
いと安やすらけく榮さかゆるまめひと。

五

よろこびを朝あさな夕ゆふなにうたひつつ  
神かみのめぐみに安やす世よをわたらふ。

六

皇すめ神かみの命いのちの言こと靈たま世よに廣ひろく  
宣のべ傳つたへゆく神かみの宣み教師つかひ。

第一八三

一

生うまれてゆしらずしらずにおかしたる  
わが重おもき罪つみ赦ゆるします貴き美み。

二

現うつしよ世しよのなぎさ放はなれて進すすみゆく  
命いのちの御み舟ふねのいさましきかな。

三

ときの間に彼方の岸に進むなり  
恵の風を受けし白帆は。

四

永久の天津御國の花園も  
早ちかづきしここちこそすれ。

五

和田の原漕ぎゆく舟を弄ぶ  
荒き浪風和ぎし御言葉。

六

浪風なみかぜを只ただ一言ひとことにしづめたる  
瑞みづの御魂みたまのいさをたふとき。

七

瑞みづ御魂みたま弘誓ぐぜいの船ふねに棹ささして  
諸もの罪人つみびと御國みくにへおくる。

八

村肝むらぎものこころ静しづかにうたひつつ  
天津あまつ御國みくにへ昇のぼるうれしさ。



第一八四

一

淵ふちの如ごと深ふかきけがれに沈しづみたる  
魂たま清きよめむと漕こぎ來くる神み船ふね。

二

雨あめの日ひも風かぜ吹ふく夜よ半はも皇すめ神かみの  
弘ぐ誓ぜいの御み船ふねいとど安やすけし。

三

一人ひとりだも滅ほろびの淵ふちに沈しづめじと  
命いのちの船ふねを見み立てたまひつ。

四

皇神すめかみの道みちにさかひし人ひとの子こを  
なだめすかして大道おほぢを示しめさす。

五

伊都御魂いづみたまのぞみ豊ゆたかに人ひとの子この  
昇のぼり來きたるを待まちたまひつ。

六

世よの憂うきになやみ苦くるしむ涙なみだより  
猶なほさら更さらふかくなげかせたまふ。

七

世よのなさけ夢ゆめにも知しらぬ醜しこびと人の  
こころにさへも宿やどらせたまふ。

八

母ははとます瑞みづの御魂みたまのおもかげを  
ながむるたびに涙なみだこぼるる。

第一八五

一

常とこ暗やみの世よに住すむ人ひとも皇すめ神かみの  
光ひかりにこころ照てらされ榮さかゆる。

二

偽いつはりの浮うき世よの夢ゆめも今いまさめて  
樂たのしき身み魂たまと復よみがへ活がりたり。

三

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>の露<sup>つゆ</sup>おき足<sup>た</sup>らし世<sup>よ</sup>を生<sup>い</sup>かす  
神<sup>かみ</sup>の息<sup>いき</sup>より吹<sup>ふ</sup>く天津<sup>あまつ</sup>風<sup>かぜ</sup>。

四

天津<sup>あまつ</sup>風<sup>かぜ</sup>に心<sup>こころ</sup>の塵<sup>ちり</sup>もはらはれて  
清<sup>きよ</sup>き身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>とよみがへるなり。

五

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の造<sup>つく</sup>り玉<sup>たま</sup>ひし大<sup>おほ</sup>道<sup>みち</sup>を  
知<sup>し</sup>らずに邪<sup>よこ</sup>さの道<sup>みち</sup>を行<sup>ゆ</sup>くあり。

六

目醒めたる朝の空に照りわたる  
日影はいとも麗しく見ゆ。

第一八六

一

めぐみも深き五十鈴川  
罪やけがれをよく清め  
誠一つに祈りなば  
おのが身魂に降るべし。

溢るる泉に許々多久の  
皇大神の大前に  
歡喜の雨露は忽ちに

二

罪つみやけがれを根ね底そこより  
洗あらひ清きよむる五い十す鈴ず川がは  
流ながれに身み魂たまひたしつづ  
天あま津つ御み國くにの神かみ國くにに  
昇のぼらせ玉たまへとひたすらに  
いづの清きよめを願ねぎまつれ  
仁じん慈じに充みてる大おほ神かみは  
かならずゆるし賜たまふべし。

三

萬よろづの國くにの人ひと々びとの身み魂たまの清きよめ濟すむまでは  
絶たゆる事ことなき五い十す鈴ず川がは  
生いきたる人ひとも死し人びとも  
皆みな押おし竝しなべて限かぎりなき  
惠めぐみを受けむ神かみの國くに。

第一八七

一

わが罪つみを悔くゆる心こころは皇神すめかみの  
依よさし玉たまひし御賜みたまものなり。

二

ふるさとの天津御國あまつみくには永久とこしへに  
おのが靈魂みたまの住處すみかなりけり。

三

人々ひとびとの暗やみに犯をかせし罪つみとがを  
悟さとる御神みかみの大前おほまへにのれ。



四

皇神すめかみのいづの御前みまへにぬかづきて  
犯をかせし罪つみを宣のれよ洩もれなく。

五

瑞御魂みづみたま鎮しづまりゐます神かみの園そのに  
すすみておのが身魂みたまを清きよめよ。

六

罪つみの子こを憐あはれみたまふ御涙おんなみだの  
ながれて由良ゆらの川かはとなりけむ。

七

まごころに一日も早く復活り  
神と君との御楯とぞなれ。

八

三五の神の大道は現世と  
かくり世悉照す御燈明。

第一八八

一

神は門の戸打叩き  
外面に立ちて開けよと  
聲も涼しく宣り玉ふ  
罪に曇りし人々は  
珍の御聲を畏みて  
悪魔の如く忌み嫌ひ  
ますます門の戸堅く締め  
拒みまつるぞ嘆てけれ。

二

廣き尊き皇神の  
大御恵ははかられず  
愛の涙をたたへつつ  
日毎夜毎に人々の  
門戸を訪ひ玉へども  
道に背きし醜魂は  
畏れて閉す門の口  
益々闇に沈み行く  
身の果てこそは憐れなれ。

三

命いのちの神かみの訪おとひを 力ちから限かぎりに相あひ拒こばむ  
生いのち命いのち知しらずの愚おろかもの 生いのち命いのちの主きみは朝あさ夕ゆふに  
門かどの戸と開あけと宣のり玉たまふ 心こころを清きよめて一ひと時ときも  
早はやく迎むかへ入いれ奉まつれ 永と遠はの生いのち命いのちの基もとなる  
此この世よを生いかす神かみの御み子こよ。

## 第一八九

—

定さだめなき浮うき世よの風かぜに誘さそはれて  
世よを去さる時ときの神かみは力ちからぞ。

二

或<sup>ある</sup>は散<sup>ち</sup>り或<sup>あるひ</sup>は残<sup>のこ</sup>り現<sup>うつしよ</sup>世<sup>よ</sup>の  
嵐<sup>あらし</sup>を忍<sup>しの</sup>ぶ人<sup>ひと</sup>の身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>。

三

世<sup>よ</sup>にありて犯<sup>をか</sup>せし罪<sup>つみ</sup>の捨<sup>す</sup>て所<sup>どころ</sup>  
底<sup>そこ</sup>なき亡<sup>ほろ</sup>びの淵<sup>ふち</sup>とこそ知<sup>し</sup>れ

四

吾<sup>わが</sup>魂<sup>たま</sup>も罪<sup>つみ</sup>諸<sup>もろとも</sup>共に亡<sup>ほろ</sup>び行<sup>ゆ</sup>く  
酬<sup>むく</sup>いの淵<sup>ふち</sup>ぞ恐<sup>おそ</sup>ろしきかな。

五

山<sup>やま</sup>風<sup>かぜ</sup>の明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>をも待<sup>ま</sup>たず吹<sup>ふ</sup>くならば  
吾<sup>わが</sup>魂<sup>たましひ</sup>も如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>になるらむ。

六

うかれ行<sup>ゆ</sup>く吾<sup>わが</sup>魂<sup>たましひ</sup>を導<sup>みちび</sup>きて  
生<sup>い</sup>かささせ玉<sup>たま</sup>へ瑞<sup>みづ</sup>の大神<sup>おほかみ</sup>。

七

散<sup>ち</sup>りもせず菱<sup>しほ</sup>みもやらで咲<sup>さ</sup>き匂<sup>にお</sup>ふ  
常<sup>とこ</sup>世<sup>よ</sup>の春<sup>はる</sup>に會<sup>あ</sup>ふぞ嬉<sup>うれ</sup>しき。

八

咲さきにほふみその御園の花はなをたづねむと  
眞まごころ心つく盡ひとせみ人このたち御子達。  
。

第一九〇

一

高たか天原あまはらは開ひらけたり

命いのちの光ひかりは輝かがやきぬ。  
。

二

高天原の御光は  
世人の爲めに開かれぬ  
青垣山を繞らせる  
下津岩根の靈場に。

三

人の悉望むがままに  
高天原の花苑に  
喜び迎へ入れ玉ふ  
瑞の御魂の御恵  
慎み敬ひ奉れ  
高天原の聖場が  
下津岩根に開かれて  
御光四方に輝けば  
群がる仇も恐れなく  
誠一つに進むべし。

四

八十の曲靈の魔軍に  
向つて打出す言靈の



光ひかりに言こと向むけ和やはしつつつ  
功いさをし績したつる目め出で度たさよ  
その功いさをし績しを愛めで玉たまひ  
充みてる黄こがね金かねの冠かんむりを  
あゝ惟かむながらかむながら神かむながら々々  
勝かきどき鬨あげて御おんまへ前へに  
嚴いづの御みたま魂たまや瑞みづみたま御みたま魂たま  
榮さかえ光と平やすき安と歡よろこび喜に  
必かならず與あたへ玉たまふべし  
恩みたまのふゆ賴かしこぞ畏かしこけれ。

第一九一

一

永とこしへ久へに消きえぬ光ひかりは瑞みづの神かみ  
千ちく座らの上うへの輝ひかりなりけり。

二

憊<sup>しの</sup>ぶだにいとも畏<sup>かしこ</sup>き主<sup>きみ</sup>の恵<sup>めぐみ</sup>  
など人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>の來<sup>きた</sup>り受<sup>う</sup>けざる。

三

類<sup>たぐひ</sup>なき主<sup>きみ</sup>の恵<sup>めぐみ</sup>は永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に  
月<sup>つき</sup>日<sup>ひ</sup>墜<sup>お</sup>つとも變<sup>かは</sup>らざらまし。

四

いと高<sup>たか</sup>き主<sup>きみ</sup>の恵<sup>めぐみ</sup>は大<sup>おほ</sup>空<sup>そら</sup>の  
神<sup>かみ</sup>の寶<sup>みくら</sup>座<sup>ざ</sup>の榮<sup>さか</sup>えなりけり。

五

千<sup>ち</sup>早<sup>はや</sup>振<sup>ふ</sup>る神<sup>かみ</sup>は更<sup>さら</sup>なり御<sup>み</sup>代<sup>よ</sup>知<sup>し</sup>らす  
我<sup>わが</sup>日<sup>ひ</sup>の御<sup>み</sup>子<sup>こ</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>忘<sup>わす</sup>れそ。

（大正一二・五・八 舊三・二三 北村隆光録）

第二〇章 神郷しんきやう（一五七〇）

第一九二

一

皇神すめかみの早くはや來れきたと召しめ玉ふたま  
愛あいの御聲みこゑを恐おそれ逃にげ行ゆく。

二

永久とこしへに榮さかえ目め出で度たき故郷ふるさとに  
生いかさむとする神かみぞ尊たふとき。

三

現世うつしよの業わざみな終をへて故郷ふるさとに  
早はやく歸かへれと召めし玉たまふ主きみ。

四

八衢やちまたに行きゆ惱なやみたる旅人たびびとの  
愛あいの御聲みこゑに耳みみをすまさむ。

五

皇神すめがみの嚴いづの御門みかどに入るいならば  
休やすませ玉たまはむ重荷おもにおろして。

六

御惠みめぐみの充みち溢あふれたる吾神わががみは  
罪つみある魂たまも招まねき玉たまひぬ。

七

罪科つみとがを身みに負おひしまま故郷ふるさとに  
歸かへる者ものさへ恵めぐませ玉たまふ。

八

我神わが かみの恵めぐみの奥おくは限かぎりなし  
善よしと惡あしとにとらはれ玉たまはず。

九

我神わが かみの永とこしへ久まに在ます御殿みとのこそ  
いとも樂たのしき珍うづの御舍みあらか。

とく<sup>こ</sup>来よと御門<sup>みかど</sup>を開<sup>ひら</sup>き待<sup>ま</sup>ち玉<sup>たま</sup>ふ  
瑞<sup>みづ</sup>の御魂<sup>みたま</sup>の御前<sup>みまへ</sup>にすがれ。

—  
—

いと清<sup>きよ</sup>くやさしき御聲<sup>みこゑ</sup>聞<sup>き</sup>く毎<sup>ごと</sup>に  
心<sup>こころ</sup>の惱<sup>なや</sup>みうち忘<sup>わす</sup>れける。

### 第一九三

—

麻柱<sup>あななひ</sup>の命<sup>いのち</sup>の道<sup>みち</sup>を疑<sup>うたが</sup>ふな

愛あいの御神みかみの教をしへなりせば。

二

とく來きたれ罪つみも穢けがれも打捨うちすてて  
生命いのちを得えよと招まねかせ玉たまふ。

三

常世とこよ行く暗やみの中なかにも我神わがかみの  
深ふかき惠めぐみは輝かがやきわたる。

四



八千座の置戸を負ひし我神の  
愛と力をたのめ罪人。

五

我神を措いて誰をか頼まむや  
罪を償ふ神しなれば。

六

神の子と生れ玉ひし瑞御魂  
岐美より外に世に力なし。

第一九四

一

疾とく來こよと玉たまの御み手てをばさし伸のべて  
暗やみ路ぢに迷まよふ魂たまを招おぎます。

二

招まねかれて吾わが故ふる郷さとに歸かへる時とき  
近ちかき審さば判きを見み守もらせ玉たまふ。

三

八衢やちまたの嚴いづの審判さばきを和なごめむと  
誠まことの道みちを示しめし玉たまひぬ。

四

身みも魂たまも主きみに任まかして進すすみ行ゆけ  
醜しこの嵐あらしに遭あふ例ためしなし。

第一九五

一

我わが前まへに早はやく憩いこへと宣のらす聲こゑ

疲<sup>つか</sup>れし身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の耳<sup>みみ</sup>にこそ入<sup>い</sup>れ。

二

數<sup>かず</sup>ならぬ吾<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>をも憐<sup>あはれ</sup>みて  
守<sup>まも</sup>らせ玉<sup>たま</sup>ふ主<sup>きみ</sup>ぞ畏<sup>かしこ</sup>し。

三

八<sup>や</sup>束<sup>つか</sup>髻<sup>ひげ</sup>生<sup>な</sup>血<sup>ま</sup>と共<sup>とも</sup>に抜<sup>ぬ</sup>かれたる  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>は天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>の岐<sup>き</sup>美<sup>み</sup>。

四

八洲河の誓約になれる眞清水は  
罪てふ罪を洗ひ清むる。

五

由良川の流に立ちて溺れ来る  
世人の罪を洗ひます主。

六

天地はよし崩るるも我主の  
御側は安し嚴の御守護。

第一九六

一

急いそぎて來きたれ諸もろ人びとよ

五み六ろ七くの御み代よは近ちかづきぬ。

二

暗やみと惱なやみに取とり圍かこまれて

亡ほろびぬ前さきに早はや來きたれ。

三

天あま津つ御み空そらは搔かき曇くもり  
いと凄すひまじく襲おそひ來くる

氷ひ雨さめは降ふりて風かぜの音おと  
神かみは吾われ等らの力ちからなり。

四

死しの波なみ高たかく打うち寄よせて  
暫しばしの間うちに恐おそろしや  
神かみの使つかひの導みちびくままに

やがて焰ほのほは降ふり來きたる  
背そむきし國くには亡ほろび行ゆく  
身み魂たま任まかせて走はしり行ゆけ。

五

後あとふり返かへり形かたちある  
急いそぎに急いそげよ諸もろびと人とよ

寶たからに心こころ迷まよはさず  
此この世よの亡ほろぶる時とき來くれば。

第一九七

一

海<sup>うみ</sup>の果<sup>は</sup>て山<sup>やま</sup>の奥<sup>おく</sup>にも吾<sup>わが</sup>魂<sup>たま</sup>の  
休<sup>やす</sup>らひぬべき花<sup>はな</sup>園<sup>ぞの</sup>はなし。

二

嚴<sup>いづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の現<sup>あら</sup>はれし  
聖<sup>せい</sup>地<sup>ち</sup>ぞ千<sup>ち</sup>代<sup>よ</sup>の住<sup>す</sup>所<sup>みか</sup>なりけり。

三

浮<sup>う</sup>き沈<sup>しづ</sup>みしげき此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>に何<sup>なに</sup>ものも  
頼<sup>たの</sup>みとすべきものはあらしな。



四

只ただ神かみにすがりてまことつく誠盡まことつくすより  
吾わが身みをすく救すくふちから力ちからだになしになし。

五

死しするとも魂たまはかなら必かならずかくりよ靈界かくりよに  
ありみかみてとも御神みかみととも共ともにさかゆ榮行さかゆく。

六

空うつせみ蝉せみのみ身みはながよながしたも永ながくたも保たもつともとも  
靈みたま魂たまのいのち生いのち命いのちなひときひと人ひともありあり。

七

年とし老おいず死まる事ことなき神かみの國くには  
永と遠はの生いの命ちの住す所みかなりけり。

八

罪つみの身みは朝あしたの露つゆと消きゆるとも  
魂たまは残のこりて永と遠はに苦くるしむ。

九

永とこ久しへの生いの命ちも愛あいも我わが神かみの  
抱いだかせ玉たまふ力ちからなりけり。

第一九八

一

明日あすの日ひも知しれぬ果は敢かなき人ひとの身みは  
急いそぎて來きたれ神かみの御みまへ前に。  
急いそぎて來きたれ神かみの御みまへ前に。

二

明日あすの日ひを思おもひまはせば安やす々やすと  
世よを渡わたるべき心こころ起おこらじ。  
世よを渡わたるべき心こころ起おこらじ。

三

束つかの間まも死しの魔まはあたり附つけ狙ねらふ  
とくとくとく來きたれ神かみの教をしへに。

四

大神おほかみの御許みもとに早はやく立歸たちかへれ  
露つゆの生命いのちの消きえ失うせぬ間まに。

五

我主わがきみの惠幸めぐみゆきはひはや受うけよ  
思おもはぬ時ときに亡ほろび來きたらむ。

第一九九

一

門かどの戸とを打叩うちたたきつつ我わが神かみは  
心こころ静しじゆかに訪おもひ玉たまふ。

二

幾いく度たびも表おもてに立たちて御み榮さかえの  
珍うづの御み聲こゑを放はなち玉たまひぬ。

三

仇<sup>あだ</sup>さへも生<sup>い</sup>かさむ爲<sup>ため</sup>に朝夕<sup>あさゆふ</sup>に  
門<sup>かど</sup>に立<sup>た</sup>たせる主<sup>きみ</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>き。

四

吾<sup>わが</sup>魂<sup>たま</sup>の力<sup>ちから</sup>ともなり友<sup>とも</sup>となる  
命<sup>いのち</sup>の主<sup>きみ</sup>を慕<sup>した</sup>ひまつれよ。

五

いろいろと心<sup>こころ</sup>の空<sup>そら</sup>を包<sup>つつ</sup>みたる  
迷<sup>まよ</sup>ひの雲<sup>くも</sup>を晴<sup>は</sup>らす我<sup>わが</sup>主<sup>きみ</sup>。

六

許々こ多た久くの罪つみの寢所ふしどを掃はき清きよめ  
珍うづの御園みそのと開ひらかせ玉たまふ。

七

身みも魂たまも命いのちの主きみに捧ささげつつ  
慕したふ心こころは生いのち命いのちなりけり。

八

永とこ久しへの生いのち命いのちの基もととあれませし  
清きよめの主きみを夢ゆめな忘わすれそ。

第二〇〇

一

久<sup>ひさ</sup>方<sup>かた</sup>の天<sup>あま</sup>津<sup>つつ</sup>使<sup>かひ</sup>の讚<sup>ほ</sup>め稱<sup>た</sup>ふ  
榮<sup>さ</sup>光<sup>かえ</sup>の主<sup>きみ</sup>を壽<sup>ことほ</sup>ぎまつれ。

二

暗<sup>やみ</sup>を晴<sup>は</sup>らし朝<sup>あさ</sup>日<sup>ひ</sup>の如<sup>ごと</sup>く輝<sup>かが</sup>ける  
光<sup>ひか</sup>りの主<sup>きみ</sup>の御<sup>み</sup>後<sup>あと</sup>慕<sup>した</sup>へよ。

三



吾<sup>わが</sup>罪<sup>つみ</sup>も 歎<sup>なげ</sup>きも 拂<sup>はら</sup>ふ 瑞<sup>みづ</sup>御<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>  
臨<sup>のぞ</sup>ませ 玉<sup>たま</sup>へと 祈<sup>いの</sup>れ 信<sup>まめ</sup>徒<sup>ひと</sup>。

四

八<sup>や</sup>洲<sup>すか</sup>河<sup>は</sup>の 誓<sup>うけ</sup>約<sup>ひ</sup>の 水<sup>みづ</sup>は 吾<sup>わが</sup>罪<sup>つみ</sup>を  
被<sup>はら</sup>ひ 清<sup>きよ</sup>むる 瑞<sup>みづ</sup>御<sup>みたま</sup>魂<sup>たま</sup>なる。

五

千<sup>ち</sup>萬<sup>よろづ</sup>の 罪<sup>つみ</sup>を 一<sup>ひと</sup>つに 引<sup>ひ</sup>受<sup>き</sup>けて  
さすらひ 玉<sup>たま</sup>ふ 神<sup>かみ</sup>ぞ 尊<sup>たふと</sup>し。

第二〇一

一

おも 思ひまはせば恐ろしや  
 いづ 嚴の御魂や瑞御魂  
 いのち 命の神の御許を 遠く離れて踏み迷ひ  
 ちかみ 空しき道を樂しみし  
 ゆめ あとなき夢の後を追ひ  
 かな 大橋越えてまだ先へ  
 けふ 今日の吾身ぞ悲しけれ  
 かな 皆慢心の罪ぞかし  
 ちかみ 行衛分らぬ後戻り  
 ちかみ 御前に祈り奉る。

二

珍うづつの聖地せいちを後あとにして

習ならはぬ業わざの牧場まきば守もり

あしなふへ 朝夕の起臥に よくふり返り世の中を  
こころしつ 心鎮めて眺むれば 人の情の薄衣  
みし 身に沁む浮世の荒風を 凌ぐ術なき苦しさを  
ゆる 赦させ玉へ惟神 悔い改めて大前に  
つし 慎み敬ひ願ぎ奉る。

三

あや 綾の聖地を打捨てて 後白雲の國のはて  
めく さまよひ巡りて村肝の 心を痛め魂曇り  
やぶ 破れし袂におく露も 神の恵みを偲ばせて  
むみやう 無明の闇も明けぬべし 一日も早く故郷の  
あや 綾の聖地に安らかに かへさせ玉へと天地に  
ひれふ 平伏し祈り奉れ あゝ惟神々々

御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>幸<sup>さち</sup>はひましませよ。

(大正一二・五・八 舊三・二三 北村隆光録)

第五篇 春<sup>しゅん</sup>陽<sup>やう</sup>自<sup>じ</sup>來<sup>らい</sup>

第二章 神<sup>しん</sup>花<sup>くわ</sup>〔一五七一〕

第二〇二

掟おきてを忘わすれ村むら肝きもの 心こころのままに世よを過すごす  
 汚きたなき身み魂たまとなりにけり 恵めぐみの深ふかき父ちち母ははに  
 逆さからひ背そむく子この如ごとく 誠まことの神かみの御み恵めぐみを  
 忘わすれてもとの故ふる郷さとの 永と遠はの住す所みかを捨すてにけり  
 あゝ惟かむながらかむながら 今いま悔くいまつる吾わが罪つみを  
 赦ゆるさせ玉たまへと願ねぎまつる。

虎とら狼ほかや獅し子し熊くまの 咆ほえ猛たけるなる岩いは山やまや  
 荒あ野らのを洩もれず相あひ尋たづね 飢う渴かわきたる人ひとの子こを  
 劬いたはり抱いだきて大おほ神かみの 永と遠はにまします神かみ國くにへ

進すすませ玉たまふ瑞御魂みづみたま  
命いのちの守まもりは外ほかになし。

仰あふぎ敬つやまへ只管ひたすらに

三

パリサイ人じんが吾罪わがつみを  
その身みの安やすきを祈いのる折をり  
千々ちぢに心こころを碎くだきつつ  
仇あだなす身魂みたまを守まもります  
深ふかきを思おもひ明あきらめて  
神かみの愛あいには限かぎりなし

教をしへの主きみに負おはせつつ

憐あはれみ給たまひて瑞御魂みづみたま  
平安やすきと榮光さかえを與あたへむと  
その御惠みめぐみは海うみよりも  
夢ゆめにも忘わする事ことなかれ  
人ひとの愛あいには限かぎりあり。

四

嚴いづの御魂みたまの御教みをしへを  
百ももの艱難なやみを打忘うちわすれ  
樂たのしく清きよく送おくるべし  
愛あいと力ちからと充みちませる  
あななひまつれよ人ひとの子こよ 神かみは汝なんぢと俱ともにあり  
神かみは無むげん限ちからの力ちからなり あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々  
御靈みたま幸さちひましませよ。

第二〇三

一

皇神すめかみの御赦みゆるしなくば現世うつしよの

身みも魂たましひも亡ほろび行ゆくべし。

二

此この儘ままに吾わが魂たましひを此この儘ままに  
救すくはせ玉たまへ神かみの御み國くにに。

三

罪つみばかり身みに重かさなりて功いさ績をしは  
なけれど神かみは恵めぐませ給たまふ。

四



御<sup>み</sup>惠<sup>めぐ</sup>みを得<sup>う</sup>べき身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>にあらねども  
命<sup>いのち</sup>を玉<sup>たま</sup>へ神<sup>かみ</sup>の御<sup>おん</sup>名<sup>な</sup>に。

五

大<sup>おほ</sup>神<sup>みわ</sup>業<sup>ぎ</sup>仕<sup>つか</sup>へまつらむ身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>ぞと  
守<sup>まも</sup>らせ玉<sup>たま</sup>へ瑞<sup>みづ</sup>の<sup>おほ</sup>大<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>。

第二〇四

一

百<sup>もも</sup>の<sup>な</sup>艱<sup>や</sup>難<sup>み</sup>に<sup>おどろ</sup>驚<sup>おどろ</sup>きて

瑞<sup>みづ</sup>の<sup>み</sup>御<sup>たま</sup>靈<sup>たま</sup>を<sup>す</sup>捨<sup>す</sup>て去<sup>さ</sup>りし

醜しこの身魂みたまの行末ゆくすゑは 浮うかぶ瀬せのなき涙川なみだがは  
御旨みむねをなみし御恵みめぐみを 拒こばみて逃にぐる人草ひとぐさの  
いとかたくなな魂たましひを 黄金こがねの鎚つちを打振うちふるひ  
碎くだかせ玉たまへと願ねぎまつる 頑迷不靈ぐわんめいふれいの魂たましひを  
黄金こがねの鎚つちもて打碎うちくだき 平安やすきと榮光さかえに充みち足たらふ  
神かみの言葉ことばに従したがひて 五み六ろ七くの御代みよの神業かむわざに  
身みもたなしらに仕つかへ行ゆく 珍うづの柱はしらとなさしめよ。

二

御目みめに溢あふるる涙なみだもて 知しらずに犯をかせし罪つみなれば  
直日なほひに見直みなほし宣のり直なほし 許ゆるさせ給たまへ嚴いづの神かみ  
瑞みづの御靈みたまの麻柱あななひに。

三

榮光さかえつきせぬ天津國あまつくに  
いと平たひらけく安やすらけく

光ひかりの園そのの訪おとつれを  
知しらしめ玉たまへと願ねぎ奉まつる。

第二〇五

一

許こ々こ多た久くの罪つみを悔くいたる吾魂わがたまを  
赦ゆるさせたまへ嚴いづの大神おほかみ。

二

朝夕あさゆふに罪つみをば詫わぶる吾わが乞こひを  
憐あはれみたまへ瑞みづの大神おほかみ。

三

身みの罪つみの重おもきに朝夕あさゆふ咽むせびつつ  
不たえぬ断いの祈いのりを赦ゆるさせたまへ。

四

吾わが罪つみの只ただ一ひとつだに贖あがなはむ  
術すべなき身みをば憐あはれみたまへ。

五

罪<sup>つ</sup>穢<sup>み</sup>が<sup>け</sup>れ<sup>ほ</sup>ろ<sup>ろ</sup>び<sup>の</sup>道<sup>みち</sup>に<sup>と</sup>遠<sup>ほ</sup>ざ<sup>か</sup>り  
神<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>に<sup>の</sup>上<sup>ほ</sup>る<sup>魂</sup>ぞ<sup>か</sup>畏<sup>こ</sup>き。

第二〇六

一

御<sup>み</sup>心<sup>こころ</sup>に<sup>そ</sup>背<sup>む</sup>き<sup>ま</sup>つ<sup>り</sup>し<sup>わ</sup>吾<sup>が</sup>魂<sup>たま</sup>の  
進<sup>すす</sup>み<sup>う</sup>得<sup>べ</sup>き<sup>や</sup>神<sup>かみ</sup>の<sup>お</sup>大<sup>ほ</sup>前<sup>まへ</sup>。

二

罪<sup>つ</sup>科<sup>とが</sup>に<sup>つ</sup>包<sup>つ</sup>ま<sup>れ</sup>亡<sup>ほ</sup>ぶ<sup>わ</sup>吾<sup>が</sup>魂<sup>たま</sup>を

甦よみがへらせよ瑞みづの大神おほかみ。

三

蟲族むしけらも命いのちを玉たまふ皇神すめかみよ  
罪つみの此身このみを赦ゆるさせたまへ。

四

憊しのぶだにいと恐おそろしき吾罪わがつみを  
赦ゆるすは主きみの力ちからなるかも。

五

戦をのきて御前みまへに平伏ひれふす罪つみの身みも  
希望のぞみを賜たまふ瑞みづの大神おほかみ。

第二〇七

一

咽むせび泣なく悔悟くわいごの涙なみだを乾かわかせて  
身みを照てらします神かみぞ尊たふとき。

二

御惠みめぐみの涙なみだの川かはに身みを浸ひたし

世よを清きよめ行ゆく主きみぞ尊たふとき。

三

如い何かにせむ人ひとの心こころの薄うす衣ころも  
浮うきよ世よの風かぜを凌しのぐ術すべなし。

四

破やぶれたる衣ころもの袖そでを翻ひるがへし  
命いのちを賜たまふ時ときは來きにけり。

五



飢渴うまかわき亡ほろび行ゆく身みを憐あはれみて  
生命いのちの清水しみづ與あたへ給たまひぬ。

六

仇人あだびとの手てにも足あしにも口くちづけて  
親したしみたまふ瑞みづの大神おほかみ。

七

渡わたされて獄舍ひとやの中なかに苦くるしみつ  
世人よびとを惠めぐむ嚴いづの大神おほかみ。

八

夜深く肌も寒けき獄舎にて  
いと暖かき道宣り給ふ。

九

梅の花一度に開く時來ぬと  
叫び給ひし御祖ぞ畏き。

一〇

許々多久の艱難苦しみ悟ります  
教祖の教尊し。

一一

死しのなや艱なやみよ黄泉よみのくる苦くるしみことごと悉ことごとく  
被はらひたま給たまひぬ生いく言こと靈たまに。

第二〇八

一

思おもひまはせばまはす程ほど  
知しらずにとも友とものい諫い止さめをば  
眞ま心ごころこめての祈いのりをば  
御み旨むねにそむ背そむきまつりたる  
友とものこころ心こころのあり有あり難がたき。

吾わが身みのふか深ふかきつみ罪つみ科とがを  
心こころになみし嘲あざりて  
笑わらひの罵ののりすめ皇すめ神かみの  
吾わが身みのつみ罪つみぞおそ恐おそろしき

二

雲霧深く包みたる  
心の闇にさまよひて

吾魂は曇りはて  
嚴の光に遠ざかり

知らず識らずに百の罪  
犯せし事も咎めずに

玉の御手をばさし伸べて  
明きに導き給ひたる

大御恵ぞ有難き  
道の光の畏けれ。

三

罪の淵瀨に陥りて  
とまる瀨もなく漂よひし

孱弱き身魂を皇神は  
憐れみまして玉の手を

のべて命を玉ひけり  
いや永久の歡喜と

平安を來す嬉しさは  
天地に譬ふるものもなし

あゝ惟神々々かむながらかむながら

神の恵みの有難き。かみ めぐ ありがた

第二〇九

一

涙は雨と降り濺ぎなみだ あめ ふり そそ

雷空に轟きていかづちぞら とどろ

水瀨は溢れ住家をばみなせ あふ すみか

吾身と共に流すともわがみ とも なが

赦されまじき吾罪をゆる たま ありがた わがつみ

千座の置戸の御徳にちくら おきど おんとく

洗はせ玉ふ有難さあら たま ありがた

慎み感謝し奉る。つつし かんしゃ たてまつ

二

心を千々に砕きつつ  
朝な夕なによき業を  
勵みて神に仕ふとも  
大御恵の萬分一  
如何で酬いむ惟神  
愛の御神の御手により  
罪を洗はれ久方の  
神の御國に進むより  
頼りも力もなかるべし  
如何に尊き御教を  
朝な夕なに聞くとても  
誠の行ひなき時は  
如何でか清めむ罪の身を。

第二一〇

一

誠の神の御旨をば

悟りも得せず嚴かな

奇しき神示を疑ひて  
その愚さを今となり  
漸く悟り悔いにけり

吾身の力を頼みてし  
神の光に照されて  
許させ玉へ嚴御魂。

二

神より受けし身を忘れ  
貪り慕ひし恐ろしさ  
誠の寶の所在をば  
あゝ有難し神の教。

やがて朽つべき寶をば  
神の光に照されて  
覺りて悔ゆる身となりぬ

三

天津御空の神國に

いや永久に咲き匂ふ

恵めぐみの花はなを他よそにして  
物もの言いふ花はなの色いろや香かに  
神かみの光ひかりに照てらされて  
あゝ惟かむながらかむながら神かみ々々  
いとたふとも尊たふとき神かみの教のり。  
今いまは悟さとりぬ且かつ悔くいぬ  
咲さけば忽たちまち散ちり失うする  
醉よひくる狂くるひたる恐おそろしさ

第二一一

一

限かぎりなき神かみの恵めぐみはありとても  
赦ゆるされまじと歎なげきてしかな。

二



皇神すめかみの御稜威みいづをなみし且かつあざみ  
背そむきまつりし心忌こころゆ々ゆしき。

三

玉たまの手てを擴ひろげて主きみは待まちたまふ  
いかに捨すつべき迷まよはで來こよと。

四

憐あはれみの涙なみだに宿やどる月影つきかげは  
瑞みづの御靈みたまの姿すがたなるらむ。

五

濁江にごりえの底そこにも月つきは御姿みすがたを  
映うつして暗やみを照てらし玉たまひぬ。

（大正一二・五・八 舊三・二三 北村隆光録）

第二章 神日しんじつ（一五七二）

第二二二

一

功いさをなき御靈みたまを千座ちくらに贖あがなひて

洗あらひたまひぬ天津御國あまつみくにに。

二

罪咎つみとがの汚けがれを洗あらふ術すべなきを  
清きよめたまひぬ瑞みづの御靈みたまに。

三

疑うたがひの雲霧くもぎり晴はれて久方ひさかたの  
天あめにのぼらむ身みこそ嬉うれしき。

四

病いたづきに悩なやめる身みをも癒いやします  
瑞みづの御み靈たまの御み稜いづ威かしこ畏こし。

五

頼たより來くる人ひとに清きよめと生いのち命ちをば  
誓ちかはせ玉たまふ三あな五なひの神かみ。

六

罪つみ深ふかき吾わが身みをかくまで憐あはれみ  
て  
いつくしみます救き主みぞ尊たふとき。

第二一三

一

罪つみや汚けがれを悉ことごとく

清きよめの神かみに打うち任まかせ

清きよき御み心こころその儘ままに

惠めぐみの河かはに導みちびかれ

御み靈たまを清きよめ汚しみ點みさへも

殘のこらず洗あらひ清きよめつつ

神かみの御み許もとに頼たのもしく

進すすみゆくこそ有あり難がたき。

二

疲つかれ果はてたる吾わが靈たまも

惠めぐみに強つよき我わが貴き美みの

御み手てに抱いだかれ御み心こころに

よりて誠まことの道おほみちに

進すすみて往ゆかむ惟かむ神がら

心こころ長のど閑かに人ひとの世よを

神かみのまにまに過すごすべし。

三

彌やよひ生の空そらの山やま櫻はなのどかな風かぜに吹ふかれつつ  
こぼるる薰かをり世よに匂におふ命いのちの神かみの珍うづの名なを  
いと麗うるはしく有あり難がたく讚ほめよ稱たたへよ人ひとの子こよ。

四

心こころやさしく頼たのもしく愛あいに富とみます瑞みづ御み魂たま  
清きよき御み性さがを得えさせませ天津あまつ使つかひの宣のり給たまふ  
御み歌うたを學まなび朝あさ夕ゆふに尊たふとき御み名なを稱たたふべし。

第二一四

一

嚴いづの御魂みたまや瑞御魂みづみたま 現あらはれたまふ龍館たつやかた  
寄より來くる人ひとは現身うつそみの きぬ脱ぬぎ捨すてて惟かむながら神  
大道おほぢに進すすむものもあり 又またあやまちの根ねの國くにの  
萱野かやのヶ原がはらを行ゆくもあり。

二

罪つみも汚けがれも皆みな洗あらひ 綾あやの高天たかまの御力みちからと  
選えらませたまへと朝夕あさゆふに 祈いのる誠まことの信徒まめひとは  
夜よも曉あかつきの星ほしのごと いと少すくなきぞうたてけれ。

三

厚<sup>あつ</sup>き惠<sup>めぐみ</sup>の<sup>の</sup>パラ<sup>ぱら</sup>ダイ<sup>だい</sup>ス  
高<sup>たか</sup>天<sup>あま</sup>の<sup>の</sup>原<sup>はら</sup>に<sup>に</sup>來<sup>き</sup>ながら<sup>ら</sup>も

氷<sup>こほり</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>冷<sup>ひえ</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>し  
心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>もち<sup>ち</sup>て<sup>て</sup>大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に<sup>に</sup>

進<sup>すす</sup>み<sup>み</sup>來<sup>く</sup>る<sup>る</sup>こ<sup>こ</sup>そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>た<sup>た</sup>て<sup>て</sup>け<sup>け</sup>れ  
厚<sup>あつ</sup>き<sup>き</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の<sup>の</sup>御<sup>み</sup>光<sup>ひかり</sup>に<sup>に</sup>

照<sup>てら</sup>され<sup>れ</sup>胸<sup>むね</sup>に<sup>に</sup>敬<sup>けい</sup>愛<sup>あい</sup>の<sup>の</sup>  
炎<sup>ほのほ</sup>を<sup>を</sup>も<sup>も</sup>やし<sup>し</sup>惟<sup>かむ</sup>神<sup>なごら</sup>

神<sup>かみ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>よ<sup>よ</sup>か<sup>か</sup>し<sup>し</sup>。

四

此<sup>この</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>暗<sup>やみ</sup>路<sup>ぢ</sup>に<sup>に</sup>行<sup>ゆ</sup>き<sup>き</sup>惱<sup>なや</sup>む  
あ<sup>あ</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>果<sup>は</sup>敢<sup>か</sup>な<sup>な</sup>き<sup>き</sup>人<sup>ひと</sup>草<sup>ぐさ</sup>の<sup>の</sup>

心<sup>こころ</sup>を<sup>を</sup>晝<sup>ひる</sup>に<sup>に</sup>立<sup>た</sup>て<sup>て</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>て  
惠<sup>めぐみ</sup>の<sup>の</sup>光<sup>ひかり</sup>を<sup>を</sup>照<sup>てら</sup>しま<sup>ま</sup>せ

嚴<sup>いづ</sup>の<sup>の</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>や<sup>や</sup>瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>。



五

黄泉路の風の吹き荒び

死の河浪は高くとも

いと安らかに平けく

仁慈の御手に棹さして

天津御國の彼の岸に

つかせ玉へや瑞御靈。

第二一五

一

曲神の伊猛り狂ふ世の中に

希望抱へて神は居ませり。

二

荒浪あらのなみに漂ただよひ迷まよふ吾わが靈たまを  
救すくふは神かみの力ちからなりけり。

三

風強かぜつよく浪なみ立つ夜よ半はも皇神すめかみは  
碇いかりおろして守まもりたまひぬ。

四

世よの終をはり末せまり来きたりし際きはにさへ  
神かみに祈いのねば生いくる道みちあり。

五

幽界かくりよに移うつりし時ときに杖つゑとなり  
力ちからとなるは御神みかみのみなり。

第二一六

一

罪汚つみけがれあら洗きよひ清きよめて由ヨル良ル川ダの  
ほとりに居ゐます神かみに詣まうでよ。

二

皇神すめかみの掟おきてにたへず泣なき叫さけぶ  
聲こゑも罪つみをば拭ぬぐふ力ちからなし。

三

瑞御魂みづみたま幸さちひなくば現世うつしよに  
生いきて榮さかゆる術すべなかるべし。

四

現世うつしよも幽かくれし界よをも知し召しめす  
神かみの恵めぐみに陰かげ日向ひなたなし。

第二一七

一

高熊山の岩窟に 神の御言を蒙りて  
 身も棚しらに仕へたる 昔の業は知らねども  
 今目のあたり仕へます 御業を眺めて皇神の  
 慈愛の心を悟りけり 神は愛なり権力なり。

二

棚なし船に棹さして 冠島沓島に立籠り  
 雨にさらされ風に浴び 朝な夕なに神業に  
 仕へたまひし嚴御靈 罪に苦しむ人草を

清めむために命毛の  
御筆を揮ひやがて來る  
ミロクの教を宣べたまふ  
神は愛なり權力なり。

三

鞍馬の山に立向ひ  
世人の罪を清めむと  
老の御足も健かに  
登らせたまふ雄々しさよ  
昔の御業は見えねども  
残しおかれし神の文  
珍の御聲を聞く度に  
教祖の御心を  
いとも畏くうかがひぬ  
神は愛なり權力なり。

四

杵築の宮に參詣で

十五の御弟子に語られし

生言靈の尊さよ  
火と水土の神業に  
赤心籠めて仕へまし  
神の御術をいや廣に  
いそしみたまひし我教祖  
仰ぐも尊き限りなり  
神は愛なり權力なり。

五

彌仙の山に立籠り  
神の御言を畏みて  
七日七夜の荒行に  
仕へたまひし嚴御魂  
今は御姿見えねども  
のこし玉ひし言の葉に  
大御光は現はれて  
暗き心も澄わたる  
神は愛なり權力なり。

第二一八

一

吾<sup>わが</sup>靈<sup>たま</sup>魂<sup>しひ</sup>を永<sup>とこ</sup>久<sup>しへ</sup>に

惠<sup>めぐ</sup>ませたまふ瑞<sup>みづ</sup>御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>

風<sup>かぜ</sup>吹<sup>ふ</sup>き荒<sup>すさ</sup>み浪<sup>なみ</sup>は立<sup>た</sup>ち

船<sup>ふね</sup>は沈<sup>しづ</sup>まむばかりなる

危<sup>あやふ</sup>き此<sup>この</sup>身<sup>み</sup>を守<sup>まも</sup>らせて

彼<sup>かなた</sup>方<sup>た</sup>の岸<sup>きし</sup>にやすやすと

導<sup>みちび</sup>きたまふぞ有<sup>ありがた</sup>難<sup>た</sup>き

神<sup>かみ</sup>は愛<sup>あい</sup>なり生<sup>いのち</sup>命<sup>ち</sup>なり。

二

吾<sup>わが</sup>往<sup>ゆ</sup>く先<sup>さき</sup>は天<sup>あま</sup>津<sup>つく</sup>國<sup>くに</sup>

御<sup>み</sup>園<sup>その</sup>をのぞきて外<sup>ほか</sup>に又<sup>また</sup>

寄<sup>よ</sup>る隱<sup>かく</sup>所<sup>れが</sup>もあらずらむ

吾<sup>わが</sup>靈<sup>たま</sup>魂<sup>しひ</sup>を皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>に

ゆだねまつりて仕<sup>つか</sup>ふれば

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の御<sup>み</sup>翼<sup>ばさ</sup>に



の 乗せて神國へやすやすと  
導きたまへ瑞御魂  
かみ 神は愛なり生命なり。  
あい  
いのち

三

ひごとよごと  
に 吾靈魂は  
わがたましひ  
つみ 罪や汚れに染れども  
けが  
そま  
きよ 清めの神は御恵と  
かみ  
みめぐみ  
まこと 誠の榮光に充ちたまひ  
さかえ  
み  
れい 靈と肉とを悉く  
にく  
ことごと  
もと 元の如くに清めまし  
ごと  
きよ  
つか 疲れし御魂を慰めて  
みたま  
なぐさ  
みその 御園に導きたまふべし  
みちび  
かみ 神は愛なり生命なり。  
あい  
いのち

四

いづ 巖の御魂や瑞御魂  
みたま  
みづ  
みたま  
いのち 生命の元にましますば  
もと

恵めぐみの露つゆは永久とこしへに　湧わき出いで胸むねに溢あふれつつ  
吾等われらが靈魂みたまをうるほして　渴かわきと飢うゑを止とどめまし  
いや永久とこしへに御榮光みさかえと　平安やすきを與あたへたまふべし  
神かみは愛あいなり生命いのちなり。

第二一九

一

千早ちはや振ふる神かみの恵めぐみに辿たどりつつ  
定めさだなき世よを安やすく渡わたらむ。

二

天地あめつちをたもたせ玉たまふ主きみの御手みては  
など人ひとの子こを守まもらざらめや。

三

皇神すめがみの御座みくらの前まへに跪ひざまづき  
罪つみの重荷おもをおろしやすめよ。

四

神かみの稜威いづあさ朝あさな夕ゆふなに謳うたふ身みは  
嚴いづの御國みくにの民たみとなりぬる。

第二二〇

一

風かぜにの乗のり浪なみの上うへををば歩あゆむとも  
神かみの御業みわざに如い何かでしかめや。

二

永とこ久しへへに朽くちぬ寶たからをを秘ひめ置おきし  
世よ繼つ王をの山やまをを仰あふぎ見みるかな。

三

大空おほそらに醜しこの黒雲くろくも満みち渡わたる  
中なかよりぞ神かみの惠めぐみ照てり來くる。

四

皇神すめかみの御顔みおもてさへも押おしかくす  
闇夜やみよはことに短みじかかりけり。

五

浮雲うきぐもの晴はれ行ゆく空そらを待まてしばし  
朝日あさひ輝かがやく東雲しのめ近ちかし。

第二二一

一

世<sup>よ</sup>の中<sup>なか</sup>の榮<sup>さか</sup>えを如何<sup>いか</sup>で望<sup>のぞ</sup>まむや  
夜<sup>よる</sup>なき國<sup>くに</sup>に救<sup>すく</sup>はせたまへ。

二

禍<sup>わざはひ</sup>の降<sup>ふ</sup>りかかりたる身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>も  
おぢぬ心<sup>こころ</sup>を與<sup>あた</sup>へたまはれ。

三

現世うつしよの旅たび往ゆく時ときも皇神すめかみの  
聖きよき御みあとを踏ふましめたまへ。

四

我わが神かみは親したしきおのが友垣ともがきと  
たよる心こころをもたせ玉たまはれ。

(大正一二・五・八 舊三・二三 加藤明子録)

第二三章 神暉しんき (一五七三)

第二二二

一

黄昏たそがれて家路いへぢを遠とほく迷まよふ時とき  
行く手ゆてを照てらす嚴いづの大神おほかみ。

二

御惠みめぐみの稜威いづの光ひかりに暗やみの夜よも  
いと明あきけくなりじにけるかな。

三



人足ひとあしの行く手ての暗やみを具まづぶきに  
照てらし玉たまはば進すすみ行ゆかなむ。

四

吾わが弱よわき足あしを守まもりて山坂やまさかを  
いと安やすらけく渡わたらせ玉たまへ。

五

定さだめなき世よにさすらひて死しの影かげの  
襲おそひ來きたるを恐おそれ戦をのく。

六

皇神すめかみの恵めぐみの光ひかりなかりせば  
常世とこよの暗やみを如何いかに渡わたらむ。

七

皇神すめかみは野のにも山やまにも永遠とことはの  
光ひかりを投なげて恵めぐみみ玉たまひぬ。

八

古いにしへゆ嚴いづの力ちからを隠かくしつつ  
五み六ろ七くの御代みよを待まち玉たまひけり。

九

永とこ久しへの世よの曙あけほとなりぬれば  
身みの亡ほろび行ゆく人ひともありけり。

一〇

麻あな柱なひの道みちの友とも垣がき寄より集つどひ  
笑ゑみ榮さかえつつ神かみを迎むかふる。

第二二三

一

彌い廣やひろき智ち慧ゑと力ちからの充みち玉たまふ

神かみの言葉ことばに仇言あだことはなし。

二

いと弱よわき神かみの僕しもべも日ひに月つきに  
嚴いづの力ちからを受けうけて榮さかゆる。

三

塵ちりの世よに住すむ人ひとの子こは神事かみごとに  
愚おろかなるこそ歎うたてかりけり。

四

麻柱あななひの教のりの光ひかりの輝かがやきて  
愚おろかなる世よを照てらして洗あらふ

五

足曳あしびきの山やまより高たかき御みめぐみ恵を  
はかり知しるべき術すべもなきかな。

六

和田津見わだつみの底そこよりも深ふかき神かみの智ち慧えを  
暗くらき吾わが身みの如い何かで知しるべき。

七

悩むなや時喜ぶときよろこ時も押並べてとき おしな  
神の恵を夢な忘れそ。かみ めぐみ ゆめ わす

八

御恵の雨に潤ふ人の身はみめぐみ あめ つるほ ひと み  
飢うる事なく渴く事なし。う こと かわ こと

九

友垣や家族親族は離るともともがき つから やから はな  
神の恵は永久にはなれず。かみ めぐみ とは

人の親の愛と恵は限りあり  
限りなきこそ神の御恵。

第二二四

一

月夜見の神の御手にひかれつつ  
浮世を渡る身こそ嬉しき。

二

木枯の吹き荒びたる冬の夜も

惠めぐみの神かみは俱ともにまします。

三

吾わが身み魂たまいと懇ねもころに導みちびきて  
神かみの神み園そのに遊あそばせ玉たまふ。

四

行ゆきなやむ嶮けはしき山やまも谷たに底そこも  
神かみとしあれば安やすく過すぎまし。

五



死しの川かはの荒波あらなみいかで恐おそれむや  
御神みかみは吾われと俱ともにありせば。

第二二五

一

夜よの守まもり日ひの御守みまもりと月つきと日ひの  
惠めぐみの神かみは世よをば導みちびく。

二

荒波あらなみの伊いた猛たけり狂くるふ波なみの上へも

瑞みづの御魂みたまの恵めぐみたふとし。

三

荒波あらなみは虎とらの如ごとくに咆ほえ猛たけり  
迫せまり來くるともいかで恐おそれむ。

四

神かみ吾われと俱ともにいまさば曲津靈まがつひも  
醜しこの大蛇をろちもさやる事ことなし。

五

春はるのひ日のはな花さ咲き匂にほふもと元とつ津くに國へ  
伴ともなひたま玉へ瑞みづのおほ大かみ神。

第二二六

一

揺ゆるぎなき神かみのことば言は葉あなはな麻な柱ひの  
清きよめの道みちのもと基めなりけり。

二

御み言こと葉ばにたよ頼る身み魂たまはスクスクと

常世とこよの暗やみも安やすく渡わたらむ。

三

我わが神かみは吾わが身みを愛あいし親したしみて  
夜よる晝ひるもなく守まもらせ玉たまふ。

四

御み惠めぐみの珍うづの御み手てこそいや強つよし  
吾わが身みに添そひて離はなれまさねば。

五

苦しみの川深くともためはず  
進みて行かむ神のまにまに。

六

喜びの彼方の岸に渡らひの  
神は吾等と俱にありけり。

七

吾身魂研かせ玉ふ御心の  
火は燃えたちぬ彼方此方に。

八

瑞御魂貴の守護のある上は  
火も焼くを得じ水も浸さじ。

九

霜雪の頭に積る老の身も  
神の恵にあたためられつつ。

一〇

變りなき神の恵にある吾は  
いと安らげく榮え行くべし。

第二二七

一

荒野原道にさまよふ吾魂を  
照させたまへ嚴の大神。

二

瑞の御魂惠の露を下しつつ  
暗きに迷ふ魂を潤す。

三

人の身の力となりて夜晝の  
區別もなしに守る我救主。

四

いと安く由良川の波を越え  
珍の聖地に上らせ玉へ。

五

永久に盡きぬ流れは皇神の  
恵の露の溢れしならむ。



第二二八

一

罪つみ深ふかき吾わが現うつ身そみも魂たましひも  
神かみの清きよめによりて安やすけし。

二

世よの中なかの業わざを營いとなむ折をり々をりに  
降くだらせ玉たまふ神かみの御み恵めぐみ。

三

悲<sup>かな</sup>しみの雨<sup>あめ</sup>しきりなる夕<sup>ゆふへ</sup>にも  
いと安<sup>やす</sup>らけし神<sup>かみ</sup>の懐<sup>ふところ</sup>は。

四

親<sup>おや</sup>と子<sup>こ</sup>と遠<sup>とほ</sup>く離<sup>はな</sup>れて住<sup>す</sup>むととも  
いと安<sup>やす</sup>らけし神<sup>かみ</sup>の教<sup>をし</sup>へ子<sup>こ</sup>。

五

陸<sup>みちのく</sup>奥<sup>おく</sup>の深<sup>みやま</sup>山の奥<sup>おく</sup>に住<sup>す</sup>むととも  
神<sup>かみ</sup>としあれば心<sup>こころ</sup>安<sup>やす</sup>けし。

六

假令<sup>たとへ</sup>身<sup>み</sup>は朽<sup>く</sup>ち果<sup>は</sup>つるとも魂<sup>たましひ</sup>は  
常世<sup>とこよ</sup>の春<sup>はる</sup>に安<sup>やす</sup>く住<sup>す</sup>むべし。

七

瑞御魂<sup>みづみたまなさけ</sup>情<sup>なさけ</sup>の御手<sup>みで</sup>にすがりつき  
安<sup>やす</sup>き御國<sup>みくに</sup>に進<sup>すす</sup>む嬉<sup>うれ</sup>しさ。

第二二九

一

世<sup>よ</sup>は亡<sup>ほろ</sup>び身<sup>み</sup>はいつしかに朽<sup>く</sup>つるとも

何かなに恐れおそむ神かみとありせば。

二

許こ々こ多た久くの罪つみの清きよめを得えしと聞きく  
瑞みづの御魂みたまの御聲みこゑ尊たふとし。

三

身からだ體たまも時ときも寶たからも皆みな神かみの  
物ものとし聞きけば捧ささげまつらむ。

四

身體からだは菱しほみて朽くちて失うずるとも  
生命いのちの國くにに甦よみがへり行く。

五

永久とこしへに歡喜よろこび溢あふれ御榮光みさかえの  
盡つきぬは神かみの御國みくになりけり。

六

嚴御魂いづみたまあれます神かみの花はな園そのに  
立たち寄よる人ひとぞ珍うづの御子みこなり。

第二三〇

一

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の<sup>も</sup>と<sup>と</sup>に<sup>あ</sup>つ<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>こ</sup>は  
い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>なる<sup>る</sup>業<sup>わざ</sup>も<sup>やす</sup>安<sup>やす</sup>く<sup>と</sup>遂<sup>と</sup>げ<sup>な</sup>む。

二

緑<sup>みどり</sup>な<sup>す</sup>牧<sup>ま</sup>場<sup>きば</sup>に<sup>われ</sup>吾<sup>われ</sup>を<sup>やす</sup>休<sup>やす</sup>まし<sup>め</sup>  
上<sup>の</sup>ら<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>給<sup>たま</sup>へ<sup>よ</sup>夜<sup>よ</sup>な<sup>き</sup>國<sup>くに</sup>へ。

三

亡<sup>ほろ</sup>び行<sup>ゆ</sup>く吾<sup>わが</sup>魂<sup>たましひ</sup>を呼<sup>よ</sup>び返<sup>かへ</sup>し  
光<sup>ひかり</sup>の道<sup>みち</sup>に導<sup>みちび</sup>き玉<sup>たま</sup>ふ。

四

死<sup>し</sup>して後<sup>のち</sup>醜<sup>しこ</sup>の谷<sup>たに</sup>間<sup>ま</sup>を行<sup>ゆ</sup>くとても  
い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>で恐<sup>おそ</sup>れむ神<sup>かみ</sup>とありせば。

五

御<sup>み</sup>教<sup>をしへ</sup>の惠<sup>めぐみ</sup>あふるる席<sup>むしろ</sup>には  
醜<sup>しこ</sup>の曲<sup>まが</sup>靈<sup>ひ</sup>も集<sup>つど</sup>ふ術<sup>すべ</sup>なし。

六

永久とこしへの神かみの御國みくににある限りかぎ  
身みの幸さいはひの盡つくる事ことなし。

第二三一

一

高たか天原あまはらに永久とこしへに 鎮しづまりゐます大御神おほみかみ  
月つき日の御魂みたまを降くだしまし 世よ人の胸むねを照てらさむと  
嚴いづの言こと靈たま宣のり傳つたへ 彌いや永久とこしへに人草ひとぐさの  
魂たまを守まもりて故郷ふるさとに 歸かへらせ給たまふ御仕組おんしぐみ  
仰あふぐも畏かしこし麻柱あななひの 教柱をしへはしらの大御神おほみかみ。



二

誠まこと一つの麻柱あななひの 教をしへの道みちよ永久とこしへの  
 生命いのちの綱つなよと仰あふぎつつ 嚴いづの御靈みたまや瑞御靈みづみたま  
 宣のらせ給たまへる言靈ことたまを 朝あさな夕ゆふなに畏かしこみて  
 守まもる身魂みたまは御光みひかりの 輝かがやき亘わたる故郷ふるさとに  
 安やすく樂たのしく歸かへるべし 仰あふぎ喜よろこべ神かみの德とく。

三

命いのちの主きみとあれませる 瑞みづの御靈みたまの月つきの神かみ  
 神かみの僕しもべと朝夕あさゆふに 勇いさみ仕つかふる人ひとの身みを  
 守まもらせ給たまひ災わざはひに 歎なげき悲かなしむ折をり々をりも  
 盡つきぬ希望のぞみを與あたへまし 身魂みたまを立たたしめ給たまへかし。

四

無限絶對無始無終

宇宙の主とあれませる

大國常立大御神

その分身と現はれし

嚴と瑞との神御靈

彌永久の生命をば

神の御子なる人草に

與へ給ひし尊さよ

吾等は神の子神の宮

いかなる災來るとも

大御心とあきらめて

只一步も退かず

御神の爲に進むべし

守らせ給へ惟神

御幸を祈り奉る。

(大正一二・五・九 舊三・二四 北村隆光録)

第二四章 神泉〔一五七四〕

第二三二

一

貴美きみの名なを聞きく度たびごとこに悲かなしみも  
怖おそれも消きえてこころ安やすけし。

二

疲つかれたる身みの憩いこひともなり吾わが靈たま魂まの  
餌えさともならむ珍うづの言ことの葉は。

三

瑞御靈嚴の御靈の御名こそは  
めぐみの露の源泉となれ。

四

永遠の生命のもとと生れませる  
月の御靈を仰げ世の人。

五

珍の御名稱ふるごとにうるはしき  
調となりて吾靈勇む。

六

死<sup>みまか</sup>りて神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>傍<sup>そば</sup>に至<sup>いた</sup>りなば  
稱<sup>たた</sup>へまつらむ清<sup>きよ</sup>めの御<sup>み</sup>名<sup>な</sup>を。

第二三三三

一

河<sup>かは</sup>の岸<sup>きし</sup>邊<sup>へ</sup>を行<sup>ゆ</sup>く時<sup>とき</sup>も  
折<sup>をり</sup>にも心<sup>こころ</sup>いと安<sup>やす</sup>し

神<sup>かみ</sup>は艱<sup>なや</sup>みの荒<sup>あ</sup>波<sup>なみ</sup>渡<sup>わた</sup>り行<sup>ゆ</sup>く  
吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>と俱<sup>とも</sup>に在<sup>ま</sup>せば。

二

群むらがる仇あだは猛たけりつつ 人垣ひとがきなして圍かこめども  
吾わが靈たま魂しひを試こころむる もの出いで來きたり永とこ遠とはの  
希のぞ望みを碎くだくことあるも 如何いかでくだかむ瑞みづ御み靈たま  
吾わが身みにそひてましませば。

三

瑞みづの御み靈たまの贖あが罪なひに 重おもき吾わが罪つみ失うせにけり  
思おもひ惱なやみし吾わが靈たまは 甦よりみがつつ益ます良ら夫をの  
如ごとくに勇いさみ奮ふるひ起たつ。

四

嚴いづの御み魂たまの御み力ちからに

天あま津つ御み空そらは捲まき去さられ

大地は崩れやぶる時  
聲を放ちて騒ぐとも  
如何で怖れむ惟神  
清めの神のます上は。

罪に沈みし人の子は  
神の大道を歩む身は  
嚴の御魂や瑞御魂

第二三四

一

瑞の御手をさしのべて

導きたまへ神の國。

二

山路は如何に暗くとも  
浪路は如何に荒くとも  
吾は厭はじ皇神の  
神の御旨と知る上は。

三

力を頼み吾智慧に  
任せて一人世の道を  
選ぶな採るな人の子よ  
ただ何事もかむながら  
神に委ねて大道を  
正しく清く進むべし。

四

生命の泉の杯を  
授けたまひし瑞御魂  
押し頂いて飲む上は  
永久の喜び溢るまで  
充滿しめ給ふぞ尊けれ  
すべてを君にかへしまつり



神かみの御國みくにを開ひらくため  
何なにかはあらむ道みちのため。  
惱なやみも責せめも滅ほろびをも

第二三五

一

苦くるしめる時ときの助たすけは我わが神かみの  
限かぎりも知しらぬ力ちからとぞ知しる。

二

地ちは變かはり山やまは移うつりて海うみとなる

世に住むとても如何でおそれむ。

三

皇神の珍の神都に流れたる  
生命の水は由良の河。

四

瑞御魂其言靈は疲れをば  
いやす生命の清水なりけり。

五

皇神すめかみの御許みもとに集つどひ來きたる身みは  
惱なやみ苦くるしみ消きえて安やすけし。

第二三六

一

旅人たびびとの夕暮ゆふぐれ近ちかき淋さびしさを  
惠めぐませたまふ嚴いづの御光みひかり。

二

悲かなしみの雨あめは夜よの閒まに晴はれわたり

永久とほの喜よろこび朝日あさひと輝かがやく。

三

怯おぢ惑まとふ諸ももの人ひと々びと村むら肝きもの  
こころ鎮しづめて神みち力からに頼たよれ。

四

重おもき罪つみに惱なやみ苦くるしむ人ひと々びとは  
仰あふぎて待まてよ希のぞ望みの光ひかりを。

五

悲<sup>かな</sup>しみの瀧<sup>たき</sup>津<sup>つ</sup>涙<sup>なみだ</sup>をぬぐはれて  
喜<sup>よろこ</sup>び勇<sup>いさ</sup>む晨<sup>あした</sup>は近<sup>ちか</sup>し。

第二三七

一

仇<sup>あだ</sup>人<sup>びと</sup>の攻<sup>せ</sup>め來<sup>きた</sup>るとも荒<sup>あらかぜ</sup>風<sup>の</sup>  
吹<sup>ふ</sup>き猛<sup>たけ</sup>るとも夢<sup>ゆめ</sup>なおそれそ。

二

山<sup>やま</sup>のごと心<sup>こころ</sup>鎮<sup>つ</sup>めて動<sup>うご</sup>かざれ

神かみの守まもりのある人ひとの身みは。

三

亂みだれゆく千ち々ぢの思おもひも安やすらかに  
生いかさせたまふ瑞みづの大神おほかみ。

四

静しづかなる心こころの波なみは永とこし久への  
花はな咲さく岸きしに渡わたす神かみ船ふね。

五

歸<sup>かへ</sup>り來<sup>こ</sup>ぬ死<sup>し</sup>出<sup>で</sup>の山<sup>やま</sup>路<sup>ぢ</sup>も根<sup>ね</sup>の國<sup>くに</sup>も  
神<sup>かみ</sup>としあれば實<sup>げ</sup>にも長<sup>の</sup>閑<sup>ど</sup>けし。

六

吾<sup>わが</sup>靈<sup>みたま</sup>魂<sup>みちび</sup>導<sup>ひ</sup>きたまふ神<sup>かみ</sup>ませば  
暗<sup>くら</sup>き黄<sup>よ</sup>泉<sup>み</sup>路<sup>ぢ</sup>も如<sup>い</sup>何<sup>か</sup>で恐<sup>おそ</sup>れむ。

第二三八

一

言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の清<sup>きよ</sup>き祈<sup>いの</sup>りは皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の

大御心を慰めまつらむ。

二

濁りたる其言靈は皇神の  
清き心を曇らせまつる。

三

皇神は生命と權威にましますば  
醜の言靈怖れたまはず。

四



さりながら醜言靈を宣る時は  
忌ませ玉ふぞゆゆしかりける。

五

幼なき唇をもて幸祈る  
其の言靈ぞ神の榮光。

六

大空の天津神國の御座まで  
響き聞ゆる幼の祈り。

七

罪人の迷ひの道より歸り來る  
網は祈りの言靈ぞかし。

八

喜びの歌を合唱せて天使  
琴掻鳴らし信徒迎ふ。

九

大前に祈る言葉は永久の  
生命を保つ御網なりけり。

天津御國の御門の開く合言葉  
ともなり行かむ嚴の言靈。

第二三九

一

心鎮めて祈る時 靈さえわたりいと樂し  
悩みの多き現世の 羈を離れ大前に  
心の希望を宣り上げて 神の正しき兵士と  
力を得るぞ尊けれ。

二

神かみの御前みまへに平伏ひれふして  
祈いのる時ときこそ樂たのしけれ  
闇やみに迷まよへる吾靈わがたまを  
清きよめて危あやふき魔道まどうより  
神かみの御國みくにの大道おほみちへ  
導みちびきたまふ心地こちすれ。

三

珍うづの御前みまへに平伏ひれふして  
祈いのる時ときこそ樂たのしけれ  
スメル山ざんの上うへよりも  
高たかき心地こちぞせられける  
昇のぼる旭あさひは慰安なぐさめを  
與あたへて千代ちよの喜よろこびを  
身魂みたまにみたしたまふなり。

第二四〇

一

花はなの朝あさ月つきの夕ゆふも皇すめ神かみに  
祈いのらで如いか何かで世よを渡わたり得えむ。

二

大おほ前まへに祈いのる言こと靈たま忽ちまに  
修しゆ羅らの巷ちまたも松まつ風かぜ匂にほふ。

三

吠ほえ猛たける獅し子しの穴あなをもおそれなし  
神かみの御みまへ前に祈いのる此この身みは。

四

疑<sup>うたがひ</sup>の雲<sup>くも</sup>も憂<sup>うれ</sup>ひの時<sup>しぐれ</sup>雨<sup>れ</sup>をも  
祈<sup>いの</sup>りの聲<sup>こゑ</sup>にまたく晴<sup>は</sup>れ行<sup>ゆ</sup>く。

五

大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>の祈<sup>いの</sup>りに勝<sup>まさ</sup>るものはなし  
實<sup>げ</sup>にも奇<sup>くす</sup>しき言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>の力<sup>ちから</sup>よ。

第二四一

一

月の影つきかげ西にしの山邊やまべに薄うすれゆきて  
東ひがしの山やまにあかねさしけり。

二

夕日影ゆふひかげ浪なみのまにまに沈しづみ行きゆて  
東あづまの空そらにのぼる月影つきかげ。

三

御惠みめぐみの露つゆにうるほひ撓たわむ草くさも  
今いまは月夜つきよに甦よみがへりける。

四

飛とぶ小鳥ことり梢こずゑの風かぜも皇神すめかみを  
稱たたへの調しらべに聲こゑを合あはしつ。

五

高熊たかくまの岩窟いはやのまへ前に祈いのりてし  
人ひとの昔むかしをしの偲しのばれてけり。

六

沓島めしま山やま海うみ吹ふく風かぜに曝さらされて  
法のりをつたへし教祖みおやぞ尊たふとき。

七



吾<sup>わが</sup>ために神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>國<sup>くに</sup>に朝<sup>あさ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>に  
祈<sup>いの</sup>らせたまふ主<sup>きみ</sup>ぞ尊<sup>たふと</sup>き。

（大正一二・五・九 舊三・二四 於教主殿 加藤明子録）

第二章 神家（一五七五）

第二四二

一

一<sup>いち</sup>日<sup>にち</sup>の業<sup>わざ</sup>を終<sup>をは</sup>りし黄<sup>たそ</sup>昏<sup>がれ</sup>に

御前みまへに祈いのるこころ樂たのしさ。

二

千早ちはや振ふる神かみをおきては聞きくものも  
なき山奥やまおくに伏ふし歎なげくかな。

三

吾罪わがつみのいと恐おそろしくなりゆきて  
家いへにも居をれぬ胸むねの苦くるしさに。

四

行末ゆくすゑの幸さちを思おもひて朝夕あさゆふに  
珍うづの御前みまへに祈いのりけるかな。

五

何事なにごとも瑞みづの御魂みたまの我主わがきみに  
委ゆだねまつるぞ歡喜よろこびの種たね。

六

假かりの身みに沁しみみ渡わたり來くる寒さむさをも  
神かみを思おもへば暖あたたかくなりぬ。

七

現世うつしよの日影ひかげを後あとに行く時ときは  
瑞みづの御魂みたまぞ力ちからなりけり。

第二四三

一

神かみの御國みくにへ安々やすやすと  
受うくるものとは知しり乍ながら  
慣なれし此世このよをたつ時ときは  
祈いのれよ祈いのれ御前おんまへに  
祈いのりに勝まさる力ちからなし  
親したしきものを後あとにおき  
名残なごり惜をしまぬ人ひとやある

二

人は此世を後にして  
神の御國に旅立し  
いや永久の命をば  
保ちて榮ゆる事の由  
完全に詳細に悟れども  
あとに残りしもの共に  
別れて行かむその憂ひ  
いかで惜まぬ人やある  
祈れよ祈れ大前に  
祈りは誠の力なり。

三

災多き現世の  
假の榮耀は願はずも  
家族親族は飢ゑ渴き  
その惨めさを見るにつけ  
心を痛めず安らかに  
世に住む者はあらざらめ  
祈れよ祈れ大前に  
祈りは誠の力なり

四

艱<sup>なや</sup>みのつきぬ世<sup>よ</sup>に住<sup>す</sup>めど 嚴<sup>いづ</sup>の御魂<sup>みたま</sup>や瑞御魂<sup>みづみたま</sup>  
教<sup>をしへ</sup>の幸<sup>さち</sup>に力<sup>ちから</sup>得<sup>え</sup>て 弱<sup>よわ</sup>き此<sup>この</sup>身<sup>み</sup>も曲<sup>まが</sup>津<sup>つ</sup>靈<sup>ひ</sup>に  
勝<sup>か</sup>ちて行<sup>ゆ</sup>くこそ嬉<sup>うれ</sup>しけれ 祈<sup>いの</sup>れよ祈<sup>いの</sup>れ大前<sup>おほまへ</sup>に  
祈<sup>いの</sup>りは誠<sup>まこと</sup>の力<sup>ちから</sup>なり。

## 第二四四

一

嚴<sup>いづ</sup>の御魂<sup>みたま</sup>や瑞御魂<sup>みづみたま</sup> 命<sup>いのち</sup>の神<sup>かみ</sup>は人草<sup>ひとぐさ</sup>の  
罪科<sup>つみとが</sup>憂<sup>うれ</sup>ひを科戸<sup>しなどべ</sup>邊<sup>べ</sup>の 言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>風<sup>かぜ</sup>に吹<sup>ふ</sup>き拂<sup>はら</sup>ひ  
安<sup>やす</sup>きに清<sup>きよ</sup>め玉<sup>たま</sup>ふべし あゝ諸<sup>もろびと</sup>人<sup>ひと</sup>よ諸<sup>もろびと</sup>人<sup>ひと</sup>よ  
心<sup>こころ</sup>の歎<sup>なげ</sup>きを打<sup>うち</sup>あけて 命<sup>いのち</sup>の御手<sup>みで</sup>に縋<sup>すが</sup>らざる

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の我<sup>わが</sup>貴<sup>き</sup>美<sup>み</sup>は  
憐<sup>あは</sup>れみ玉<sup>たま</sup>ひ許<sup>こ</sup>々<sup>こ</sup>多<sup>た</sup>久<sup>く</sup>の  
慰<sup>なぐさ</sup>め玉<sup>たま</sup>ふぞ有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>き。

弱<sup>よわ</sup>き吾<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>の身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>をば  
悲<sup>かな</sup>しみ艱<sup>なや</sup>みを治<sup>をさ</sup>めまし

二

瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>の我<sup>わが</sup>救<sup>き</sup>主<sup>み</sup>は  
深<sup>ふか</sup>くまし<sup>ま</sup>す神<sup>かむ</sup>柱<sup>はしら</sup>  
仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>の深<sup>ふか</sup>き涙<sup>なみだ</sup>もて

永<sup>と</sup>遠<sup>は</sup>に變<sup>かは</sup>らぬ御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の  
世<sup>よ</sup>人<sup>びと</sup>の吾<sup>われ</sup>を棄<sup>す</sup>つる時<sup>とき</sup>  
叻<sup>いたは</sup>り玉<sup>たま</sup>ふぞ有<sup>あり</sup>難<sup>がた</sup>き。

第二四五

一

村<sup>むら</sup>肝<sup>きも</sup>の心<sup>こころ</sup>清<sup>きよ</sup>めて大<sup>おほ</sup>前<sup>まへ</sup>に  
祈<sup>いの</sup>る誠<sup>まこと</sup>を神<sup>かみ</sup>は受<sup>う</sup>けまさむ。

二

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の充<sup>み</sup>ち足<sup>た</sup>らひたる月<sup>つき</sup>の神<sup>かみ</sup>は  
人<sup>ひと</sup>の祈<sup>いのり</sup>禱<sup>り</sup>を惠<sup>めぐ</sup>ませ玉<sup>たま</sup>ふ。

三

許<sup>こ</sup>々<sup>こ</sup>多<sup>た</sup>久<sup>く</sup>の罪<sup>つみ</sup>や穢<sup>けがれ</sup>を洗<sup>あら</sup>ひ去<sup>さ</sup>り  
清<sup>きよ</sup>く安<sup>やす</sup>けき身<sup>み</sup>となし玉<sup>たま</sup>へ。

四



清きよまりし吾わが身み魂たまをば御み心こころの  
ままに柱はしらとならしめ玉たまへ。

五

朝あさ夕ゆふに祈いのる吾わが身みを幸さちはひて  
彌いや永とこ久しへに守まもらせ玉たまへ。

六

清きよらかにいと安やすらかに世よを送おくり  
天あま津つ御み國くにに歸かへらせ給たまへ。

第二四六

一

現世うつしよの波切なみきり抜ぬけて永とこしへ久へに  
休やすらふ港みなとは神かみの大前おほまへ。

二

薰かんばしき教をしへの花はなの咲さき出いでて  
春はるめき渡わたる神かみの御園みそのは。

三

山川やまかはをよし隔へだつとも神かみにある  
御靈みたまは共ともに親したしく住すまむ。

四

天あまの戸とを開ひらきて下くだり給たまひたる  
巖いづの御魂みたまは生いのち命のちなりけり。

第二四七

一

晝ひるも夜よも謳うたひ稱たへて尚なほ足たらず

思おもひなや悩なやむなやはなや神かみのかみ御み恵めぐみ。

二

吾わが魂たまのたま歡よろこ喜び希のぞ望み生いのち命のちををば  
永と遠はには授さづくさづるる御み神かみ尊たふとしし。

三

瑞みづ御み魂たま慕したひしたてて來きたるる人ひとのひと子このこ  
背せ撫なでなさなすなりり慈いしつくみつく給たまふふ。

四

道<sup>みち</sup>もなき荒野<sup>あらの</sup>ヶ原<sup>がはら</sup>を踏<sup>ふ</sup>み分<sup>わ</sup>けて  
行<sup>ゆ</sup>き惱<sup>なや</sup>みたる身<sup>み</sup>を照<sup>てら</sup>しませ。

五

山<sup>やま</sup>奥<sup>おく</sup>に踏<sup>ふ</sup>み迷<sup>まよ</sup>ひつつ佇<sup>たたず</sup>める  
吾<sup>わが</sup>身<sup>み</sup>を仇<sup>あだ</sup>は嘲<sup>あざけ</sup>り笑<sup>わら</sup>ふ。

六

御<sup>み</sup>惠<sup>めぐみ</sup>の主<sup>きみ</sup>に會<sup>あ</sup>はむと萱<sup>かや</sup>草<sup>くさ</sup>の  
野<sup>の</sup>邊<sup>べ</sup>をば分<sup>わ</sup>けて來<sup>きた</sup>る床<sup>ゆか</sup>しさ。

七

我主わがきみのやさしき笑えみに御使みつかひも  
青人草あをひとぐさも仰あふぎ喜よろこぶ。

八

御言みことば葉はの其美そのうるはしき花はなの香かに  
天地百あめつちももの神かみうた謳うたふ。

九

御惠みめぐみの御聲みこゑを聞きくぞ嬉うれしけれ  
たえぬ命いのちの力ちからと思おもへば。

第二四八

一

皇神すめかみの尊たふとき御名みなを讚ほめ稱たへ  
喜よろこぶ聲こゑは天地あめつちに充みつ。

二

へりくだり人ひとに奢おごらず銜てらはずに  
神かみの心こころをこころとし行ゆけ。

三

生いくるともはた死しするとも只ただ神かみを  
祈いのるこころを授さうけたまはれ。

四

村むら肝ぎもの心こころを清きよめて御み惠めぐみを  
充みたす御み神かみに神かみ倣ならはまし。

五

瑞みづ御み魂たまとく來きたりまして吾わが胸むねに  
清きよき御み名なをば記しるさしめ給たまへ。



第二四九

一

現世うつしよをあとに神國みくにに歸りかへ行くゆ  
身みを照てらしませ嚴いづの大神おほかみ。

二

吾胸わがむねに充みちし喜よろこび今いまは早はや  
御園みそのの花はなとなりなりにけるかな。

三

逃にげ去さりし清きよき靈みたま魂たまよ枉まがを悔くいし  
吾わが身みにとくどく歸かへらせ給たまへ。

四

何なに事ことも皆みな打うち捨すてて世よ柱しらの  
誠まことの神かみに仕つかへまつらむ。

五

麻あな柱なひの道みちの教をしへを諾うべなひて  
綾あやの高た天か原まに勇いさみ進すすまむ。

第二五〇

一

皇<sup>すめ</sup>神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>許<sup>もと</sup>に詣<sup>まう</sup>づる事<sup>こと</sup>ならば  
百<sup>もも</sup>の惱<sup>なや</sup>みを潜<sup>くぐ</sup>りて行<sup>ゆ</sup>かむ。

二

冬<sup>ふゆ</sup>もなく夜<sup>よる</sup>なき國<sup>くに</sup>に上<sup>のぼ</sup>る身<sup>み</sup>は  
神<sup>かみ</sup>に選<sup>えら</sup>れし身<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>なりけり。

三

日は暮れて草の褥に石枕  
淋しき折も神は守らす。

四

皇神の御許に心近づけて  
夢路に入りし時の楽しさ。

五

大空に輝く星の数多く  
恵の露のはかり知られず。

六

瑞御魂みづみたまめぐみののもともとにに近ちかづづきて  
罪つみのの重おも荷にをを卸おろしし休やすままむ。

七

朝あさままだだきき枕まくらにに通かよふふ涼すず風かぜは  
瑞みづのの御み魂たまのの御み息いきななるるららむ。

八

暖あたたかかきき褥しとねのの中なかにに身みをを安やすく  
横よこたたははるるだだもも神かみのの御み惠めぐみ。

九

天<sup>あま</sup>翔<sup>かけ</sup>り神<sup>みく</sup>國<sup>くに</sup>に至<sup>いた</sup>る吾<sup>わが</sup>魂<sup>たま</sup>は  
瑞<sup>みづ</sup>の御<sup>み</sup>魂<sup>たま</sup>ぞ力<sup>ちから</sup>なりけり。

一〇

美<sup>うる</sup>はしき主<sup>きみ</sup>の面<sup>おもて</sup>を拜<sup>をが</sup>みなば  
吾<sup>わが</sup>たましひは甦<sup>よみがへ</sup>るべし。

第二五一

一

小<sup>さ</sup>男<sup>をし</sup>鹿<sup>か</sup>の水<sup>みづ</sup>を慕<sup>した</sup>ひてあへぐ如<sup>ごと</sup>

吾魂は神を尋ぬる。

二

谷川の水清らけく流るとも  
許しなれば如何で汲み得む。

三

仇人に虐げられし吾涙は  
御國に進む稔なるかも。

（大正一二・五・九 舊三・二四 北村隆光録）

(昭和一〇・五・一四 王仁校正)

〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕〕

靈界物語 第六一卷 山河草木 子の巻

終り